

紀要49号

研 究 報 告 書

平成24年3月

尼崎市立教育総合センター

は じ め に

近年、少子高齢化、情報化など社会の変化は急速に進行しています。最近のキーワードとなっている「成熟」社会は、「精神的豊かさや生活の質の向上」が重視され、「平和で自由な社会」といわれ、これまで以上に生活の質が問われる社会とも考えられますが、経済的な見通しがたちにくく、人々の生活や将来への不安が膨らんでいるように感じられます。このような不透明な状況において、人々の教育に対する期待はより大きくなってきています。しかし、教育においても、教員の若年化の進行、国際競争力の向上、新学習指導要領への対応、子どもや保護者との関係づくりなど、対応すべき課題は山積している現状があります。

そうしたことから、子どもの学びを支援する教員は、日々の教育活動を通して自ら課題を見出し、新たな方策を探り体系化する力、理論と実践を統合する力が求められています。これらの力を磨くためには、教員が教科の専門性を磨くことはもちろん、子どもや保護者との関係づくり、情報教育など多分野にわたった実践研究に取り組む必要があると考えます。

平成23年度、当センターでは、国語科教育、社会科教育、算数・数学科教育、外国語活動・英語科教育、教育の情報化、教育相談の6研究部会において、実践研究に取り組みました。算数・数学、社会科教育、外国語活動・英語科教育の3部会においては、小・中学校9年間を見通した小中の連携、基礎学力の向上に向けた指導法、評価を中心に取り組みました。また、国語科研究部会では、PISA型読解力の育成を目指して「比較読み」に挑戦し、教育相談では、学級集団におけるよりよい人間関係づくりを目指す教育実践を、情報教育では、教育の情報化に不可欠な情報セキュリティについて、教員の意識を高める校内研修のプログラム開発に取り組みました。

いずれも、小中連携や基礎学力の向上、人間関係づくり、情報セキュリティなど学校における喫緊の課題を取り上げたものとなっています。各学校・園をはじめ多くの方々に御高覧いただき、今後のそれぞれの取り組みの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、本年度の研究を進めるにあたり、ご多忙にもかかわらず、指導・助言いただいた専任講師の先生方に深く感謝申し上げます。また、校長先生方はじめ、熱心に研究に取り組んでいただいた研究員の先生方、ご協力くださったすべての皆様に厚く御礼申し上げます。

平成24年3月

尼崎市立教育総合センター
所長 西 本 由 美

目 次

1	算数・数学科教育	
	小中連携を軸に算数的・数学活動を考える	1
2	国語科教育	
	確かな言葉の力を育てる指導の研究	21
	—— 文学的な文章・説明的な文章の「比べ読み」を通して ——	
3	社会科教育	
	社会科の基礎学力向上と小中の効果的な連携	49
4	外国語活動・英語科教育	
	子どもの学習意欲を高める効果的な評価方法の研究	75
5	教育相談	
	個や集団の質を高める要因に関する研究	97
	—— 小中連携をふまえた効果的な学習展開を支える関連図の作成 ——	
6	教育の情報化	
	学校情報セキュリティに関する研修モデルカリキュラム開発	125
	—— 研修モデルの開発と評価 ——	

「小中連携を軸に算数・数学的活動を考える」

指導員	仁 科 良 久
研究員	立 花 智 代 (武庫東小)
〃	山 岡 正 明 (浜田小)
〃	藤 井 恵 子 (長洲小)
〃	藤 井 俊 史 (小園中)

【内容の要約】

学力向上と小中連携は本市において大きな課題である。学力の向上という問題考えたとき「中1ギャップ」の解消は急を要する問題である。一方、小中連携において数学科はギャップの比較的大きい教科として取りざたされている。そこで、本年度は算数的活動、数学的活動を通して子どもたちが主体性や目的意識を持って取り組み、算数科、数学科のよさや楽しさを感じさせることができる授業作りを研究の中心に据えることを考えた。これにより、算数科、数学科の円滑な連携の方策を考えたい。

また、「数量関係」を本年度の重点的研究領域として取り上げ、義務教育9年間を見通した活動を考察することにした。

キーワード：小中連携、算数的活動、数学的活動、よさ、楽しさ

1	はじめに	1
2	研究の概要	1
3	実践事例	2
	(1) 実践例1 (小学校1年)	2
	(2) 実践例2 (小学校2年)	7
	(3) 実践例3 (小学校6年)	12
	(4) 実践例4 (中学校3年)	16
4	研究のまとめ	19
5	おわりに	20

1 はじめに

平成23年度より小学校で、平成24年度より中学校において新しい学習指導要領が全面実施される。また、本市においても小中連携の取組が進み、各中学校区で合同研修会等が開かれた。今後は教科部会レベルでの小中連携が進むことが予想される。

一方で、「学力・生活実態調査」の結果から、尼崎市の児童生徒の学力向上が依然として大きな課題であることが明らかになった。

そこで、算数・数学科における小中連携のあり方を考え、新しい学習指導要領に沿った授業の形態を模索するために、本年度は授業研究を主体とした研究を行うことになった。部員が授業を公開し、それを相互に見合ったり、ビデオ撮影したもので交流したりすることで、小学校と中学校の授業の実際を知り、よりよい授業づくりにつなげたいと考えた。

2 研究の概要

(1) 研究のテーマ

「小中連携を軸に算数的・数学的活動を考える」

(2) 「小中連携」について

小中連携については、学力の向上と関連して本市の中心的教育課題としてあげられている。「中1ギャップ」を解消し、義務教育9年間を見通した学校教育を行うことが、求められている。文部科学省は、平成20年1月の中央教育審議会答申において、算数、数学科の改善の基本方針の冒頭で「(ア) 算数科、数学科については、その課題を踏まえ、小・中・高等学校を通じて、発達の段階に応じ、算数的活動・数学的活動を一層充実させ、基礎的・基本的な知識・技能を確実に身に付け、数学的な思考力・表現力を育て、学ぶ意欲を高めるようにする。」と述べ、主体的に学習に取り組む態度を養わせることを意図している。また、具体的事項においては小・中学校の接続に配慮することも明記されている。また、学習指導要領において、算数科・数学科では次の改善点に留意するよう示されている。

- ・発達や学年の段階に応じた反復（スパイラル）による指導を充実（複数学年にわたり指導内容を一部重複させる）
- ・国際的な通用性、内容の系統性の確保や小・中学校の学習の円滑な接続等の観点から、必要な指導内容を充実（小学校：台形の面積等、中学校：二次方程式の解の公式、標本調査等）
- ・学ぶことの意義や有用性を実感できるよう、数量や図形についての知識・技能を実際の場面で活用する活動などを充実（小学校：「算数的活動」、中学校：「数学的活動」）

平成20年度小学校新教育課程説明会中央説明会（全体会）資料

「新しい学習指導要領」より抜粋

これに加え、いわゆる「はどめ規定の原則削除」といった改定も行われ、小中の接続について研究を進めていく土壌が整備されたと考えられる。

そこで、本年度は小中の接続「小中連携」について、小学校、中学校の授業研究を通して研究を進めていくこととした。

(3) 「算数的活動・数学的活動」について

算数的活動・数学的活動については、平成10年学習指導要領から引き続き学習指導要領に示されている。今回の改定では、教科の目標の冒頭に「算数的活動（数学的活動）を通して」と示され、小学校においては領域ごとに指導の具体例が示されるなど、より実践研究を深める必要性が示唆されている。

一方、尼崎市の全小・中学校の児童生徒を対象とした「学力・生活実態調査」における、算数・数学科の結果からは、数学的活用力を身に付けていくことが望まれている。児童生徒の数学的活用力を育むにあたっては、体験的操作活動や思考・表現活動などの「算数的活動・数学的活動」は大きな役割を果たすと考ええる。

(4) 研究経過

今年度については算数的活動・数学的活動を「児童生徒が主体的に取り組むことにより、有用性（よさ）を感じることでできる活動」と位置づけ、「数量関係」領域について研究を進めることにした。

研究を始めるにあたり、小学校、中学校の教科書と指導書を読み合わせることで、指導の系統性を確認する作業を行った。また、他社発行の教科書と内容や配列を比較することにより、取り扱い内容についての理解を深めようと試みた。

次に、学力調査の結果より「数量関係」領域の深化が不可欠だと判断し、重点研究領域を設定した。そこで、小学校2年生で「倍の概念」、6年生で「比例・反比例」、中学校3年生で「2次関数」とした。また、小学校1年生においては、今後9年間の学習を見通して「主体的な教科書の活用、ノート指導」等を軸に研究を進めることとした。

また、研究員が相互に授業を公開して、その様子を映像で記録した。それをもとに、部会において内容を検証するという手法で、取組みの成果と課題を考えることとした。

(1) 実践例1（小学1年生） 個々の思考を深めるノート指導の工夫と展開

1. 実践の概要

小学校における「数と計算」領域指導の主なねらいは、整数、小数および分数の加減乗除の意味を理解し、それらの計算の仕方を考え、適切に用いることができるようにすることである。計算の仕方はその意味に基づいて考える必要があり、計算を活用する場面でも意味の理解を欠かすことはできない。これらを踏まえ、低学年から継続的に指導することが大切である。

一般的に加法や減法の文章題を解く際、「あわせて」「のこりは」などのキーワードに着目し、それらを根拠にたし算やひき算立式する。しかしこれでは、完全に問題把

握しているとはいえない。例えば、「あとで7枚もらったので、あわせて16枚になりました。はじめに何枚もっていたでしょう」のような問題では、キーワードに着目すると、つまづいてしまうからである。そのため、問題場面の数量関係を図などで表し、それらによって、立式を意味づけることが大切である。

一方、PISA 全国学力・学習調査の結果では、「数と計算」領域について、小数の除法等の一部の結果を除いて、おおむね良好な結果が出ている。しかし、「数学的リテラシー」の結果分析において「我が国では、『できるだけ暗記しようとする』生徒の割合は極めて少ないが、『学んだ数学を日常生活にどう応用できるのかを考え』、たり『数学と他の科目で習った事柄を関連づけようと』したり、『ここで学ぶことはなんなのかをはっきりさせることからはじめ』たりする生徒の割合も少なかった。」という考察がなされている。

そこで、本単元では繰り下がりのある減法の説明を「立式の根拠を図や式、既習事項をもとに説明する」活動の出発点ととらえる。

本単元では、10までの数の合成・分解の学習（「いくつといくつ」）を生かし、半具体物を用いた活動などを通して繰り下がりのある減法の計算の仕方を考え、それらの計算が確実にできることを主なねらいとしている。

第3単元「いくつといくつ」では、数の構成に関して10を分解的にとらえたり、10を合成的にとらえたりする学習をしている。また、第5単元の「のこりはいくつちがいはいくつ」では繰り下がりのない1位数－1位数の減法で、減法が用いられる場合やその意味について学習した。第6単元「10よりおおきいかず」では、数の構成を和や差でとらえられることによって、2位数を含んだ簡単な場合の計算もできるようになっている。第10単元「3つのかずの計算」で学習した和差混合計算も、本単元の学習を進める上で重要となる。

このような既習事項をいかし、繰り下がりのあるひき算を学習していく。

既習事項の10よりおおきいかずでは、10をひとまとまりにとらえ、考えることで、20までの繰り下がりのない減法に取り組んだ。繰り上がりのあるたし算においては、その学習内容を踏まえて、10のまとまりを意識しながら学習を進めてきた。そのため、本単元においても10のまとまりを意識することが期待される。

また算数ブロックを使い、その操作活動を通して、計算の方法を理解してきたが、繰り上がりのある加法では、ノートに自分の考えた計算の仕方をまとめた。児童は大変意欲的に取り組み、言葉や図や絵を入れながら、それぞれの思考過程をまとめていた。そして、ノートに書いたことを黒板に書き、他の児童に説明するという方法も取り入れた。しかし、黒板に書くことができるものの、説明不足なこともあり、クラス全体に伝わらないこともあった。その時は、書いたものを見て、他の児童が説明したり、教師が児童に確認したりしながら説明した。

繰り下がりのある2位数－1位数の減法は、今後の学習の基礎となる重要な内容である。計算の仕方には減加法と減々法がある。教科書では最初に減加法を学習し、次

に減々法のアイデアがでやすい式を取り上げて、児童一人ひとりの実態に応じて扱えるようにしている。

本単元にあたっては、10のまとまりを意識させ、10のまとまりから減数をひくことを理解させることが大切である。そのため、算数ブロックを用いた活動も取り入れる。最初に減々法にならないように9をばらさずに引くことを伝え、減加法を中心に指導していく。筋道を立てて、計算の仕方を説明できるようにし、減加法の理解を確かなものにしていく。

繰り上がりのあるたし算の学習では、学習後に答えを導く過程をノートに書き、黒板で説明する学習をしてきた。式で書くだけでなく言葉や図、絵を用いて説明することで考え方がより明確になり、数学的な思考が深まっていくと考えた。本単元においても、繰り上がりのあるたし算の学習過程をいかし、導入部で計算の方法を考えさせ、考えたことをもとに説明させる。導入部では、自分の考えを持つことで、多様な計算の方法を知り、わかりやすく説明するため計算の方法を考えさせたい。

一方で、小中連携を考える視点として「教科書を主体的に読む子ども」「既習事項をもとに自分の考えを説明できる子ども」「算数、数学の知識を、日常生活に生かそうとする子ども」を育てたい。

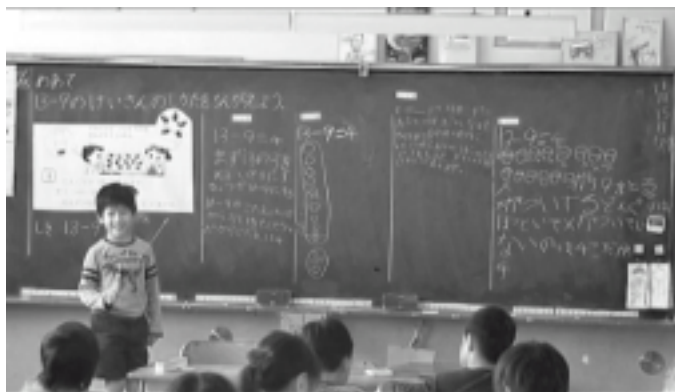
指導計画の中では、自らの考えをノートに書き、説明を行うこと。次の時間では、理解した内容の中でもう一度復習し、理解を深めることを取り入れた。このことにより、児童たちの説明の能力が高まり、さらに理解を深めることにつながると考えた。

指導計画（12時間）

次	時	主な学習内容	評価規準
1	1	・13－9の計算の仕方（減加法）を考える。	既習の加減計算や数の構成を基に13－9の計算の仕方を考えようとしている。【関心・意欲・態度】
	2	・13－9の計算の仕方（減加法）を理解する。	10のまとまりから減数を引くことを理解することができる。【知識・理解】
	3	・14－8の計算の仕方を考える。 （減加法）	前時までの学習を踏まえ、14－8の計算の仕方を考え、説明しようとしている。【関心・意欲・態度】
	4	・14－8の計算の仕方を理解する。 （減加法）	10のまとまりから減数を引くことを理解し、説明することができる。【知識・理解】
	5	・12－7の計算の仕方を考える。 （減加法） ・計算練習をする。	減加法による計算をすることができる。【技能】 減数が8～5の場合でも10のまとまりから1位数をひけばよいことを理解

			することができる。 【知識・理解】
2	1	・ $12 - 3$ の計算の仕方（減々法）を考える。	被減数を10のまとまりといくつと考える図、絵や言葉を使って説明することができる。 【数学的な考え方】
	2	・ 減加法と減々法の混じった問題に取り組む。	11～18から1位数を引く繰り下がりのある減法計算は、被減数を10のまとまりといくつに分けて考えればよいことを理解することができる。 【知識・理解】
3	1～5	・ 計算カードを用いた減法計算の練習をする。	11～18から1位数をひく繰り下がりのある減法計算を確実にできる。 【技能】

本時は指導計画第一次に行った。 $13 - 9$ の計算の仕方を考えノートに書き、自分の考えを明確にさせようという思いのもと取り組んだ。まず、教科書の絵を提示し、児童に答えを導く計算式を立てさせた。ここまでは、どの児童も、文章題から式を導くのは得意であるので、問題なくできた。次に、 $13 - 9$ の計算の方法を考え、ノートに図や絵や言葉や式、どのようなものを用いてもいいので、自分の考えを書くように指示をだした。これは、くり上がりのあるたし算のまとめのときに行った学習形態である。しかし、そのときは、もう計算の仕方や、内容理解が深まった後だったので、ノートに書くことには抵抗がなく書くことができた。しかし、本時は、くり下がりのひき算の導入であったためか、どのようにノートに書いてよいのかわからず、質問が相次いだ。絵で書く児童もいたが、文章中の具体物ではなく、抽象物や記号を書いた児童もいた。これは、前のたし算の際に式だけだったので、どんな絵でもよかったからである。文章題の内容を把握して、さらにそれをノートに書くという作業は1年生にとって難しかったようである。ノートをお互いに見合うということも行った。そして、その後黒板にノートの内容を4名の児童が書いた。 13 の3からとる児童と 13 を10と3に分け、10から9をとる児童に分かれた。黒板に書いた児童はそれぞれ、自分の考えを、指し棒を使いながら、クラス全員に向けて、説明を行った。その説明の中で、1番多くの児童が納得できたのは、どんぐりの絵を用いて、その絵を引く数9の分だけ、斜線をするという方法であった。目で見ても、一番はっきりと



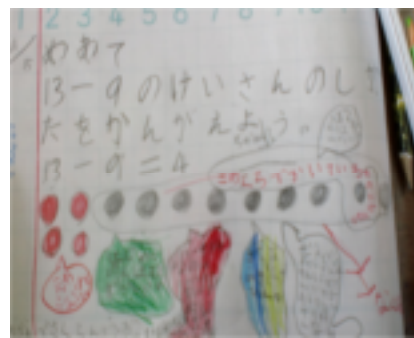
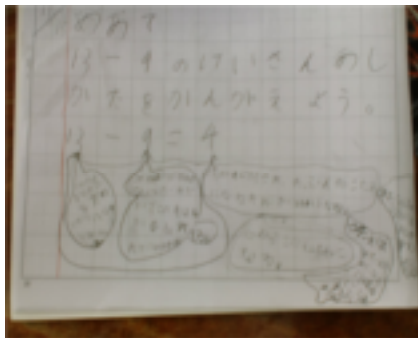
わかる方法が児童たちにはわかりやすい方法だったのであろう。まだ、数字という抽象化されたものでは、理解ができず、具体物、特に、絵が児童たちの理解を助ける方法である。どんぐりではなく、どんぐりの数だけ、丸を書いた児童もいた。「そのような考え方があるのだ」、「そのようにノートを書けばいいのだと」いうことを児童たちは理解したようである。

2. 実践の考察

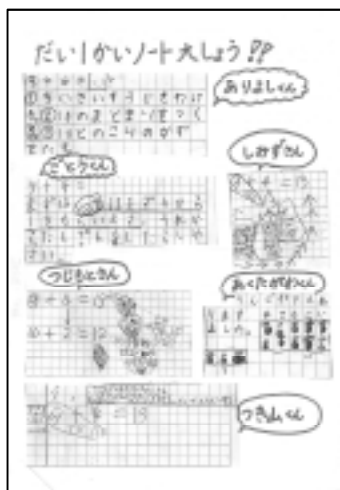
ノートに書くことはたし算のまとめでやっているのですが、問題なく、取り組めるかと思っていたが、まだ導入段階では、自分の考えをどのようにまとめてよいのか、どのようにノートに書いたらよいのかわからず、手が進まない児童が見られた。だが、黒板に書かれた図や絵を見たり、説明を聞いたりすることで、「あのようによまとめればわかりやすい」、「〇〇くんの方法はとってもわかりやすかったので授業が終わってもう一度ノートに書いてみたよ」などの感想がノートに書かれていた。また、授業中はノートに書けなかった児童も、黒板に書かれた方法を見て授業後に自分のノートに書いていた。ノートをまとめていくとき、どのような方法で行うべきなのか、経験がなければわかりづらい。そのため、本時を通して、今回学習したような説明の仕方や考え方をを使うと、自分だけでなく、周りもわかりやすいと感じたのではないだろうか。この学習を終えた後も、ノートを書いたり、黒板を使って説明したりすることに興味を持ち、意欲的に算数の学習に取り組む姿が見られた。

3. 今後の課題

今後もこのノートを活用した算数的活動を続けていきたい。なぜなら、ノートに書くことで、自分の考えを明確にすることや、どのように説明すべきかを考える必要が生じるからだ。また、他の児童が説明するときには、自分の考えと比べたり、その児童の考えを理解しようと努めたりしなくてはならない。つまり、必然的に自ら考え、話し、聞くということができるのである。しかし、まだ児童たちは1年生である。そのため、算数の中では、どのような考え方がよいのか、説明の仕方がよいのか、教師が指導していく必要があるだろう。この活動を1年生から続けていくことで、主体的に考えることのできる子どもになるのではないだろうか。



《問題》《式》《考えの根拠》を書き記し、自分の考えを整理する。



【ノート大賞】

指導の要点や、児童自身の考え方が書けているノートを紹介する。

考え方や、使用する図や表のバリエーションも紹介できる。

(2) 実践例2（小学校2年生） 教具を使った算数的活動

1. 実践の概要

学習指導要領によると、関数の考え方を育てるためには、

- ①「ある場面での数量や図形についての事柄が、ほかのどんな事柄と関係するかに着目すること」
- ②「2つの事柄の変化や対応の特徴を調べていくこと」
- ③「見出した変化や対応の規則性を様々な問題の解決に活用し、その思考過程や結果を表現したり説明したりすること」

の3点が大切にすべきことと表記されている。このなかで、①の素地にあたる部分が、2年生で学習する「かけ算」にあたる部分であり、その中でも特に倍概念、九九表の観察であると考え、研究を進めた。

<算数的活動について>

この単元での算数的活動のポイントは3つある。

- ①子ども自身が進んで課題に取り組む活動であること。

指導にあたり、児童が実際に手に取って触れるように教具を準備した。次に、算数が苦手であると思っている児童も、遊び感覚で学習に取り組めるようにした。また、教具を工夫することで主体的に課題に取り組むことを目指した。かけ算の導入の時間には、算数ブロックを使って考えさせた。立体を用いたことで、どの児童も容易に課題を解決できた。2年生という発達段階を考えると画用紙など紙で作った教具では、手先の不器用な児童には扱いづらい。キズネール棒に関しても同様のことが言える。また、倍の関係を教科書に掲載されている長さではなく、色で表すことができるので倍の関係を表す時に抽象化しやすい。そのことが、次の学年で学習する内容につながりやすいと考える。

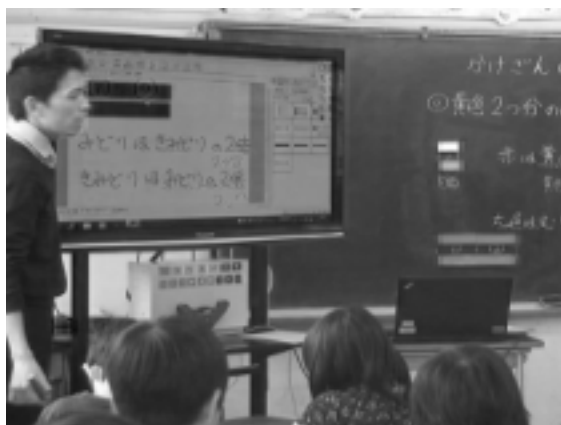
- ②学年の系統性を意識したものであること。

「倍概念」は、教科書によって扱いに差がある。今回は、かけ算の導入時に1時間、

九九をすべて学習した後に1時間扱いとして授業を進めた。小学校高学年、中学校での「数量関係」の内容を意識した時に、根本となるものが九九であり、倍概念である。2年生の九九の単元で詳しく学習することで、かけ算の意味と合わせて覚えておくことに意味がある。4年生以降の内容に直結するものである。特に今回は、倍概念の構成、九九表の活用で焦点を当てていきたい。

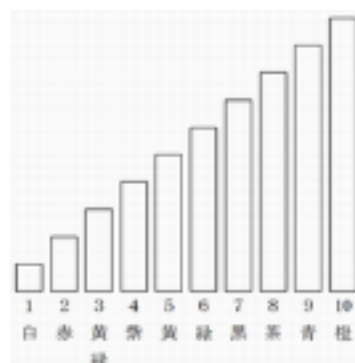
③ICTの活用

児童が進んで発表するためには、間違えても大丈夫、説明してみよう、という意識にすることが必要であると考えた。今回は、九九の学習が始まると同時に教室の大型テレビを電子黒板として利用している。メリットは、問題をフラッシュカードのように提示することができること、書きこんでも書きなおすことができること、子どもの意見をすぐに図などに表し反映できることがあげられる。また、児童の理解度に合わせ、問題をすぐに作成できるメリットも持ち合わせている。



《ICT（電子黒板）の活用》

※キズネール棒…1～10までの数を表した10種類の棒で構成され、それぞれに別の色が付けられている教具



2. 実践の考察

児童は、1年生で学習した乗法の素地的な経験にあたる、2とび、5とび、10とびの数え方をもとに指導を始めた。

「かけ算1」では、はじめに、九九の2、3、4、5の段と倍の定義を学習した。ここでは、一つ分の数に着目し、そのいくつ分をとらえることは、導入で扱うのみとした。「1台に3人ずつの4台分で12人」と考えるのではなく「2が4セット」など

と単位を省略し、半具体物に移行しやすいようにした。また、具体物を用いて生活で生かせるような問題を数多く解いた。電子黒板を使用し、類題を多く解くことで全員の理解が深まった。

「かけ算2」では、6. 7. 8. 9. 1の段を学習したあと倍の理解、九九の拡張、活用の流れで学習を進めた。「かけ算1」で具体物を用いて学習したことを受けて、半具体物であるアレイ図を中心に扱った。九九の答えの求め方は、同数累加のみではなく、「かけ算(1)」で学習した九九を使い、分配法則や交換法則といったきまりを使って九九を作った。また、アレイ図から $2 \times 4 = 2 \times 3 + 2$, $2 \times 4 = 2 \times 2 + 2 \times 2$ といった数式を使って表す活動を重点的に行った。2年生には一見、難しいようであるが、授業で繰り返すうちに定着した。電子黒板を使って、フラッシュカードのように問題を提示することで、算数に苦手な意識を持っている児童も身乗り出して数を数える姿が見られるようになった。

倍概念については、単位とする大きさのいくつ分というとらえ方をしてきたかけ算の意味を基盤に指導した。1つの大きさの何倍かにあたる大きさを求める場合に乗法が用いられることを理解するようにする。「かけ算1」で、倍概念の基礎を学習し、九九の学習時には、適宜、倍を使った問題にも取り組んでいる。ここでは、基準量が変われば比較量も変わることを、連続量を表す表し方として倍があることを指導した。特に「3cmが3つ」＝「3cmの3倍」ということを重点的に押さえた。

本時の展開

目標 ある量の何倍かにあたる量を求める時にかけ算を用いることを理解する。

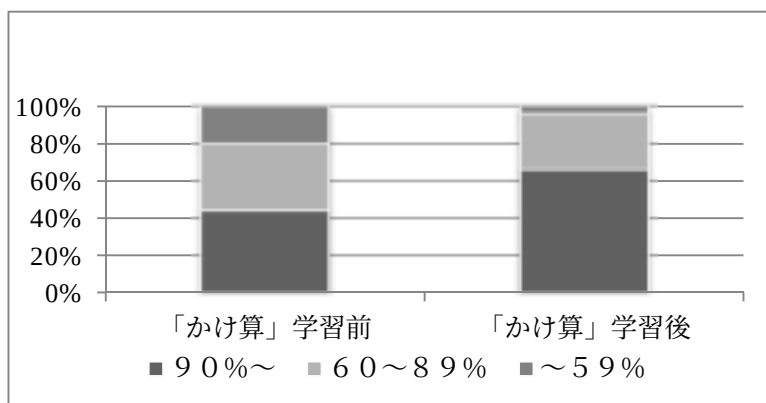
	学習活動	指導上の留意点と支援	評価の視点
ふ り か え る つ か む	○前時で学習した「倍」について思い出す。		
	倍を用いて2つ分は2倍と表すことを想起させる		
	○課題を知る。		
	かけざんのだい2のひみつをさぐろう		
	○白色の棒の2つ分の長さを作る。 白色を2つ並べる。 赤色1本と白2つ分が同じ。 →赤は白の2倍	白が1つ分の長さであることをおさえておく。 かけざんの考え方が使われていることを意識させる。	
	○紫は赤の何倍の長さか考える。 紫は赤の2つ分の長さ →2倍の長さ	基準量（白→赤）が変わっていることをおさえる。 児童が自ら活動するように実際に並べて手を動かすよう声かけをする。	

とから、九九を超えたかけ算の数字を帰納的に見つけることができていた。

単元の終盤には、日常生活で九九を生かすことができる問題を扱った。特に文章題で言葉にこだわるのではなく、意味を理解させることに重点を置いた。その場面を想像し、考える、○などの半具体物に置き換えるなどのことを指導した。

	A	B	C
9～10月実施テスト4回分の平均人数	13	10.7	6
① %	43	35	20
かけ算単元のテスト3回分の平均人数	20	9	1.3
② %	66	30	4
②－①	23	▲5	▲16

《平均得点の推移》



《テストの得点率の変化》
(クラス30名)

これまでのテストと比較してみると、C 評価の人数が大幅に減少した。この結果から見ると、算数の授業が難しい、苦手だと思っていた児童が授業に参加し始めたことが考えられる。遊びながら勉強するということを授業で取り入れ、授業改善をはかっていくことが学年間の接続の段差を低くすることにつながる。それが、小中連携につながっていくと考える。

3. 今後の課題

数量関係における小中連携の基本となるのが九九であり、倍の概念が特に重要である。倍の学習は、かけ算の延長として扱うのではなくしっかりと素地として形成しておく必要がある。しかし、教科書によって扱いの比重は異なっている。どの程度まで2年生で扱うか、基準量が変われば比較量も変わることをどのように2年生に指導していくかを考えていくことが今後の課題である。

(3) 実践例3 (小学校6年生) 「変化」「対応」の考えを育てる関数の授業展開

第6学年では、比例の関係を、文字を使って一般化することや、表を横だけではなく縦で見ることで、文字を変数として扱うことに意識して取り組み、授業展開を工夫することで、中学校へのつながりがよりスムーズになると考え、今回の実践に取り組んだ。

1. 実践の概要

(1) 単元 「比例をくわしく調べよう」

(2) 目標 伴って変わる2つの数量の関係を考察することを通して、比例や反比例の関係について理解し、関数の考えを伸ばす。

【関心・意欲・態度】 比例の関係に着目するよさに気づき、比例の関係を生活や学習に活用しようとする。

【数学的な考え方】 比例の関係を表や式、グラフに表し、特徴を一般化してとらえ、身の回りから比例の関係にある2つの数量を見出して問題の解決に活用することができる。

【技能】 比例や反比例の関係にある2つの数量の関係を式、表やグラフに表すことができる。

【知識・理解】 比例や反比例の意味や性質、表やグラフの特徴について理解する。

(3) 指導にあたって

【教材について】

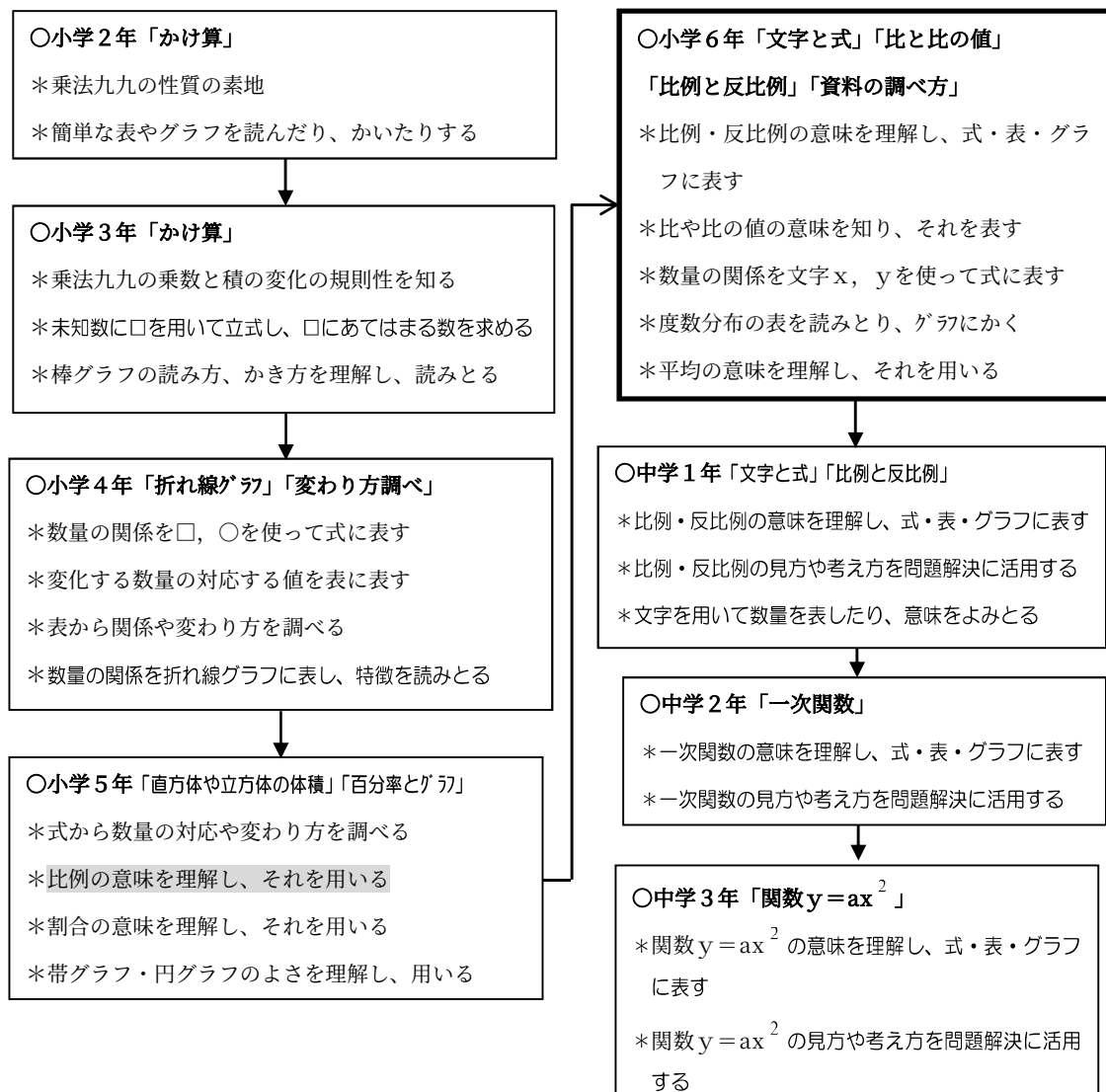
「数量関係領域」の内容の系統性を探るため、尼崎市立小・中学校で採用されている東京書籍の教科書の単元を取り上げ、単元と基礎的な内容をまとめた。図1(次項)はそれを示したものである。その図から、算数の学習を基礎・基本として、関数関係を理解し、関数の見方や考え方を活用して問題解決することが中学校数学科の学習内容であることが分かる。

この学習内容のつながりから小学校においても表やグラフ、式に表すことが重要だと考えられる。さらに、伴って変わる2つの数量の「変化」と「対応」に着目させて指導することも重要である。

本単元では、これまで学習してきた関数的見方をまとめるという観点で、比例関係になっている2つの数量を中心に考察し、関数的見方や考え方を一層伸ばすことをねらいとしている。比例の関係を明確に捉えさせるためには、既習である比例の定義をふり振り返りながら、いろいろな変わり方を調べることから学習を始めていく。2つの数量が比例の関係にあるとき、この関係を「 $y = \text{決まった数} \times x$ 」という文字を使った式で一般的に表現し、既習の比例の内容を式から見直す。その後、表を用いて比例の性質についてまとめていく。さらに、比例を日常生活の場面での問題解決に利用し、その有用性を味わわせる。単元の後半では、反比例を扱う。比例の学習と対比させる

ことで、反比例の意味を学習し、比例の理解を深める。中学校数学科では抽象思考の学習が多くなる。そのため、数の概念についての理解や文字を用いて考えることのよさを感じる経験は欠かせない。そこで、小学校高学年では、伴って変わることの意味やそれらの数量の関係を表やグラフ、式に表すことのよさを理解させることが大切である。

(図1)「数量関係領域の単元と基礎的な内容」



【指導にあたって】

そこで本単元では、「2つの量の関係について根拠を示して判断する力」を身につけさせたい。比例・反比例の関係を判断する根拠として、第5学年までは表やグラフの特徴を用いたが、本単元では、式も根拠としてあげられることを示していく。

中学校では、比例の関係について、式の形に着目して関数を調べることができるよ

うにすることが必要であるとされている。数量の関係を表に表していくことのよさは、表を見れば一目で数値が分かることである。その反面、表に表されていない数値は分からない。しかし、数量の関係を式で表しておけば、 x がどんな数でも（小数でも、分数でも、大きな数でも）計算で求めることができる。表を横に見たり縦に見たりしながら変化や対応の規則性を読み取る活動を通して、比例や反比例の関係を文字と言葉を使った式で表すことが有用であることを感じさせたい。

本単元では、伴って変わる2つの数量を意識させ、関係づけて見ることを大切にしたい。これまでの学習では、表を横に見る「変化」についての学習を中心にしてきたが、中学校とのつながりを考え、表を縦に見ていく「対応」の学習も大切にしたい。そこで本時では、表にない数値や1, 2, …と整然と数字が並んでいない表の値を調べる算数的活動を通して、表を縦に見る見方を伸ばしていきたい。

(4)本時の学習（3／17時間）

1.本時の目標

種類の違う2つの事象が混ざっている表を、きまりを使って分ける方法について考え、比例の表や式について理解を深める。

2.準備物

ワークシート 表（黒板用，児童用）

3.本時の展開

学習活動	児童の活動（○活動 *予想される子どもの反応）	指導上の留意点（○） と評価（●）
1 前時までの学習を ふり返る。	○前時までに学習した内容を 思い出す。 *どういうときに比例する と言えるか。 $y = \text{決まった式} \times x$ の式で表すことができる。	○本時の課題解決につながる 内容を確認する。 ○ $y = \text{決まった式} \times x$ を確認する。
2 問題場면을把握する。 *重さの違う2種類の 針金の表が混ざってし まいました。もとの表に もどしましょう。	○問題解決の見通しを持つ。 *表を縦に見る。 *重さを長さでわってみる。 *表を横に見る。	○比例のきまりが使えるこ とを確認し、めあてにつなげ る。
比例のきまりを使って、いろいろな考えを交流して表を完成させる方法を考えよう		
3 問題解決をする。	○自力解決をする。	

	*分けた根拠も書きながら、表を完成させる。 ①㉔ $27 \div 3 = 9$ ㉕ $40 \div 5 = 8$ ⑤ $54 \div 6 = 9$ ㉖ $72 \div 8 = 9$ ㉗ $80 \div 10 = 8$ ㉘ $108 \div 12 = 9$ ㉔㉕㉖㉗は決まった数が9 $y = 9 \times x$ ㉕㉗は決まった数が8 $y = 8 \times x$ ②㉔㉕㉖㉗は長さに9をかけると重さになる。 ㉕㉗は長さに8をかけると重さになる。 ③㉔㉕は長さが2倍のとき、重さも2倍になっている。 ㉔㉗は長さが4倍のとき、重さも4倍になっている。 ㉔㉕㉗は仲間である。 ○話し合いをする。 *自分の考えを発表する。	○表を縦に切った表を配布し、分ける作業をしながら考えさせる。 ○きまりを見つけられない児童には、前時の学習にあてはめながら考えさせる。 ●[考]比例のきまりを使って、分け方を考えることができる。 ○自分の考えの根拠を発表させる。 ○言葉の式に表させる。 ○表を縦に見た方が、「速く・簡単・正確に」解くことができることを確認する。
4 種類別の表を完成させる。	○種類別の表に整理する。	
5 適用問題に取り組む。	○表のあいているところを求める。	●[技]比例のきまりを使って表のあいているところを求めることができる。

2.実践の考察

今回の実践を行った結果、表を縦で見る「対応」の見方で考えようとする児童の割合が全体の8割ほどになった。これまで、表を横で見る「変化」の見方で考えがちだった児童も、「対応」の見方が必要であることに気づくことができた。このことから、意図的に対応の見方を育てる指導計画が必要であると考ええる。

3. 今後の課題

対応の見方の必要性については、気づかせることができた。しかし、対応の見方の有用性については、十分に感じさせることができなかった。「変化」と「対応」それぞれの見方の具体的事例を一層丁寧に扱っていくことで、対応の見方で考えることのよさを味わわせる指導の工夫が必要である。

【ワークシート】
算数「比例をくわしく調べよう」 6年()組()
お名前 _____

① 長さの違う2種類の鉄線の長さが違ってしまっている。
下の表の値へ空欄をもとの表にもどしなさい。

長さ x (m)	3	5	6	8	10	12
長さ y (g)	27	45	54	72	90	108

長さ (m)

 長さ (g)

(自分の考え)



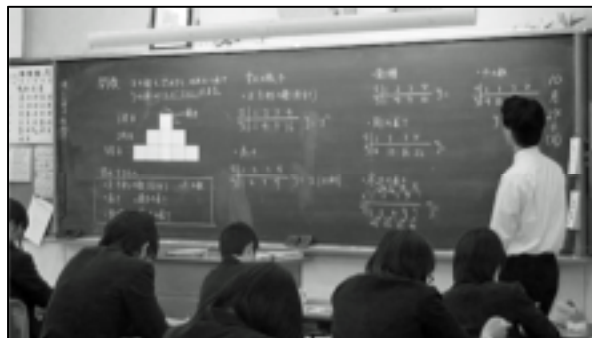
(4) 実践例4 (中学校3年生) 数学的活動を生かした2次関数の導入

小学4年生では、身のまわりのともなって変わる量を表などに表して関係を調べている。さらに、小学5年生では、表を用いて2つの数量の対応や変わり方を調べて簡単な式で表すことを学習している。小学6年生では、比例の意味を理解し、数量関係を○、△などを用いて式に表したりグラフに表すことにより、変化の様子を読み取ったり、特徴を調べ学習してきた。また、中学第1学年では比例・反比例を題材にして、数量関係を表や式やグラフに表すことにより関数の基本的な概念や性質の理解を深める学習をし、中学第2学年では比例から1次関数に発展し、これを通じてより一層、関数の概念や性質の理解を深める学習をしてきた。これらの小学校から中学校にかけて学習してきた内容をもとに生徒が自ら観察し問題点を整理したりすることにより規則性を見いだしたりまた、その規則性を用いることにより結果を予測したりすることにより、「数量関係」の領域における今までのまとめの学習となるような授業展開を工夫したい。

1. 実践の概要

上記をうけて身のまわりの事象の中で実際に図をかく作業や図の多面的な観察を通じて、伴って変わる数量の変化をいろいろ見つけられるような事象を用いることにより生徒自身が変わる数量に関心をもち、変化の様子を読み取り、それらの特徴を調べることにより、2つの数量の変化の様子を帰納的、演繹的、類推的に考察することによって、自からの力で解決するために「じっくり考える」ことにより内的な数学的活動を行う学習場面を設定する。また、このような数学的活動における学習場面で小学校から中学校第2学年までの既習内容を基に考えさせることにより、スパイラルな学習活動が可能となり小中連携を軸とした連続性、系統性をふまえた授業展開ができると思

われる。また、この学習活動では
中学校第3学年で学習する直線的
に変化しない数量関係についても
考察することにより今後学習する
「関数 $y = ax^2$ 」についての導

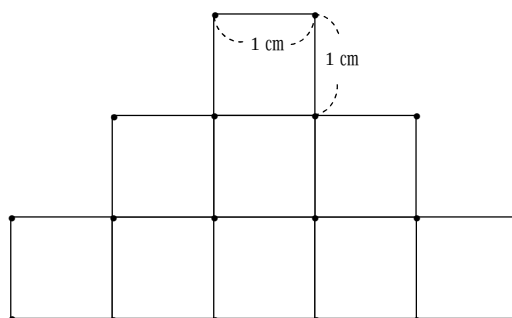


入場面として位置づけることにより、さらに関数の概念や性質の理解を深めることができる。その上で、自力で得た考えを发表或し、他人の考えを聞くことにより自分の考えを深めたり新たな考え方に気づかせたい。

(授業記録)

学習活動	指導上の留意点	評価等
1. 関数の意味を確認する。	・ 比例・反比例・1次関数等の学習では式、表、グラフを用いて学習してきたことを確認させる。	

問 次の図のように正方形を並べていくとき、段の数が増えるとともに変化する数量をみつけよう。



学習活動	指導上の留意点	評価 (○) と支援 (・)
2. ともなって変わるものをみつける。	・ 生徒から出てくる言葉に対して共通の理解をさせるためにそれぞれの言葉を定義する。	
3. ともなって変わる様子を表に記入する。	・ 表を利用することにより、ともなって変わる様子が考察しやすいことを捉える。	・ 表が記入できない生徒にはともなって変わる様子が理解しやすいものから取り組むように指導する。 ○ともなって変わる数量関

		係に関心をもち,その関係を考察しようとする。 (関心・意欲・態度)
4. 表を利用することによりともなって変わるものが,どのように変化するかを考察する。	・ 考察した結果を記述できない生徒に対しては教師に対して口答で説明させる。	○ともなって変わる数量関係の特徴を読み取ることができる。 (数学的な考え方)
5. ともなって変わるものが,どのように変化するかを発表する。	・ 聞き手が発表者の説明を理解できたかどうかを確認する。	○考察した結果が適切であるかどうか振り返り考えることができる。 (数学的な考え方)
6. ともなって変わる様子を式で表現する。	・ 比例・1次関数の式を確認する。	

2. 実践の考察

このような問題は小学校でも扱えるような身近な事象であったため,生徒達は内容がわかると見通しを持って主体的な学習活動を行なうことができた。その中で気づきがある生徒にとっては活動の楽しさ,活動の良さを味わうことができじっくり考えることで自分の考えを深められたように思われる。さらに,「ともなって変わる」ものが生徒達自身の活動によって多く発見されたのだが,この授業では自分の考えを相手に伝える場面を設定しているため「ともなって変わる」ものに対してある生徒が考えていることと,それを聞いている生徒との間で言葉の共通理解をはかることにより思考の広がりや深まりが円滑になった。

また,生徒からは多くの「ともなって変わる」ものが発見されたが,すべてのものの変わる様子を表で調べてしまうと時間がかかるため,今回の課題である小中連携をふまえ,さらには今後学習する関数 $y = ax^2$ をふまえ教師が主導で調べるものを決定した。そのことにより既習事項を振り返らせながら筋道をたてて考える力を伸ばす機会になった。特に「数量関係」の領域ではこのような具体的操作や体験を通して関数関係の理解を深めていく必要があると感じた。ここでは,導入場面としてこのような活動をすることにより「比例」・「反比例」・「1次関数」という言葉を聞いただけで課題に取り組むことをためらう生徒にも考え関係を探り規則性を見出そうとする様子が見られた。

また,既習事項を振り返る場面では,多くの生徒が比例関係になるものに対しては変化の様子を表から読み取ることができそれらを式で表すことができていた。これは中

学第1学年での比例に対する表の見方・考え方が定着しているように思われる。このような考え方が定着しているため、さらに関数 $y = ax^2$ の関係になるものに対して、表を横に見るのではなく、縦に見ることにより容易に関数関係を見出していた。このことを考えると小学校から具体的な事象を用いて、ともなう変わる数量関係に対して考察する能力を養い伸ばすことができる授業展開を考えていくべきだと考える。

3. 今後の課題

まず、今回の授業を通じて生徒が1次関数の関係になる数量関係を表で表すことができたがそこから式に表すことができた生徒が少なかった。この場合は表を横に見て1次関数を扱うのは中学第2学年となっているが、このような数量関係になっている事象を中学校だけでなく小学校でも扱うことができたらずまず生徒の数も減っていたと思えた。このように x が1ずつ増えたら、 y の増え方が一定の割合で増えているのか、 x と y の対応の様子はどうなっているのか、小学校で習っている表の見方で横に見るのか、縦で見るのか、ということが大変大事になっていることが分かる。各学年でいろいろな見方があると繰り返し指導していくことで、このような力を養うことができると思われる。

また、今回の授業を通じて数学的活動を取り入れた授業を実施したが、教師主導型になりかけていた部分も多々みられた。このような数学的活動を取り入れた授業展開の工夫の仕方も、もう少し考えないといけないと感じた。今後このような視点からもアプローチは可能である。

4 研究のまとめ

【小中連携について】

本年度の研究をふり振り返り、研究員の実践や検討の中で「系統性を重視した授業づくりの大切さ」を感じた。算数科、数学科はスパイラル学習である。スパイラル学習とは「同じ題材を何度も用いて、学習する内容のレベルを上げながら理解を深化させる学習法。」である。学習のレベルを上げながら深化させていくためには、各学年段階で「これまで何を身に付けてきたのか」「何を身に付けさせるのか」「次に身に付けるのは何か」を適切に把握し、判断して授業計画を作成していくことが重要である。そして、それは義務教育9年間を見通したものでなくてはならない。



研究を進めるにあたり、小学校と中学校の研究員が教科書を読み合い、指導法や指導内容について相互に理解を深められたことは、9年間を見通した研究を進めていく

うえで大変有意義であった。また、授業公開を通して各発達段階における「ノート指導」や「板書計画」などの実際に触れることができたことも大きな収穫であった。

一方で、研究員の中でも、義務教育9年間の系統性についての意識が希薄であることが明らかになった。これについては、全市的な問題として考えていくべきであろう。教科レベルでの小中連携の取組は、この現実を解消し、より確実な小中の接続を実現させていくことになるであろう。

【算数的活動・数学的活動について】

算数や数学の『よさ』を子どもたちに実感させるために、操作や思考、表現などの算数的活動・数学的活動を、常に意識して授業に取り入れることが重要であると感じた。

今回の学習指導要領の改訂で、これまでの作業を中心とした外的な活動に加えて、分析や思考などの内的な活動についても含まれることになった。これにより、活用方法が広がり、授業の中での取り入れ方にも幅ができた。たとえば、授業の手立ての中に、「既習事項だけで解決することに不便さを感じる」というような体験的な活動を取り入れ、解決策を考察させる、といった試みができる。自分なりの考えを持ち、それを交流させ、その上で、新しい知識を習得させる。このような活用を行うことで、より実感を持って「よさ」を感じさせることができる。

この「体験」「思考」「交流」「習得」という一連のサイクルを、各領域において、義務教育9年間を見通して構築していくことが最重要課題であると考えた。

【おわりに】

今年度は「数量関係」を中心に研究を進めてきた。しかし、「図形」などその他の領域についても考察を深めていく必要性を強く感じた。尼崎の子どもたちの学力向上について、具体的な提言を行っていくために、今後も継続して実践研究を続けて行きたい。

《引用・参考文献》》

『横浜版 学習指導要領 ― 算数科，数学科編 ―』

(横浜市教育委員会 ぎょうせい 2009)

『横浜版 学習指導要領 指導資料 ― 算数科，数学科編 ―』

(横浜市教育委員会 ぎょうせい 2009)

『小学校 学習指導要領の解説と展開 算数編』(安彦忠彦・金本良過 教育出版 2008)

『中学校 新学習指導要領の展開 数学科編』(清水静海 明治図書 2009)

『中学校数学科 中1ギャップを撃退する指導のアイディア 36』

(川上公一 明治図書 2010)

確かな言葉の力を育てる指導の研究

— 文学的な文章・説明的な文章の「比べ読み」を通して —

指導主事	樋口	博子	
研究員	吉田	大	(長洲小)
〃	山崎	佳奈	(小園小)
〃	大久保	智	(園田南小)
〃	本	風海子	(潮小)
〃	坂本	肇	(下坂部小)

【内容の要約】

本年度は、複数の文章や作品を読み比べることを通して、「読む力」を高める指導を試みる。「読むこと」の学習において「比べ読み」は、児童の「読む能力」を高めるのに効果的な学習活動である。文学的な文章・説明的な文章の読み比べから、気づいたことを伝え合い、評価していく活動のあり方について検討し、授業実践に取り組んでいく。

キーワード：PISA型読解力、自己評価・相互評価、比べ読み

1	はじめに	2 1
2	研究の内容	2 1
3	実践事例	
	(1) 実践例 1 (小学校 1 年)	2 3
	(2) 実践例 2 (小学校 1 年)	2 8
	(3) 実践例 3 (小学校 4 年)	3 2
	(4) 実践例 4 (小学校 5 年)	3 6
	(5) 実践例 5 (小学校 5 年)	4 1
4	研究のまとめ	4 8
5	おわりに	4 8

1 はじめに

昨年度の研究では、PISA型読解力に着眼し、理解・評価しながら読む力を高めるための授業実践に取り組んできた。研究にあたっては、「3つの重点目標」を設定し、具体的な内容を示し研究を進めた。また、各学年重点教材を設定することでPISA型読解力に対応出来る読解指導を行った。その結果、テキストに書かれている情報を正確に取り出したり、本で調べた資料をもとに話し合ったりすることは出来るようになってきた。また、情報機器を上手に活用し、話題提示をし、図表やデーターを分かりやすく説明できるようになってきている。しかし、テキスト解釈やテキストに書かれている知識から、自己の考えや経験と関連づけながら話し合うまでには至らなかった。国語科においては、「文章を読み解く力」に加えて、「考える力、感じる力、想像（創造）する力、表現する力」「文章を理解し、評価する力」を、「読むこと」を通して総合的に高めるための授業改善が求められている。本年度は、複数の文章や作品を読み比べることを通して、「読む能力」を高める指導を試みる。題材、内容、ものの見方や考え方など、様々な観点から「比べ読み」を行うことで、自分の考えを深めるだけでなく、文章そのものを比較する力を養う事が出来るを考える。これらのことから、文学的な文章・説明的な文章の「比べ読み」を通して「読む力」を高める指導方法の研究を深めることとした。

2 研究内容

(1) 研究のテーマ

「確かな言葉の力を育てる指導の研究」

—文学的な文章・説明的な文章の「比べ読み」を通して—

(2) 研究テーマ設定の理由

学習指導要領の国語科の目標の中に「国語を適切に表現し、正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や創造力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め、国語を尊重する態度を育てる」とし、伝え合う力の指導を重視している。

「伝え合う力」とは、人間と人間との関係の中で互いの立場や考えを尊重しながら、言語を通して適切に表現したり、正確に理解したりする力である。また、情報化・国際化の社会で生きて働く国語の力であり、人間形成に資する国語科の重要な内容となる。言葉で伝え合う力を育むためには確かな言葉の学びが必要となる。本研究では、言葉の素晴らしさや豊かさを実感させるために、言葉を大切にし、自らの言葉を磨き活用することを目指し「確かな言葉の力を育てる指導の研究」として上記のテーマを設定した。

〈サブテーマ〉—文学的な文章・説明的な文章の「比べ読み」を通して— においては、

- ①自己の考え方や経験と関連づけることができない。
- ②テキストを理解・評価しながら読むことができない。
- ③学習者ひとり一人の学びに深まりがない。等の課題が明らかになったことを受け、「読解力向上」のための「比べ読み」を組み入れた授業実践を計画する。

(3) 「比べ読み」の学習効果

多くのものに触れ、その特徴を自らの力で発見し、その発見に意味を与えてくれる人が存在することで、効果的な学習が成立する。「比べ読み」は、次の3つの学習効果が期待できる。

1. 2つ（複数）の学習材を読み比べ、共通点・相違点に目が向き、そこから学習が出

発し、話し合うことができる。

2. 学習者によって多様な気づきが生み出され、話し合いによって学習課題を設定し、学習者にとって実感のある課題が設定できる。

3. どちらが好きか、どちらの方が読みやすい等と言った、個人的な読みが広がり、様々な考え方の一つとして捉え話し合うことができる。

(4) PISA型読解力に着眼した「読解力」を高める3つの重点目標

〈目標1〉 テキストを理解・評価しながら読む力

- ・目的に応じて理解し、解釈する能力の育成
- ・評価しながら読む能力の育成
- ・課題に即応した読む能力の育成

〈目標2〉 テキストに基づいて自分の考えを書く力

- ・テキストを利用して自分の考えを表現する能力の育成
- ・日常的・実用的な言語活動にいかす能力の育成

〈目標3〉 様々な文章や資料を読んだり、自分の意見を述べたり書いたりする力

- ・多様なテキストに対応した読む能力の育成
- ・自分の感じたことや考えたことを簡潔に表現する能力の育成

《PISA型読解力》

自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力

【情報の取り出し】 テキストに書かれている情報を正確に取り出す。

【解 釈】 書かれた情報がどのような意味を持つのか理解・推論する。

【熟考・評価】 テキストに書かれていることと知識・考え方・経験等との関連との結びつけができる。

【PISAに対応できる教材と比較読みを組み入れた読解指導】

PISAに対応できる読解指導	各学年における学習教材
子どもたちひとり一人のユニークな読みを表現させる。 〈繰り返しの文の比較読み〉 〈2冊以上の本の読み比べ〉	「くじらぐも」1年 「ずっと、ずっと大すきだよ」 「あいしているから」 物語文
具体的な根拠をあげて、本の内容や文章表現が効果的かどうか評価したり、批判したりさせる。〈写真や資料の比較〉	「だれもがかかわり合えるように」4年 説明文
子どもが主導し、グループ学習で子ども同士が討論して課題を解決する協同的な読解をさせる。 〈物語文における構成の比較〉	「大造じいさんとがん」5年 「わらぐつの中の神様」 物語文
本・雑誌・インターネット・新聞・テレビ・漫画等多様なメディアを活用する。 〈新聞記事の比較読み〉	「思いを伝える方法を考えよう」5年 —新聞記事を通して— 説明文

3 実践

(1) 実践例1 (1年)

1. 児童の実態

本学級の児童は、とても活動的である。話をすることも大好きで、先生や友達に進んでお話しする児童が多い。しかし、学習場面では、積極的に発表する児童は、全体の3分の1程度で、あまり発表しない児童が全体の6分の1程度いる。算数の計算問題や国語の「あ」のつく言葉集めなどの学習活動では、発表する人数も増えることから、あまり発表しない原因は、間違ったり、友達と違っていたりすることを不安に感じているのだと考えられる。

また、説明文の学習では、書いてある情報を正確に取り出せる児童が多い一方で、物語文の学習では、登場人物の行動や気持ちの変化が理解できていない児童がいる。原因として、物語の中で起こる出来事と出来事を関係付ける力が、まだ育っていないからだと考えられる。

2. 実践の概要

児童の実態をふまえ、今年度は、出来事の因果関係を見つけながら読むことのできるように、物語文を通して PISA 型読解力を身につけさせる実践を行うことにした。

本研究のテーマにある「確かな言葉の力」を、書かれている事柄を理解し、解釈し、熟考していく力であると考えた。

これを、物語文の学習に当てはめて考えると、描かれている作品世界や出来事を理解し、解釈し、そして、作品を評価したり、自分のこれからの読書生活へ生かしていったりすることだと考えられる。そのため、以下のように物語文の学習に取り組んできた。

まず、物語の設定や出来事を正確に捉えることができるような活動を取り入れた。たとえば、グループで役割読みをすることで、どんな人物が出てくるのか明らかにしたり、挿絵を正しく並び替えることで、出来事の順序が正確に分かるようにしたりしてきた。

次に、自分なりに物語文を読んで解釈することができるような活動を取り入れた。たとえば、登場人物の行動について、自分も同じような経験がないか考え、書かせたり発表させたりしてきた。そうすることで、自分の経験と物語をつなげて考えることができるようになり、より物語を深く読めるようになると考えた。

最後に、作品を評価できる活動を取り入れた。1年生という発達段階を考慮して、無理なく作品を評価できるように、2つの作品を比べながら評価できないかと考えた。そのため、以下のようなねらいで、2つの物語文の比較読みに取り組んだ。

まず、比較読みすることで、1つ目の作品で習得した、登場人物や出来事などの情報を正確に取り出す力を、2つ目の作品で活用させることができる。

次に、比較読みすることで、2つの作品の解釈をより深めることができると考えた。

最後に、比較読みすることで、例えば「自分は、1つ目の作品の方が好きだ。なぜなら・・・」というように、作品を評価することができると考えた。また、数ある物語の中から自分の好きな話を選んで読んでいくことは、子どもたちの読書生活の中で、1つの大事な力になると考えている。

【授業実践】

第1次で扱っている「ずうっと、ずっと、大すきだよ」は、少年「ぼく」と愛犬「エルフ」の心の交流を描いた物語文である。この教材には、以下のような長所があると考えた。

- ①児童と同年代の男の子が語りかけるように常体で書かれており親しみやすい。
- ②挿絵から「ぼく」と「エルフ」の成長の様子がよくわかり、物語の展開を理解しやすい。
- ③動物と子どもの交流が、児童にとって身近な事柄であるため、自分の経験と比べて考えやすい。

しかし、この長所の③は、個人差があると考えた。ペットを飼っている、または、飼った経験のある児童にとっては、身近な事柄であるが、飼ったことのない児童にとっては、「ぼく」と同化しにくいと考えた。

そこで、第2次では、「あいしているから」を取り上げた。この教材は、もぐらの「モールくん」と、モールくんが拾った鳥のひなの心の交流を描いた物語である。

「ずうっと、ずっと、大すきだよ」と「あいしているから」には、次のような共通点・相違点がある。

共通点

- ・どちらも動物を飼うお話である。
- ・キーワードが似ている。
(「大すき」と「あいしている」)
- ・主人公は、ペットに様々なお世話をする。

相違点

- ・前者は主人公が幼い頃からのペットだが、後者は、拾ってくる。
- ・前者は、死ぬまで飼うが、後者は逃がしてやる。

2つの作品を比べることで、上記のような共通点・相違点が明らかとなり、それらをもとにどちらが好きかを考えることで、作品に対する解釈が深まったり、評価をしたりすることができると考えた。

単元構成 (全12時間)

第1次	第2次	第3次
●「ずうっと、ずっと、大すきだよ」と出会う。(1) ・動物を飼った経験について話し合う。 ・「ずうっと、ずっと、大すきだよ」の範読を聞く。 ●「ずうっと、ずっと、大すきだよ」を読む。(4) ・登場人物を読み取る。 ・物語の大体をとらえる。 ・「ぼく」と自分を比べて、	●「あいしているから」と出会う。(1) ・「あいしているから」の範読を聞く。 ・登場人物を読み取る。 ●「あいしているから」を読む。(2) ・物語の大体をとらえる。 ・「あいしているから」の終わり方を考える。 ・「ずうっと、ずっと、大す	●「おはなしどうぶつえん」の活動を知り、学習の見通しを持つ。(1) ●「おはなしどうぶつえん」の準備をする。(2) ・やり方を知る。 ・紹介したい本を選ぶ。 ・紹介カードを書く。 ・紹介の練習をする。 ●「おはなしどうぶつえん」を楽しむ。(1)

似ていると思ったことを話し合う。 ・「ぼく」に何と言ってあげたいか考え、話し合う。	きだよ」と「あいしているから」を読み比べ、話し合う。	・友達に絵本を紹介する。 ・読んでみたいと思った本、紹介の感想について交流する。
--	----------------------------	---

3. 実践の考察

①物語に対する理解が深まる。

一般的に、物語を読む際、小学校の低学年段階では、自分に身近な事柄をえがいたお話しか読むことができないが、学年が上がるにつれて、ファンタジーや伝記などの自分とはかけ離れた事柄をえがいたお話も読めるようになってくる。

そのため、低学年の児童は、自分の生活に結びつかない事柄について、自分勝手な理解や解釈をしていることも多い。

例えば、第1次で、以下のような発問に対して、次のような答えがあった。

発問

ぼくの「きもちがすこし良かった」のは、どうしてだろう。

児童1

みんなエルフに大好きだよって いってなかったけど、ぼくは大すきっていったから

児童2

もう（エルフが）わるさをしないから。

児童1と同じような意見の児童が16名いた一方で、児童2と同じような意見の児童が2名いた。児童1は、登場人物の行動と気持ちの変化の因果関係を正確に捉えることができているが、児童2は、捉えることができていない。

そのため、第2次では、物語の後半の内容を伏せておき、子どもたちに考えさせるという活動を組んだ。そうすることで、行動と気持ちの因果関係を捉えさせようとした。

実際には、次のような発問で、次のような答えがあった。

発問

お話の続きを考えよう。

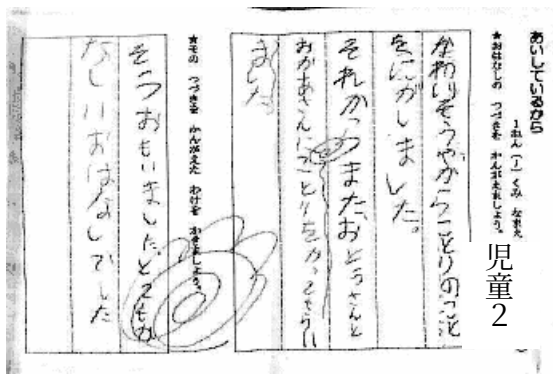
児童2

にがして、パパとママにことりをかってもらった。（資料①）

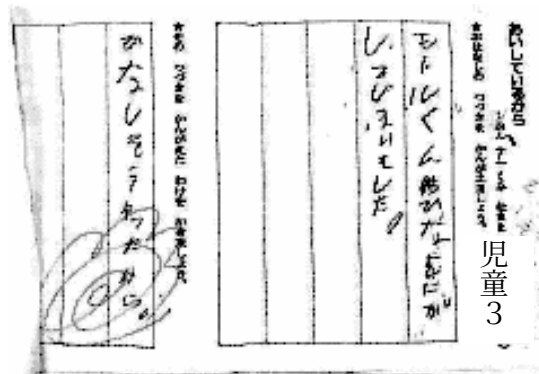
児童3

かわいそうだから、ひなをにがしてあげました。（資料②）

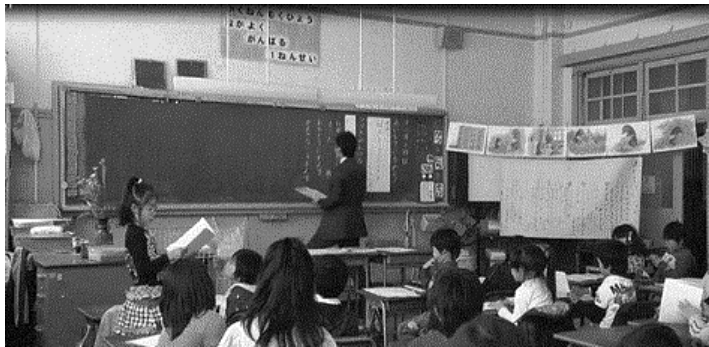
上記の児童2と児童3は、第1次で、人物の気持ちの変化と行動の因果関係を的確につかめていなかった。第2次では、読んだ部分のお話から想像をふくらませて、その続きを考えることができている。



資料①



資料②



写真①

前時で予想させた物語の
終わり方を発表させた。

②物語を評価することができる。

第2次では、「ずうっと、ずっと、大すきだよ」と「あいしているから」の似ているところや違うところを探させた。それぞれ、次のような考えが出た。

似ているところ

- ・どちらもペットが大好き。
- ・両方いっしょにあそんでいる。
- ・モールくんは、逃がした時に泣いたところとエルフが死んだ時に泣いたところ
- ・モールくんとぼくのペットがいなくなるところがにています。
- ・「大すぎだよ」と「あいしているんだもん」というところが、ちょっと似ている。
- ・ひなもエルフも大きくなっていくところ
- ・犬の散歩とモールくんとおじいちゃんの散歩。

違うところ

- ・モールくんは、つかまえたけど、ぼくはかっている。
- ・モールくんは、にがして、ぼくは、犬がしんでしまった。
- ・「ずうっと、ずっと、大すきだよ」って言ってやっているところと、言ってないところ。

上記のように、似ているところに比べると、違うところを見つけるのは、子どもたちにとっては難しかったといえる。例えば、「登場人物の行動について、似ているところや違うところを見つける」など、観点を示して考えさせればよかったと考えている。

そして、上記のような共通点・相違点を見つけさせた後に、「では、自分はどちらの作品が好きなのか」ということを考えさせた。

「『あいしているから』は、最後逃がすだけだから、感動しなかったけど、『ずっと、ずっと、大すきだよ』は、エルフが死んでしまって感動したから、『ずっと、ずっと、大すきだよ』の方が好き。」「『あいしているから』は、とりかごを作ってあげたから、『あいしているから』の方が好き。」というような意見が出た。



写真②

どちらが好きか、理由を添えて発表している。

4. 成果と課題

成果

- ・ 比べ読みをすることで、最初に学習した物語の展開をもとに、後で学習した物語の展開を予想しながら読むことができた。
- ・ 2つ目の作品を、子どもたちに予想させながら読ませたことで、全文を読ませた時に、起承転結の結の部分をしっかり読み取ることができた。
- ・ 第2次で、物語の終わり方を予想させたことで、自分の経験とつなげて考えることができた。

課題

- ・ 2つの作品の似ていることから、共通している中心人物の気持ちを導き出すことができなかった。まだ十分に抽象的な思考ができないためと考えられる。
- ・ 物語のはじめの場面同士を比べるなど、部分的に比較することができたが、物語の展開の仕方を比べるなど、全体的に比較することは難しかった。
- ・ 1年生とはいえ、物語の展開の仕方を比べるには、1年間を通して、物語のはじめ、なか、おわりを捉えるなどの読み方を指導する必要がある。

（２）実践例２（１年）

１．児童の実態

本学級の児童は何にでも進んで取り組み、もっとこうなりたいと向上心を持っている。ほめられるともっと頑張ろうとするので、入学してから様々な場面で伸びを感じられる。朝の会の司会や、手を止めて話を聞くことなど、継続してやってきたことはほとんどの児童ができるようになってきた。しかし、定着することが難しいこともある。たとえば、発表となると、声が小さくなり、元気がなくなってしまう。自分の考えを進んで発表できる児童は１０名程度であり、ほとんど発表しない児童が５名いる。その理由が「恥ずかしいから」「合っているか分からないから」「間違えるのがいやだから」である。読むことについては、毎朝している音読で、リズムにのって大きな声で月々の詩を読むことができている。これまでに学習した、「はなのみち」「おむすびころりん」「おおきなかぶ」「ゆうだち」では、覚えるくらいまで読み込み、動作をつけて楽しく読もうとする児童もあり、興味を持って取り組んでいた。しかし、一人で読むとなると、自信がなくなり、声がだんだん小さくなり、自己表現が乏しくなってしまう児童が多く、課題であると感じる。

２．実践の概要

実態より、児童の好きな音読を取り入れ、自分の考えに自信を持たせたいと考えた。くじらぐもは、体育の時間に現れたくじらのくもが、子どもたちのまねをしたり、子どもたちがくじらに飛び乗ろうとかけ声をかけたり、くじらぐもに乗って空の上で歌を歌ったり空を旅したりと、夢のあるお話である。登場するのが児童と同じ１年生であることで親しみを感じられるので、想像もふくらんでいこう。そして、読み方には決まった答えがないので、話すことが苦手な児童でも発言ができる。

本単元では、PISA型読解力の特徴である「比較」を取り入れ、二つの力を身につけたい。一つ目は、第三場面の中で出てくる、繰り返しの言葉の読み方の違いの比較、二つ目は、自分と友達の意見の比較である。本文や挿絵、また、友達の考えをもとに、自分の意見を伝えることのできる力を育みたいと考える。

【授業実践】 「こえにだしてよもう くじらぐも」

①第１場面（P４，P５）

挿絵と本文から、体育の時間であることや、準備体操をしている様子を読み取った。くじらや子どもたちの動きを実際にやってみて、「一、二、三、四」をどのように読めばよいかを話し合った。はじめは、「いち、に、さん、よん。」と読む児童や、間をあけずに「いちにさんし」と読んでいる児童がいたが、「体育で体操するときにはどのようなかけ声かな。」と助言し、自分たちの経験を思い出させることで、「短く切って読む。」「早く言ったら動けない。」などの意見が出た。さらに、「『とまれのあいずをすると・・・』の「とまれ」の部分をはやく読む。なぜならゆっくりだったら止まれない。」という意見が出て、それに共感する児童もいた。

②第2場面（P 6， P 7）

前時の発展として、音読をするときの3つのポイントを指導した。

- 1， こえの大きさ
 - 2， よむはやさ
 - 3， まのとりかた

これらは、登場人物やそれらの気持ちによってかわってくることを、また、間の取り方については、「，」「。」を守って読むことも大事だが、時にはそれにとらわれず、空けたり詰めたりして読んでもいいということを説明した。「 」のところは、自分が本当にお話ししているように読んでみようと言った。

その後、何名かに読ませ、工夫したところを尋ねた。

- C 1 「まわれ、みぎ。」を工夫して、「まわれー、みぎっ。」と読みました。体育の時間を思い出しました。

C 2 「よしきた。くものくじらにとびのろう」のところを速く読みました。なぜなら、楽しい気持ちだからです。

次に、「おうい。」と「ここへおいでよう。」の言葉が2回ずつ出てきていることに気付かせ、誰が言った言葉か、どんな風に読むかを考えさせた。

- C 3 二回目の「おうい。」はくじらが言ったことだから、低い声で読む。くじらは大きいから。

C 4 聞こえるように言うから、大きな声で読む。

などの意見が出た。

その後、個々で練習してから数名の児童に読ませたあと、友達の音読を聞いてどう思ったか、また自分と似ているところや違うところがあったら発表してみようと投げかけた。

- ・〇〇さんの読み方が、本当にくじらとこどもたちがいるみたいで上手だった。
- ・自分もくじらのところを低い声で読んだ。

などの感想が出て、自分と友達の考えの似ているところを見つけ出せるようになってきた。

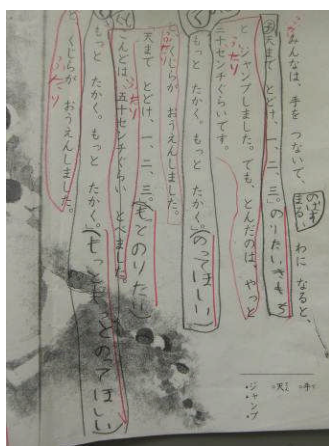
③第3場面（P 8， P 9）

「天までとどけ一，二，三。」「もっとたかく。もっとたかく。」の言葉が繰り返されていることに着目し、その繰り返しをどのように比較するのか、表現の仕方を考えた。

子どもたちの気持ち、くじらの気持ち、どちらもだんだん強くなっていること、だからこどもたちが回を重ねるごとに高くジャンプできるようになったことを押さえ、前時の3つのポイントを確認してからペアになり、話し合いながらワークシートにどのように読むかを書き込んだ。そのときに、自分の考えた読み方に理由がつけられるのであれば、それも書き込むように指導した。

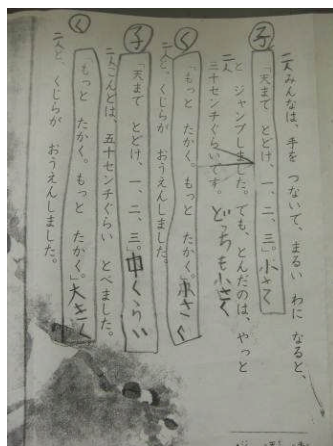
3 実践の考察

資料1 Aペアのワークシート



Aペアは子どもたちの気持ちが、くじらに「のりたいたい」→「もっとのりたいたい」→「もっともっとのりたいたい」また、くじらの気持ちは「のってほしい」→「もっともっとのってほしい」と変化しているのが分かるように読むと書いている。登場人物の気持ちの変化を比べられるようになった。

資料2 Bペアのワークシート



Bペアは、「小さく」「中ぐらいで」「大きく」など、声の大きさに着眼していたが、なぜ、そのように表現すればよいのか、登場人物の気持ちの変化に迫り書くことはできなかった。登場人物の気持ちの変化を追うためには、音読による内容理解が大切である。また、何に着眼すれば良いのか、目標をしっかり押さえることが大切であることがわかった。

ほとんどのグループがBグループのように、声の大きさや読む速さについては書くことができたが、なぜそう読むかの根拠を書くことはできなかった。しかし、あとで尋ねると、「声の大きさと気持ちの大きさがおなじだから、声の大きさを変えて読むと書いた」ということだった。これまで、説明文等で、「どこにそう書いてあるのか」「なぜそう思うのか」など根拠を持って考えるよう指導をしてきた。今回の物語文では、繰り返しの文に着眼し、表現は同じであっても気持ちの変化を読みとることに着眼させたかったが、深めるまでには至らなかった。今後は、なぜそう読むか根拠を持って、理由をしっかり説明できる力を養っていきたい。

4. 成果と課題

読み方の違いの比較について

○「天までとどけ、一、二、三。」

●一回目はだんだん乗りたい気持ち、二回目はもっと乗りたい気持ち、三回目はもっと乗りたい気持ちだから、だんだん大きく読む。

●読むスピードを速くする→早くくじらに行きたい気持ちだから。

遅くする→いきおいがつきそう。ゆっくりのほうがとどきそう。

●三回目はくじらぐもに聞こえるように大きな声で読む。

・一、二、三の「,」をちゃんと切って読む。→とべるかんじ。上に行けそう。

いきおいがつきそう。

○「もっとたかく、もっとたかく。」

●読むスピードを速くする→はやくのってきてほしい。

遅くする→気持ちを込めて読む。くじらが大きいから。

●一回目より二回目の方が「がんばれ」の気持ちが大きいから応援する声も大きく。

・大きい声で読む。→くじらが大きいから

・ゆっくりやさしく読む。→くじらがやさしそうだから。

本文を繰り返し読むことで、登場人物の気持ちを捉えられるようになり、どのように読んだらいいのかを工夫することができるようになった。

また、自分の考えを、理由をつけて説明できる力が身についた。

自分と友達の見解の比較

授業後の感想から、「読んでいる人の気持ちがあったから、読み方が分かれた。自分はちょっと速く読んだけど、〇〇くんは遅く読んでいた。」と、他人の読み方と自分の読み方の違いに気付ける児童がいた。また、「〇〇君のいけんをきいて、もっとたかく・・・のところがのってほしいきもちというのがわかった。」「〇〇さんの読み方で、こどもたちが、がんばろうっておもっているのがわかった。」と、友だちの音読を聞いて、内容を深く読み取る児童も出てきた。その日に、家で読み方を練習してきた児童も多数いた。その中には、「いつもの自分と比べて、読み方がかわってきたと気付いてとてもうれしかった」と話す児童もいた。

文章や挿絵を根拠にして音読の仕方を工夫していく力は、まだ全ての児童ができていないわけではなく、多くの児童は一人で進めていくことができなかった。今後も継続して研究し、多方面から物事を考えられる力をつけていきたい。

また、様々な考え方があり、それが間違いではないという雰囲気作りを大切に、活発に意見交流のできる児童にしていきたい。

(3) 実践例3 (4年)

1. 児童の実態

本学級の児童は、とても元気がよく、男女関係なく遊ぶことが多く、また学校生活の中で色々なことを友達や先生に話しかけるのが好きな児童が多いが、授業では、自分の書いた答えや考えたことに自信が持てず、話すことがなかなかできない。

一方、聞く方も自分の興味や関心がありもてないことに対しては、聞く姿勢が薄れることがある。調べ学習に関しては、与えられた題に対して調べようとする意欲があり、まとめようと頑張る姿勢は見られるが、たくさんの情報の中から自分が欲しい情報を取り出し、相手にわかりやすくまとめることや、それを相手にうまく伝えることはまだまだ苦手な児童が多い。児童のそういった実態から、話すことに対して自信を持たせること、そしてたくさんの情報の中から自分の欲しい情報だけを探したり、何を意味しているのかその内容を読み取ったりできる力をつけさせたいと考えた。

2. 実践の概要

現代社会では、多くの情報があふれており、そこから必要な情報だけを取り出して自分のものとして利用していく力が必要であると言われている。実践では、非連続型テキストである写真を使って、その写真からどんなことが読み取れるか考えることで、文字情報ではないものから情報を取り出せるようになる効果を狙っている。そして比較させることによって、他者との相違点や共通点を明らかにしながら、相手がわかるように話せる効果も狙っている。

【授業実践】

① 今日の目標 〈自己の考えを持つ〉

発言が自信をもってできるようになるため、そして発表の際の声の大きさに気をつけて発表ができるようになるために、朝の時間に「今日の目標」の時間を取り、一日の簡単な目標を大きな声で発表させるようにしてきた。結果、児童は少しずつ話すことに対しての抵抗が少なくなってきた。そして、あるテーマに沿って賛成か反対かを明確にして、自分の意見を書き、いろいろな人の意見を聞く練習も行ってきた。理由が明確になっている相手の意見を聞くことで、共通点や相違点を考えながら聞けたり、さらに自分の意見と比べたりすることができるようになってきた。また相手の意見との友達の意見を聞くことが楽しいと思える児童が少しずつ増えてきて、聞くことへの関心も少しずつ芽生えてきている。

② アップとルーズで伝える 〈対比して考える〉

「だれもがかかわり合えるように」を学習する前に、「アップとルーズで伝える」で効果的な写真の使い方について学んだ。この単位では、説明の仕方の工夫の一つ

として、文章とそれに関する写真を使用している。その写真を見せることでより具体的に説明したいことがわかるようになっている。写真と文章を対応させながら段落とその内容をつかみ、それが対比的になっている点や段落だけではなく中身も対比的になっている点から、相手の意見と自分の意見の共通点や相違点を比較することを用いて自分の意見を述べるができるようになる効果を狙っている。アップで撮る写真とルーズで撮る写真にはそれぞれ特徴があって、相手に伝えたいと思う内容によって分けて使われている。伝えられる立場として、アップの写真ではどんなことがわかるのか、ルーズの写真ではどんなことがわかるのか、また何を伝えたいのかなど、その写真から色々なことが読み取れるということを児童たちは学ぶことができた。しかし、文章と対応しているため、写真の内容が自分で読み取れていなくても、情報が取り出せてしまうこともあるので、以下③の実践を行うことにした。

③ 写真の読み取り 〈資料の比較〉

「アップとルーズで伝える」と同時並行で、総合の時間に身の回りのバリア・バリアフリーについての写真を見て、撮った人が何を言いたいのか、どんなことに着目して欲しいのかを読み取る授業を行った。写真①と②は、普段通るような、普通の道路の写真（校区ではない）で、障害を持つ人たちがどんな点に苦労するかという点に絞って見せた写真である。校区でない写真を使ったのは、全く見たことのないところの写真を提示することによって、写真に興味を持たせようと考えたからである。ここからどんな情報が読み取れるかを考えた。授業で出てきた意見にはこんなものがあった。



写真①



写真②

〈児童の意見〉

- ・ 棒が立っていて、車いすの人がぶつかる。
車いすの人が通れない。
- ・ 目が見えない人が横の溝に落ちるからあぶない。
でも支え（ふたのこと）がしてある。
- ・ 車いすの人が階段を上れない。

- ・目が悪い人はこけるかもしれない。
- ・目が見えない人、耳が聞こえない人がでてきたら車とぶつかる。

(見通しが悪いことを言っている。)

など他にもあと5枚ぐらい見せて同じように問いかけた。児童の反応を見ると、ポイントを絞った上で写真を見ることで、大体のことはつかめていたように感じる。見るべきポイントがはっきりしていることはあるが、一枚の写真から色々な情報が読み取れるということ、自分が考えていることと同じことを考えつく子もいれば、全く違うことを考えつく子もいるということに児童は気付くことができたのではないかな。

④ 調べて発表しよう (教材名 「だれもががかかり合えるように」)

本単元はいろいろなハンディを持った人も含めて、誰もがよりよく関わり合うためにどんな工夫や課題があるのかについて知り、調べ、発表することによって関わり合いについて考えを深めていける教材である。また本学年では、2学期の総合の時間に、バリアフリーについて学習してきた。自分たちの生活について考え、アイマスク体験、車いす体験、バリアフリー見学をしてきた。そうすることで本教材のテーマであるいろいろな人との「関わり合い」ということを深く意識させながら、さらにそれを詳しく調べていき、最後には自分が調べてきたことをまとめ、発表をする。

3 実践の考察

今回の非連続的テキストによる比べ読みでは、以下2つのことに着眼した。

①2つ(複数)の学習材を読み比べ、共通点・相違点に目が向き、そこから学習が出発し、話し合うことが出来る。

②PISA型読解力における「非連続型テキスト」(図・グラフ・写真・表)に着目することで多様な気づきが生み出され、話し合い活動ができる。

上記に迫る、授業展開を行った結果、以下のことが分かった。

【結果1】説明文における連続的テキストにおいては、文章から根拠を見つけることが容易であるが、写真においては、読み取り(個々様々)が難しい。

写真③と写真④は、同じ場所にある地下道で、片方は階段で、片方はスロープになっている写真である。この写真ではどんなところがバリアーでどんなところがバリアフリーなのかを考えた。児童の見方として、スロープのことを坂になっていて危ないと答える児童もいれば、階段は上れないから坂があって便利なんだという児童もいた。そのことでもわかるように、それがバリアーであるかバリアフリーなのかというのは人によって取り方が違うことが分かる。

【結果2】写真活用にあたっては、目的意識をしっかり持つことが大切である。

児童が撮影した写真を使って比べ読みを行った。その結果、写真の着眼点や撮影方法が様々であり、同じ土俵で話し合いをするまでに至らなかった。

このことから、「非連続的テキスト」の活用においては、写真の撮り方の事前指

導や活用方法を工夫する必要であることがわかった。



写真③ 地下道の階段



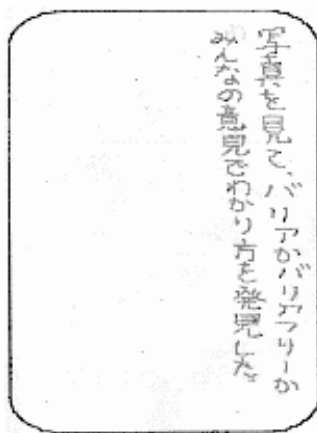
写真④ 地下道のスロープ

4 成果と課題

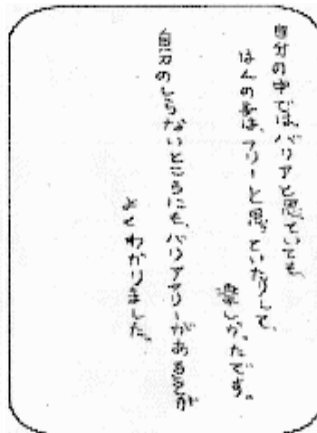
今回はバリア・バリアフリーという大きな着眼点が存在した。資料①からわかるように、児童はバリアかバリアフリーかという観点で写真を見ることができた。相手の言おうとしていること、考えていること、説明したいことなど、予想をすることができた児童もいた。何の着眼点も教えないで、一枚のその写真から情報を読み取る力をつけるためにも、色々な学習場面で情報を効果的に取り出す練習をしていくことが大事であると考え。

文字情報ではなく、写真という非連続型テキストから情報を取り出すことを続けた結果、物事を自分で考えることが少しずつできるようになり、表面的なことだけでなく、その裏にあることや、見えているところ以外のところに気づいていけることができたのも成果の内の一つだと考える。

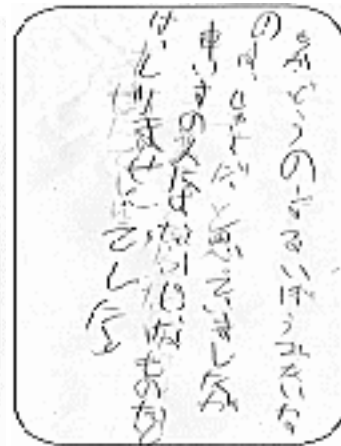
資料②と③からわかることは、他人の意見を聞くことで、新たな物の見方、考え方に気づけた児童がいたことである。しかし、気づけた児童は少なく、人の意見を聞くだけで終わってしまい、情報を取り出すまでに至らなかった子もいた。次回に行う時は、一人ひとりが活躍できるような場の設定や取りだし方の工夫が必要であると考え。



資料①



資料②



資料③

(4) 実践例4(5年)

1. 児童の実態

本校の子ども達は、全学年・教科を通して“潮スタイル”という方法に取り組んでいる。“潮スタイル”は課題について自分の考えをもち、ペアトーク、全体で交流し、振り返るという授業形態をとっている。授業の中で必ず考える場をもち表現することで、全ての児童が参加することをねらいとしている。“潮スタイル”の授業を通して、受け身になりがちな一問一答の授業から、子ども主体の授業を目指して取り組んでいる。そのため、5年生の子ども達も話し合いに意欲的に取り組もうとする児童が多い。算数の時間でも、「合同な図形はどれだろう。」と発問すると一人学びから始まり、ペアトークで意見を深め、多くの子どもたちが手を挙げ活発に全体で交流しようとする。そして、友だちの意見を聞き疑問に感じたことは素直に質問する。すると、周りの児童もさらに意見を深めようと挙手し、話し合いが活発にすすむ。このことから自分の考えを学級で話し合うことは好きな児童が多い様子である。自分の考えを書く活動でも、量的にたくさん書くことができる。

しかし、その一方メモを取りながら話を聞いたり、他人の意見を取り入れて自分の意見を深めたりということがまだまだ苦手である。話し合いも根拠をもとに話すことはできるが、根拠が薄いことや一つしか理由が言えないことも多い。書く活動では、たくさん書くことは出来るが、一文の中に要点をはっきりさせて書くことはまだまだ苦手である。そして簡単な接続詞を使うことも慣れつつあるが、効果的には使えない。

2. 実践の概要

児童の実態をふまえ、国語科の授業の単元として新聞を使った学習活動を考えることにした。活用においては新聞記事を使つての読み取りの比較や書き方、物の見方、感じ方に着眼した。

記事選択に関しては、記事に対する関心を高めるため、子どもにとって身近で共感できそうな話題のもので、十代の投稿記事から選んだ。第1時では、思春期(反抗期)に入ってきた年代ということで「小言消えて知る 母の愛情」【資料①】を使った。第2時では、高学年の興味が高いと思われる携帯電話についての記事「ケータイ 私も揺れた」を使った。「携帯電話」については、学級でも話題になることで、小学生の携帯の使い方やマナーについて学習する良い機会であると考えた。第3時では「若者BOX席」という神戸新聞朝刊から、十代の若者が意見を書く投稿欄「皆の力で120点クラスに」「「やばい」しか使ってない!」「言葉に秘められたパワー」【資料②】を活用した。投稿欄の活用については、「思いを伝える方法を考えよう」というテーマから、言葉のもつパワーについて考えることのできる記事を重視して選んだ。このように、いくつかの記事を比較することで、自分の課題を決定する力や物の見方、感じ方など他者との考え方の違い、共通点に気付くことが出来るようになる。今回の実践は共通した課題をもとに、他者の意見文を読み、接続詞を効果的に使って自分の意見をつなげることによって自己の考えを表現することや、他者を理解すること、さらには自分の考えを明確に表現し、文章全体の構成の効果を考えることにつなげたいと考えた。

小言が消えて知る 母の愛情

中学生 山本 時織
(東京都武蔵村山市 14)

最近、母とよくケンカするようになっていました。その原因は小さなお言の口調の「うしろさ」が気になってしまっているのです。

おとなしく従えばいいものを、つい私は「なんて命令さ

れなきゃいけないの」と反発してしまいます。自分でも「よくない」とわかっているのに、なぜかムッとしてしまうのです。それが日々積み重なって、ある日、母は何も言わなくなりました。

かばんを放って抱いても、部屋が散らかっていても、何

も言わないのです。最初のうちは「ラッキー」と思っていました。しかしそれも3日もたつと、寂しさに変わってしまいました。見放された気分になりました。それでも私は謝る気にはなれませんでした。

しかし、待つても解決にはならないのです。小言は母の愛情、言われなくなってしまうのは遅いと感じています。

【資料①】

2011年10月6日

国語の授業

公立武蔵村山高等学校 国語科 1年1組

「おとなしく従えばいいものを、つい私は「なんて命令さ

れなきゃいけないの」と反発してしまいます。自分でも「よくない」とわかっているのに、なぜかムッとしてしまうのです。それが日々積み重なって、ある日、母は何も言わなくなりました。

かばんを放って抱いても、部屋が散らかっていても、何

も言わないのです。最初のうちは「ラッキー」と思っていました。しかしそれも3日もたつと、寂しさに変わってしまいました。見放された気分になりました。それでも私は謝る気にはなれませんでした。

しかし、待つても解決にはならないのです。小言は母の愛情、言われなくなってしまうのは遅いと感じています。

2011年12月9日

国語の授業

公立武蔵村山高等学校 国語科 1年1組

「おとなしく従えばいいものを、つい私は「なんて命令さ

れなきゃいけないの」と反発してしまいます。自分でも「よくない」とわかっているのに、なぜかムッとしてしまうのです。それが日々積み重なって、ある日、母は何も言わなくなりました。

かばんを放って抱いても、部屋が散らかっていても、何

も言わないのです。最初のうちは「ラッキー」と思っていました。しかしそれも3日もたつと、寂しさに変わってしまいました。見放された気分になりました。それでも私は謝る気にはなれませんでした。

しかし、待つても解決にはならないのです。小言は母の愛情、言われなくなってしまうのは遅いと感じています。

2011年9月24日

国語の授業

公立武蔵村山高等学校 国語科 1年1組

「おとなしく従えばいいものを、つい私は「なんて命令さ

れなきゃいけないの」と反発してしまいます。自分でも「よくない」とわかっているのに、なぜかムッとしてしまうのです。それが日々積み重なって、ある日、母は何も言わなくなりました。

かばんを放って抱いても、部屋が散らかっていても、何

も言わないのです。最初のうちは「ラッキー」と思っていました。しかしそれも3日もたつと、寂しさに変わってしまいました。見放された気分になりました。それでも私は謝る気にはなれませんでした。

しかし、待つても解決にはならないのです。小言は母の愛情、言われなくなってしまうのは遅いと感じています。

【資料②】

【授業実践】

～豊かな言葉の使い手になるには～新聞記事を通して～
新聞記事を使って、意見文を書く学習である。

- ①三つの新聞記事から、気になった記事を一クラスで選ぶ。
- ②選んだ記事についてワークシートの①はじめの欄に自分の考えを書く。
- ③ワークシートをグループ内で回し、順次「自分の経験を根拠にして接続詞を効果的に使うこと」を意識しながら意見文を作成する。
- ④グループで完成した四つの意見文の中で二つの意見文を話し合いで選ぶ。
- ⑤接続詞を効果的に使い説得力のある意見文を選ぶ。(ベストワン意見文)
- ⑥ベストワン意見文と異なる結論になった意見文を選ぶ。

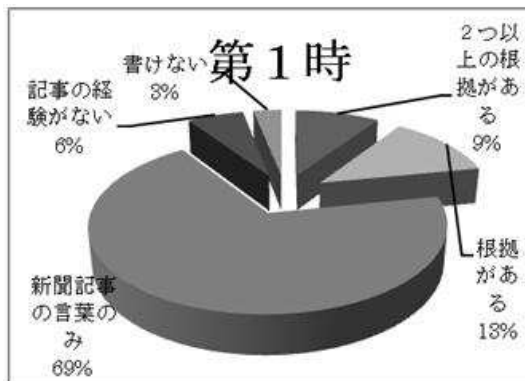
ベストワン意見文の書き出しを書いた人がグループの代表で自分たちの選んだ意見文を全体で発表する。グループで選ばれた感想と選ばれた意見を全体場で交流する。交流にあたっては、意見文のどこに着眼したのか、的を絞った話し合い活動を展開するよう事前指導を行う。また、自分の書き出しの文が書き手が変わること、内容が変容していくことに着眼させ、接続詞の効果や自己の思いとの異なりについても提案していく。

全体計画（全3時間）

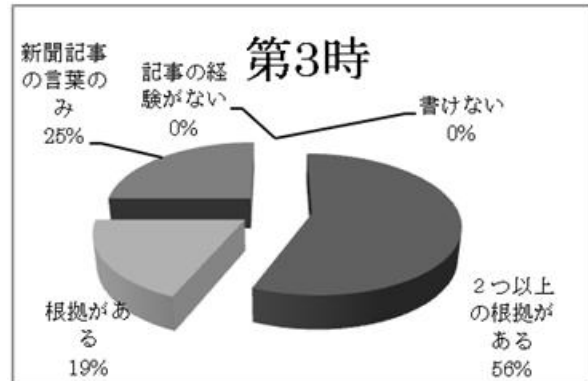
時	学習活動	指導上の留意点	評価規準
1	接続詞を効果的に使って、人で意見文を書いてみよう。 ・めあてを確認する。 ・一つの新聞記事を黙読する。 ・新聞記事の範読を聞く。 ・意見文を書く。	・自分も経験があると感じた文章に赤線を引くようにする。 ・各欄にある接続詞と、違いについて説明する。 ・読み手に分かりやすく、具体的に書けているか机間巡視する。	・新聞記事をすすんで読もうとしている。 【読むこと】 ・自分の考えを明確にして書こうとしているか。
2	接続詞を効果的に使って、班で意見文を書いてみよう。 ・めあてを確認する。 ・一つの新聞記事を黙読する。 ・新聞記事の範読を聞く。 ・①に意見文を書く。 ・班でワークシートを回し、次の意見文を書く。 ・前の意見文について、いちどだけ質問する。 ・②～④まで同様にワークシートを回し、一つの意見文を完成する。	・班で意見文を完成するため、相手を意識して具体的に意見文を書くようにする。 ・前の意見文について、一度だけ質問して、前に書かれた意見文の内容を十分に読み取れるようにする。 ・机間巡視をし、経験を具体的に生かした意見文になるように指導する。	・内容を十分に考えて質問しているか。 【聞くこと】 ・前の文の内容とつなげながら意見文を書いているか。 【書くこと】
3 (本時)	自分たちのベストワン意見文をつくって交流しよう。 ・めあてを確認する。 ・三つの新聞記事を黙読する。 ・新聞記事の範読を聞く。 ・班で新聞記事を選ぶ。 ・①に意見文を書く。 ・班でワークシートを回し、次の意見文を書く。 ・前の意見文について、一度だけ質問する。 ・班で決めたベストワン意見文を全体で交流する。	・難しい言葉には、読み仮名や意味をのせておく。 ・書きたい記事を班で話し合い、決める。 ・質問する意図を十分考えてから、質問するようにする。 ・自分たちの意見文と比べて聞くようにする。	・自分の意図をはっきりさせて話し合っているか。 【話すこと】 ・話し手の意図をとらえながら聞いているか。 【聞くこと】

3. 実践の考察

①意見文の内容と根拠について



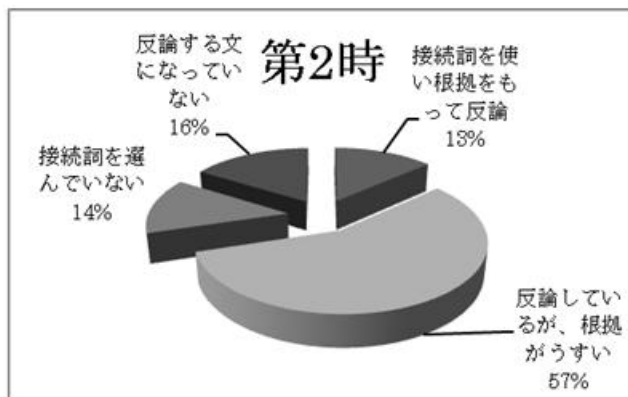
【資料④】



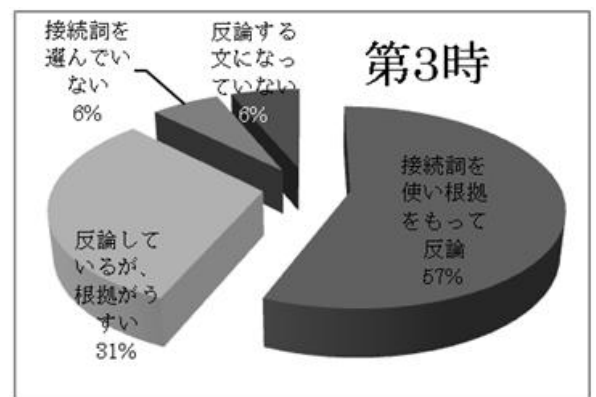
【資料⑤】

第1時と第3時の意見文の内容を比べてみると、第1次では二つ以上根拠がある意見文を書いた児童は9%なのに対し【資料④】、第3時では56%と向上したことが分かる。【資料⑤】そして、意見文の内容も新聞記事の内容を繰り返していたものから、自分の言葉を使った内容になってきたことがわかる。

②文と文のつながりと接続詞について



【資料⑥】

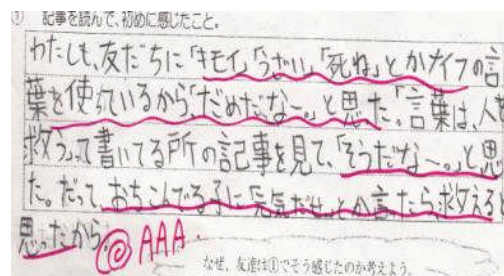


【資料⑦】

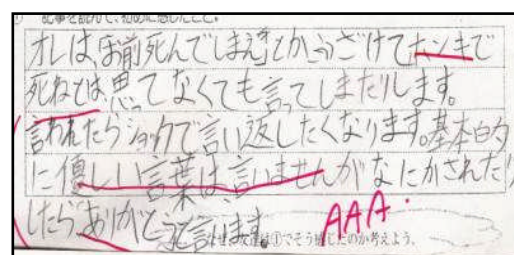
「しかし、けれども、ところが、でも」を使って、逆の立場になって書く意見文については、第一時では接続詞と意見文の内容はほとんどの児童が合っていた。ところが、第2時になると、接続詞を選んでいない子どもが14%接続詞は選んでいても内容が逆のものになっていない児童をふくめると全体の30%いた。【資料⑥】しかし、第3時では、全体の12%に減り、接続詞を使い根拠をもって反論できていた児童が57%に増えた。回を重ねるごとに、接続詞を効果的に使い根拠をもって意見文を書けるようになってきたことが分かる。【資料⑦】

特に顕著に成長を感じられたAさんとB君について考えたい。Aさんは、第1時の初めに感じたことを書く欄に「いっしょだな～と思った」と書いていた。「いっしょってどんなところかな」と尋ねても、それ以上書こうとはしなかったうえに、私に見られることが嫌そうであった。B君は「そのとおりだと思いました」という書き方をしており、B君も続きを促しても、なかなか書くことが出来なかった。B君は、バカヤローとかスバラシーと

それが、練習を重ねるごとに自分の経験を書くということに慣れてきた。友達の意見文を読むことで照れも少なくなり、自信をもって活動に取り組めるようになってきた。第3時では自分の経験をもとに自分の言葉で、根拠をもった意見文を書くことができるようになってきた。班の友だちとも積極的にベストワン意見文を選び、意見を交流することがとても楽しそうであった。



第3時



第3時

40

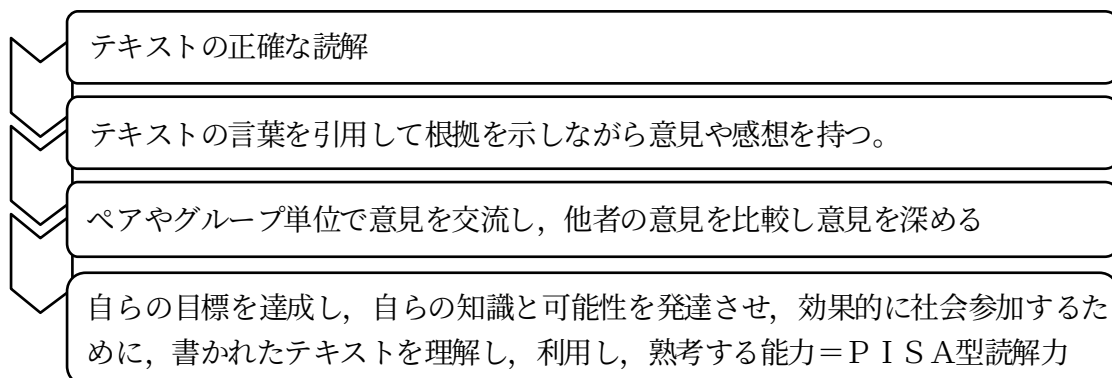
（５）実践例５（５年）

１．児童の実態

本学級の児童は意欲的に授業に取り組める児童が多く、発問の場面において答えが１つに決まっている時には多くの児童の手が挙がる。しかし、意見や感想を問うと自分の意見を書けているにもかかわらず、発表できる児童は１０人前後の固定したメンバーになってしまう。その原因として、自分の意見や感想に自信が持てず、友だちと違う意見だと不安に思い、友だちにどう思われるか心配に思うからだと考えられる。また、発表できる児童の中には、自分の考えに固執してしまい友だちの意見をうまく受け入れることができず、自分の考えを広げられない児童もいる。

２．実践の概要

児童の実態を踏まえ、今年度は様々な意見を持つことができる物語文を通してPISA型読解力を身につけさせる実践を行うことにした。実践目標は大きく分けて２つあり、１つ目は自分の意見や感想を発表するときに自信を持たせるために、テキストの言葉を引用して根拠を示しながら意見や感想を持つようにさせる。２つ目は自分の意見を広げていくために、ペアやグループ単位での意見交流の場を増やし、自分の意見と他者の意見を比較させ自分の意見を深めさせる。その２つの目標を達成するためには、テキストをいかに早く、正確に読解するかが重要になってくる。そこで、１年を通して同じスタイルで物語文を読解させた。さらに今回はテキストの特徴をつかむために様式の違う既習のテキストと比較させ、その上で自分が気に入った作品を選び作品に対する自分の考えを書かせる実践に取り組んだ。



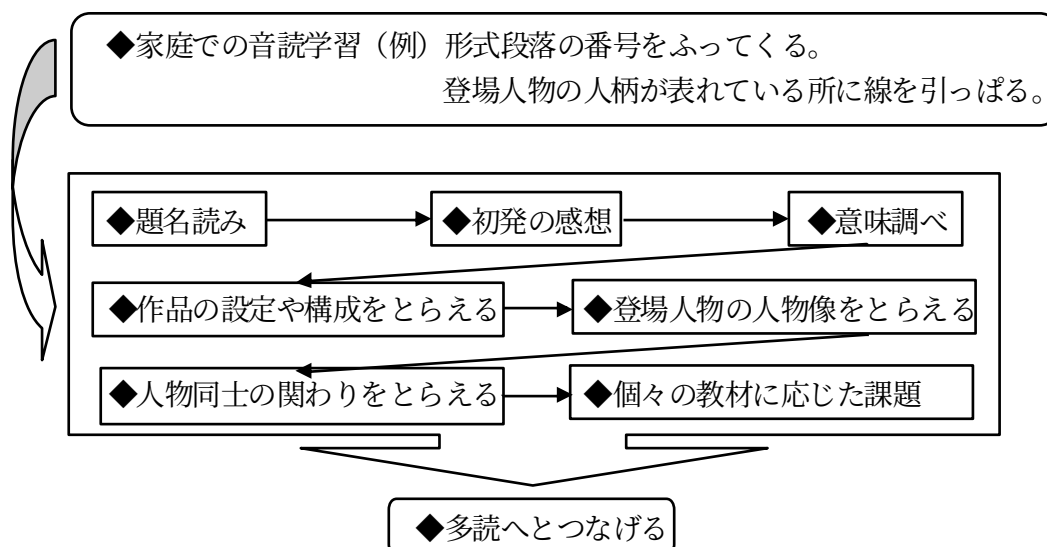
【年間指導計画（主な教材の重点指導目標）】

教材名	重点目標
あめ玉	・ ４年生までの既習事項を確認する。
のどがかわいた	・ 人物像と、人物どうしのかかわりに気をつけて読む。

百年後のふるさとを守る (伝記)	・物語のように書かれている部分と、事実の説明や筆者の考えが書かれている部分を区別しながら読む。
大造じいさんとがん	・直接書かれていない人物の深い心情や生活について、情景描写などから読み取る。
わらぐつの中の神様	・物語の特色は「構成」「人物像」「表現」に表れることを理解し、それをとらえ既習の『大造じいさんとがん』と比較し作品の理解を深める。

【物語文の読解スタイル】

指導要領が改訂され教科書の出版会社も変わり、教材の量が増え今までのスタイルでは授業時間に余裕がなくなってきた。そこで、今まで出していた音読の宿題にプラスして教科書に載っている手引きの課題を与え家庭学習とした。そうすることでただ字面を読んでいただけの音読ではなくテキストの内容を読みとる音読へとつながり、その家庭学習を踏まえ授業をすることにより授業時間の短縮につながるだけでなく、より考える時間を確保できると考えた。また、授業のスタイルも下図のように1年を通してなるべく同じスタイルで授業するように心がけた。



【授業実践】

～物語を読んで、自分の考えをまとめよう～

『わらぐつの中の神様』 『大造じいさんとがん』

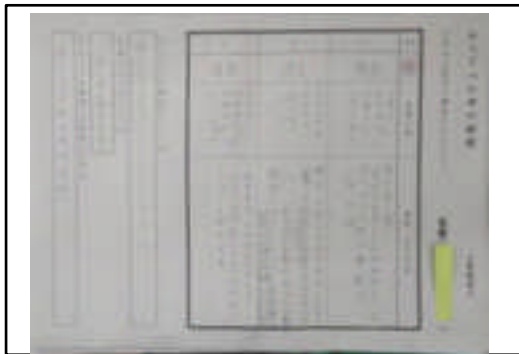
『わらぐつの中の神様』は、「現在－過去－現在」という額縁構造をとった作品であり、時間の行き来やそれに伴う場面の飛躍的な転換があるなど、これまでに児童が学

習してきた物語とはひと味違ったおもしろさがある。また、なぞ解きのような一面もあって読者の興味をひきつける魅力がある。そのような特徴をすでに学習している『大造じいさんとがん』と比較することにより作品の特色をより理解できると考えた。物語作品をとらえる際に物語の特色が表れる3つの観点（構成・人物像・表現）でとらえるようにし、4月から物語文を学習するときにはこの3つをおさえるよう意識させた。「物語を読む」ということを「物語の特色をとらえる」という視点で学習することにより、作品のおもしろさを味わいながら、そのおもしろさがどのようなところにあるのか、客観的な見方をしていけると考えた。

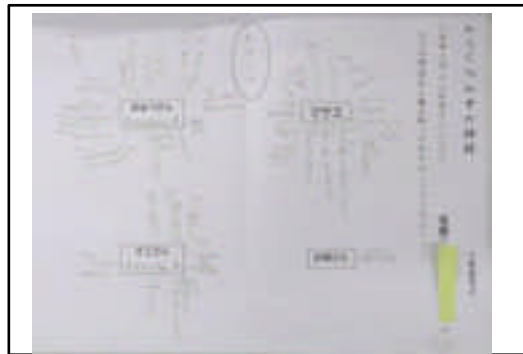
次に、物語の特色をとらえた上で、自分の気に入った作品に対する自分の考えを書く活動に取り組んだ。児童の実態の内容と重複するが自分の意見に自信が持てない児童が多く、4月から根拠づけて書くよう指導してきた。ここでも、テキストの文を根拠として意見を書かせるようにし、根拠を明確にすることにより自分の意見を相手に納得してもらえることを実感させ、意見を交流することにより正解は1つではなく様々な意見があることを知り、さらに自分の意見を深めていけると考えた。

（ワークシート&写真）

資料1



資料2



資料3



資料4



資料1：作品の設定や構成を全体で確認しながら共通理解する。

資料2：登場人物の人物像を叙述をもとに読み取る。

資料3：わらぐつを通して変容していく登場人物の様子をとらえる。

資料4：自分が気に入った作品を根拠だてて理由を書く。

資料5-1



資料5-2



資料5-1：自分が気に入った作品を根拠立てて理由を書く。（わらぐつの中の神様）

資料5-2：自分が気に入った作品を根拠立てて理由を書く。（大造じいさんとがん）

◆ワークシートを使ったことにより書くことが明確になり、何を書いているかわからない児童が少なくなった。また、配置などを工夫することにより頭でイメージをするのにも役立ったと考えられる。

写真1



写真2

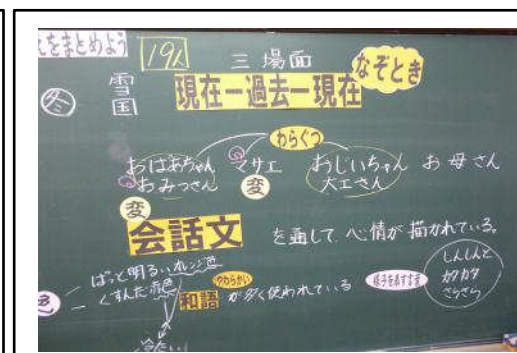


写真1：2つの作品を比較したときの『大造じいさんとがん』の板書

写真2：2つの作品を比較したときの『わらぐつの中の神様』の板書

◆黒板を縦に半分に区切って、3つの観点（構成・人物像・表現）で2つの作品を比較しやすいように配置した。

3. 実践の考察

①家庭学習の音読

国語の教科書にチェックをさせたり、書き込ませたりすることにより、国語の授業だけでなく他教科や新聞記事などを読む時にもペンを持ってキーワードやキーセンテンスに線を引く姿が見られようになった。また、“読み込む”というところまでは至っていないが、課題を与えた音読の宿題を重ねるうちに物語の内容が頭に入り、初めから順番に読み進めなくても、物語の大きな流れとしてつかむことができるようになった。また、そのように課題をもって読ませることにより少し前にやった既習教材でも頭の中にしっかりと流れが残っており、教材の比較をする時にも改めて読み返す必要はなかった。このことから日々の学習に少しの工夫を加えることにより音読の質が深まり効果的なものになると考えられる。低学年では難しいかもしれないが、高学年では有効な手立てであると思う。

②作品の特色をとらえ、2つの作品を比較

・構成・・・どのような場面が、どのような関係でえがかれているか。

『わらぐつの中の神様』 現在→過去→現在

『大造じいさんとがん』 起→承→転→結

2つの作品とも場面の区切りが見た目に分かりやすく、『大造じいさんとがん』では【起承転結】という言葉は教えたが、3場面が盛り上がりであることを感覚的につかんでいる児童がほとんどであった。また、2つの作品を比較することにより、『わらぐつの中の神様』の現在→過去→現在という構成が特別なものであり“なぞとき”のような構成の工夫をしていることに気づくことができた。2つの作品とも長文であるが、かたまりとしてとらえることができ、比較したことにより作品の構成の特色をとらえることができたと考えられる。

・人物像・・・どのようなものの見方・考え方の人物がえがかれているか。

(会話・行動や心情)

『わらぐつの中の神様』 “会話文”中心に心情を読み取る。

○マサエ・・・人まかせ・いじっぱり・人の話をすぐにはしんじない・自分の意見を押し通す・おっちょこちょい

○お母さん・・・さっしがよい・気づくのが早い・冷静沈着・面倒見がよい

○おみつさん・・・心配性・マイナス思考・はずかしがりや・見た目にこだわらない・家族思い・がんばり屋・正直・欲がない・最後までがんばる・くじけない・遠慮がち・根気強い

○大工さん・・・見た目にこだわらない・顔に出やすい・ほめ上手・やさしい・見る目がある・働きもの・おみつさんに感心している

『大造じいさんとがん』 “情景描写”中心に心情を読み取る。

○大造じいさん・・・あきらめない・根気強い・先のことを考えている・かしこい・ざんせつのことをばかにしている・残雪の見方が変わった

『わらぐつの中の神様』は登場人物が多く会話文を中心に書かれている。一方『大造じいさんとがん』は登場人物が少なく会話文もないという対照的な人物像のえがかれかたをしている。このように登場人物の心情が全く違う形で描かれているので違う点は明らかであり、比較したことによる効果はそれほどなかったといえる。しかし、対照的な2つの作品を学習することにより、登場人物の心情の描き方には『大造じいさんとがん』のような情景描写として描くなど様々な方法があることに気づくことができたので、次の作品を読み取る時につながると考えられる。

・表現・・・場面の様子や人物を、どのような言葉で表現しているか。

『わらぐつの中の神様』 やわらかい感じ なじみのある言葉

→ “和語”を中心に書かれている。

『大造じいさんとがん』 緊張感がある 難しい言葉がある

→ “漢語”を中心に書かれている。

それぞれの作品を学習した時になんとなく感じていた印象と比較することにより、それぞれの作品の表現の特色が明確になり、物語の雰囲気と表現が関係していることに気づくことができたと考えられる。

2つの作品を比較するという学習には初めて取り組んだが、教師が予想していた以上に児童は抵抗なく取り組むことができた。それは、比較する観点を物語の特色が表れる3つの観点（構成・人物像・表現）にしぼったこと、それを意識して学習することにより新しい作品を読むときも3つの観点を意識できていたことの2点が考えられ、4月から同じスタイルで授業に取り組んでいたことも大きいと思われる。また、作品を比較することによりどの作品にも共通しているものなのか、その作品固有の特色なのかということがはっきりとし、作品の特色をとらえるという点では有効な手立てであったと考えられる。

③作品に対する自分の考えをまとめる

【気に入った作品・3つの観点で気に入ったところ・強く印象に残ったところ】

		『わらぐつの中の神様』	『大造じいさんとがん』
気に入った作品		18人	18人
3つの観点のうち気に入ったところ	0	1人	1人
	1	7人	5人
	2	8人	6人
	3	2人	6人
強く印象に残ったところ		P.198…1人 P.202…1人 P.203…8人 P.204…5人	P.112 L14…3人 P.113L1 …3人 P.114～P.115L12…1人 P.115…4人 P.117…3人

【気に入った理由】

『わらぐつの中の神様』…自分と比較しながら書いている児童の意見

- ◆最初マサエは私と同じように「わらぐつなんかみっともない」とおもっていたのに「この雪げたの中にも神様がいる」というぐらい神様を信じているし、私も「外見じゃなくて中身が大切だな」と思えたから気に入りました。
- ◆おみつさんは、ずるをしなくて心をこめてわらぐつを作ったから私も売れると思っていて、でもおみつさんはすごく心配していた。けれど大工さんはおみつさんが心をこめてわらぐつを作ったと思って、本当のいい仕事というものが分かっているし、それをおみつさんに言っていたからです。

『大造じいさんとがん』…構成・表現に着目しながら書いている児童の意見

●すごく言葉に迫力があるし、ぼくは戦うところが好きだからです。それに、その後に盛り上がりそうな言葉で続きも読みたくなるような構成になっているからです。

●強く心を打たれてということは、大造じいさんの残雪に対する気持ちが最も変わった所で、ただの鳥に対してしているような気がしないということは、鳥に鳥以上の存在と言っていることで人間と同じか人間以上の存在になったということで大造じいさんの気持ちが一番かわったところだからです。

4. 成果と課題

4月の児童の実態と比べた一番の成果は、自分の意見を発表することに抵抗がなくなってきた児童が増え、発表に対する意欲が高まったことである。根拠があればどんな意見でもいいということで取り組んできたり、常に自分はどう思うのかということを問いかけてきたりしてきたからだと思う。また、国語の授業以外でも意見を発表させたり、声かけをしたりすることも大切であると感じた。次に、なぜそう思うのかということを問い続けた結果、国語以外の授業でも自然と理由を述べられるようになってきたことである。理科の実験の予想を立てる時でも、自分なりの理由を考えて書くようになってきた。最後に、1年を通して同じスタイルで学習した結果、教師が言わなくても児童が学習計画を把握することができ、教材を積み重ねるごとに授業がスムーズに流れるようになったことである。さらに、意欲的な児童は進んで意味調べをするなど学習計画を見据えて取り組める児童も少数ながら出てきたことである。このように、1年の計画を立てて授業に臨むことは非常に大切であると感じた。

課題は、テキストを根拠にした自分の意見を持つことはできているが、深まりがある児童はまだ少ない。また、ペアやグループ単位で意見を交流しているものの話し合うという双方向の言語活動ではなく、発表するだけという一方向で終わってしまっているため他者との意見を比較はできていても意見を深めるところまでは至っていない。精読から多読へという流れはあるが、話し合ったり、発展的な言語活動をしたりするためにはやはり基礎となる読解が必要で、そのためには音読を繰り返し“読み込む”ことが必要になってくる。そのことを理解して1年を見通して取り組んできたつもりではあったが、まだまだ読み込みが不十分であり、個人差も大きい。目標に迫れるような発問の工夫や手立ての方法などさらに教材研究を重ねて実践を積み重ねていきたいと思う。

(授業実践風景)



4 研究のまとめ

本年度の研究では、「比べ読み」を中心に、児童の「読む力」を向上させる実践に取り組んできた。成果としては、次の3つのことをあげる。

①「比べ読み」を通して、作品を読む児童の視点が広がった。

- ・物語の展開を予想する。
- ・自分の経験とつなげて考える
- ・共通点と相違点に目が向けられるようになった。

②相互評価を通して、児童が主体的に読解に取り組んだ。

- ・様々なものの見方や考え方ができるようになった。
- ・構成・人物・表現等にスポットを当て比較することができた。

③「読み比べ」の対象として、作品（教科書教材）だけでなく、様々な学習材（児童が作成したもの）を読み比べることができた。

- ・読書活動（多読）につなげることができた。
- ・他教科において、予想を立て自己の考えを述べるようになってきた。

今後の課題は、「比べ読み」など、読解力向上のための授業実践を各教科に広げ学びの定着をしていくことである。

5 おわりに

全国学力テスト（PISA調査）などの結果、読解力の低下が指摘され、国語科においては、「読む能力」を高める授業改善が求められている。そこで、本年度は文学的な文章・説明的な文章の「比べ読み」を通して文章を評価・比較する能力を育てる実践を行った。

「比べ読み」の学習効果としては、学習材の書き方（論理構造）に目を向けさせることにある。また、複数の文章や作品を読み比べることは、「読む力」を高めるのに有効な言語活動である。「比べ読み」を行うことで、自分の考えを深めるだけでなく、文章や作品を評価する力を養うとともに、様々なものの見方や考え方ができる。

新しい時代に求められる【国語力】には、『自分の考え（意見）を述べる力』が求められている。そのためには、日々の授業で子どもたちに、発言・議論をさせる時間をきちんと確保することが大切である。また、発言内容の知識的な正確さではなく〈根拠〉を指し示し話し合うことが大切である。意見には〈根拠〉があってこそ議論を深め、聞き手を説得することができる。児童が自分の意見を言う場を増やすと同時に「なぜそう思うのか」と尋ねることが大切である。次年度では、さらに「話し合い活動」の充実に向けた取り組みを研究したいと考えている。

【参考文献】

有元秀文 著 『PISA 型読解力が必ず育つ10の鉄則』(明治図書2008年)

有元秀文 著 『PISA型読解力』の弱点を克服する

有元秀文 著 『国際的な読解力を育てるためのPISA型問題開発の理論と方法』

有元秀文 著 『教科書教材で出来るPISA型読解力の授業プラン集』明治図書

国立教育政策研究所監訳『PISA2006年調査 評価の枠組み』ぎょうせい2007

文部科学省『読解力向上プログラム』(2005, 12)

社会科の基礎学力向上と小中の効果的な連携

指 導 員	民 谷 洋 二
研 究 員	吉 田 満 (小 園 中)
〃	大 西 勝 也 (立 花 中)
〃	新 田 達 矢 (浜 小)
〃	宮 城 久 雄 (水 堂 小)
〃	高 島 洋 (園和北小)

【内容の要約】

「尼崎市学力・生活実態調査報告」によれば、社会科について、小学校では「知識・技能の定着」に課題があり、中学校では「社会的な思考判断」に課題がある。

小・中学校それぞれの課題に対応し、基礎学力の向上につながる学習活動として「言語力の育成」に注目した。

授業のなかで、「学習したことをまとめる」「まとめたことを発表する」という活動を取り入れることで、「思考力・判断力・表現力の向上」と「知識・技能の定着」につながるのではないかと考え、授業で実践する。

キーワード：小中連携、思考力・判断力・表現力、知識・技能の習得
言語力の育成、まとめの活動、「自分の考え・自分の言葉」

1	はじめに	49
2	研究の内容	49
	(1)研究テーマについて	49
	(2)研究の方法	49
3	実践例	
	(1) 実践例 1 (小学校 4 年生)	49
	(2) 実践例 2 (小学校 4 年生)	54
	(3) 実践例 3 (小学校 6 年生)	58
	(4) 実践例 4 (中学校 2 年生)	62
	(5) 実践例 5 (中学校 2 年生)	68
4	研究のまとめ	73
5	おわりに	74

1 はじめに

平成20年3月、新学習指導要領が告示された。小学校では平成23年度から、中学校では平成24年度から全面実施になっている。

中学校の学習指導要領では、「指導計画の作成と内容の取扱い」の指導計画の作成に当たっての配慮事項のなかで、「小学校社会科の内容との関連を図る」ことを掲げている。

また、学校教育法の改正により、義務教育9年間の「学びの連続性」は、一層重視されており、各学校段階での役割を認識しながら、社会科の目標を達成するようにしなくてはならない。

これからは、小・中学校の教師が、指導内容や指導方法について共通理解するなど、より一層、連携を強めていく必要がある。

本研究部会では、小学校と中学校が効果的に連携することで、基礎学力の向上へとつながる方法について研究を進める。

2 研究の内容

(1) 研究テーマについて

学校教育法第30条第2項では、「学力」について、「①基礎的・基本的な知識・技能の習得」「知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等」「主体的に学習に取り組む態度」というように示している。

意見の交流のなかで、小学校では、興味・関心を高める教材を工夫しながら、児童の発表をもとに展開する授業が盛んに行われているが、知識の定着に課題があると実感していることがわかった。また、中学校では、知識の定着に力を入れる傾向があり、生徒の思考力・判断力・表現力を育てる学習活動に取り組む余裕がないと実感していることがわかった。

「尼崎市学力・生活実態調査報告」（平成20年度～平成22年度）によれば、小学校では「知識・技能の定着」に課題があり、中学校では「社会的な思考判断」に課題があることがわかる。

そのうえで、小・中学校がそれぞれ課題としている問題について、本研究部会では「思考力・判断力・表現力」の育成には、「知識・技能を活用する学習活動の充実」が大切であり、そうした能力の基盤となるのが「言語力」ではないかと考えた。

そこで、「言語力」を中心とした様々な能力を育成するため、小・中学校を通じて、授業のなかで共通して取り組める活動に焦点をあてて、研究を進めることにした。

(2) 研究方法について

小学校社会科では、各学年の目標に「考えたことを表現する力の育成」が定められている。本研究部会では、「学習したことをまとめる」「まとめたことを表現する」ことで知識が定着するのではないかと考えた。そこで、「学習したことをまとめる」という活動を、それぞれの授業のなかに取り入れた。

さらに、「まとめの活動」には、「必ず自分の考え」をつけ加えることで、「思考力・判断力・表現力」さらなる向上につながるのではないかと考えた。

研究の成果については、児童・生徒の「まとめの活動」の成果物（例えば、まとめた文章やまとめの作品等）を検討しながら、基礎学力向上との関連性を検証する。

3 実践例

(1) 実践例1(小学校4年生)

中学校の社会科で学習する内容の多くは、小学校のうちに触れているものである。そこに着目して、小中連携をすることができないかと考えた。

小学校で学習したことを中学校でも継続させて活かすためには、小学校で習得した知識を定着させることが大切である。本研究を通してより確実な知識の定着を目指す

ため、学習する内容について十分に思考・判断させて、知っている言葉を用いて短い文章で表現させることを実践することにした（説明的知識の定着）。説明をするためには基礎的な知識が必要となり、実際に言葉を用いて説明することで理解が深まると考えられるからである。また、小学校の社会科では、調べ学習やグループ発表、社会見学などを授業に取り入れる機会が多いため、思考させる時間や判断させる時間も十分に設定することができるからである。

第4学年での実践として、二学期より以下の三点の活動を取り入れてきた。

第一に、学習した内容を要約する活動を取り入れた。これについては、『わたしたちの尼崎』の「地いきにつくした人たち」や教科書（教育出版）の「昔のくらしとまちづくり」で、毎時間ごとに学習した内容を指定したキーワードを用いて短い説明文にまとめるという活動を行った。第4学年の社会科は、主に社会生活と自分との関わりについて学習することが多く、直接的に中学校の社会科の学習内容とは結びつきにくい。しかし、このように要約して簡単に説明する練習を積み重ねることで、5年生以降の社会科での説明的知識の定着につながると考えている。

第二に、新聞づくりの活動を取り入れた。これについては、浄水場見学、浄化センター見学、クリーンセンター見学、リサイクルセンター見学、尼崎閘門見学の後に、学習のまとめとして、施設の役割などを説明した新聞にまとめるという活動を行った。

第三に、ポスターやリーフレットにまとめる活動を取り入れた。これについては、47都道府県の名称と位置を知る学習で行った。第4学年の社会科において、都道府県学習は特に中学校の社会科とつながりのある学習であるため、確実な知識の定着が課題となる。本実践の報告では、この都道府県学習について述べることにする。

1. 実践の概要

目標

- ・ 47都道府県について関心をもって調べることができる。
- ・ 47都道府県の名称や位置を知ることができる。
- ・ 各都道府県について調べたことや考えたことを文章に表現し、説明することができる。

指導にあたって

小学校学習指導要領（社会）の第4学年の内容として、次のようにある。

『(6) 県（都、道、府）の様子について、次のことを資料を活用したり白地図にまとめたりして調べ、県（都、道、府）の特色を考えるようにする。

ア 県（都、道、府）内における自分たちの市（区、町、村）及び我が国における自分たちの県（都、道、府）の地理的位置、47都道府県の名称と位置』

これは中学校学習指導要領（社会）のなかにある、次のような内容とつながりがある。

『(2) 日本の様々な地域

ア 地球儀や地図を活用し、我が国の国土と位置、世界各地との時差、領域の特色と変化、地域区分などを取り上げ、日本の地域構成を大観させる。』

第4学年の児童にとっては、初めて日本の国土を県（都、道、府）という単位で学習することになるため、まず自分たちが住んでいる兵庫県のほかにどのような都道府県があるのかを知ることから始めた。地図帳を見たりワークシートで練習したりする中で、新しい学習に対して意欲的に活動できる児童が多かったが、覚えるとなると抵抗を感じる児童も多かった。次に、都道府県の名称や位置、県庁所在地、人口、有名なものを詳しく調べることにしたが、児童の実態に合わせて自分たちの住む兵庫県を含んだ近畿地方の2府5県をグループで調べ、ポスターにまとめる活動を行った。このとき、有名なものについて教師がテーマを絞りすぎたことと、本やパソコンなどで調べた文章をそのまま引用して説明文を作ってしまったことから、児童が関心を持ちにくかったうえ、理解が浅く知識も定着しにくかった。これを反省点として、残り40の都、道、県について調べ、都道府県リーフレットを作ることにした。

都道府県リーフレットには、八つ切り画用紙に名称や位置、県庁所在地、人口、面積、有名なものを写真とともに書くことにした。また、第二次での学習を活かすことと責任をもって仕上げさせることを目的として、一人一県（都、道）を担当させた。第二次の反省から、説明的知識の定着を図るために以下の二点に留意した。

- ・調べたことや思ったことを説明文にするときに、必ず自分との関わりを考えながら自分の言葉でわかりやすく書くように伝える。
- ・自分との関わりをはっきりさせるため、有名なものは「自分が関心を持ったもの」を選ぶように伝える。

また、十分に思考・判断させる時間をとり、理解を深めながら進めることにも気をつけた。

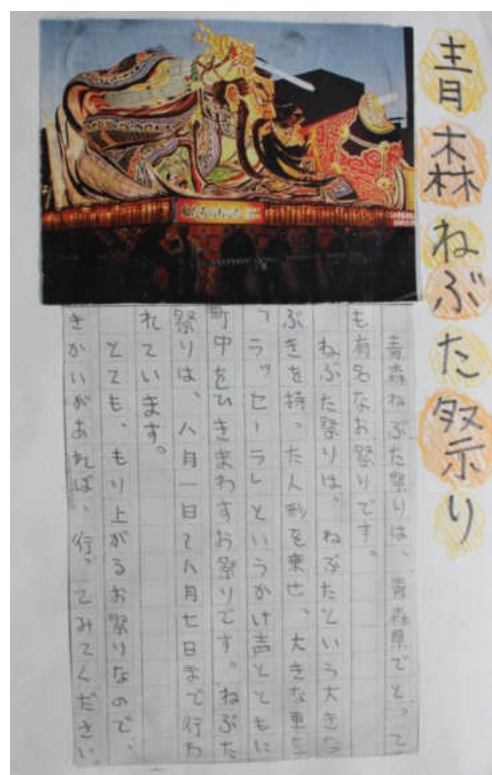
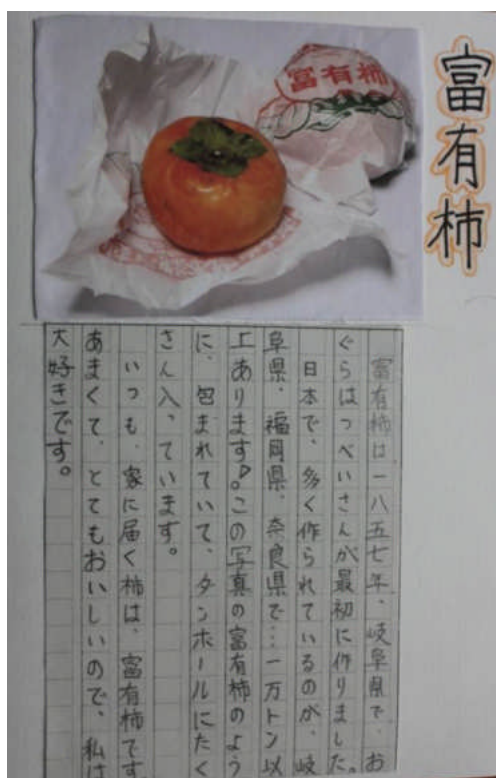
単元計画

次	学習活動	教師の指導・支援(○)及び評価
第二次	・地図帳やワークシートを用いて、47都道府県の名称を知る。	・自分たちが住む兵庫県の位置、周辺の府県に着目させる。 ・漢字でも書くことができるように意識させる。 ○都道府県の特徴的な形にも着目させる。 ・47都道府県に関心をもって知ろうとしている。【関】

第二次	・近畿地方の 2 府 5 県について調べ、グループで分担してポスターにまとめる。 *調べ学習は、図書室やコンピュータ室、を活用する。 ・ポスターの発表会を行い、感想カードに記入する。	・3～4 人のグループに分かれて、県（府）の名称、位置、県庁所在地、人口、有名なものを分担して調べさせる。 ・有名なものは、県（府）の山や川などの自然、農業、産業、文化、歴史から選ばせる。 ・位置を確認しながら発表を聞くように意識させる。 ・担当の県（府）について関心をもって調べようとしている。【関】 ・調べたことを文章に表現し、説明することができる。【思・判・表】 ・2 府 5 県の名称と位置を知ることができたか。【知・理】
第三次	・近畿地方以外の 40 都道府県を調べ、都道府県リーフレットにまとめる。 *調べ学習は、図書室やコンピュータ室、を活用する。 ・都道府県リーフレットの発表会を行い、感想カードに記入する。	・教師の作成したモデルを参考にさせる。 ・県（都、道）の名称、位置、形、県庁所在地、人口、面積、有名なものを調べさせる。 ・有名なものは関心のもつことができるものを選ぶよう伝える。 ・有名なものと自分との関わり（どう思ったか、どうしてそれを選んだか）についても書かせる。 ・初め・中・終わりを意識して書かせる。 ○説明が難しいものは、意味を伝えたり国語辞典を引くよう助言したりして、自分の言葉で説明した文章を書かせる。 ・位置を確認しながら発表を聞くように意識させる。 ・担当の県（都、道）について関心をもって調べようとしている。【関】 ・調べたことや思ったことを文章に表現し、説明することができる。【思・判・表】 ・47 都道府県の名称や位置を知ることができる。【知・理】

2. 授業の様子や感想等

前述の通り、都道府県の学習は初めてとなるが、当該学級の児童は抵抗なく取り組むことができた。第二次では、思考・判断の場面が少なかったため、ポスターを作り上げた後に調べたことを口頭で説明できる児童が一人しかいなかった。しかし、第三次では①調べる②考える③まとめる④発表するという手順で学習を行ったため、ほとんどの児童が自信をもって説明することができた。都道府県の学習においても、思考・判断の場面を多く設定し、自分との関わりを意識しながら説明する活動を取り入れることは児童の意欲や知識の定着に良い影響があると考えられる。



3. 実践の考察

今回、社会科の授業の中で思考・判断させる場面を意図的に設定し、説明する活動を取り入れることで、以前と比べて児童の理解が深まったように感じられる。始めたばかりの頃は、キーワードを指定していても文章を作ることが難しかったり、キーワードを入れることができなかったりする児童はいたが、練習を重ねることでコツをつかみ、自分の考えも自然と加える児童も出てきた。都道府県学習では、説明の中にさらに自分との関わりも意識させて書かせることで、児童が物事を深く理解しようとする態度が見られ、実際に知識を身につけることもできた。ただし、まだ十分な確証が得られていないので、今後も説明的知識の定着を図るために、自分との関わりを意識しながら説明する活動を継続し、経過を見ていきたい。

(2) 実践例2 (小学校4年生)

第4学年 「むかしのくらしとまちづくり」 (教育出版4年下)

「地いきにつくした人たち」 (わたしたちのあまがさき)

本研究部会のテーマである「社会科の基礎学力向上と小中の効果的な連携」をするためには、「尼崎市学力・生活実態調査」報告でも課題に挙げられている「知識・理解の定着」を土台にして、学び方の面で工夫し、中学校での社会科の学習につなげていくことが必要だと考えた。

そこで、○基本的な用語を意識した授業

○説明的知識を育てるための文章を書かせる授業

という二つのことを中心に実践した。

1. 実践の概要

本単元のテーマである昔のことについての興味関心は比較的強い。また、観察や作業など、体を動かして体験的に学ぶことを好む児童も多い。

そこで、尼崎の昔のことについてアンケートを行い、児童の意識調査を試みた。

アンケート項目	知っている	知らない
知っている地域の発展に 尽くした先人	17人 近松門左衛門・契沖・戸田左門氏鉄	14人
その先人が実践したことについて	2人 近松 劇作家	15人
歴史上にでてくる尼崎のこと	12人 ジェーン台風・水争い・阪神大震災	19人
尼崎に残る昔	8人 須佐男神社・尼崎城・墓地	23人
尼崎の名前の由来	0人	31人
昔のことについて興味がある	30人	1人

アンケートの結果から、半数近い児童が尼崎にゆかりのある先人について知っていることがわかった。しかし、名前を知っているだけで、先人達は何をしたのか、その時代にどんな事実があったのかを理解している児童は少なかった。

そこで、教科書に載っている地域のために尽くした先人の具体的事例を挙げ、「どこで・だれが・何をして・なぜそうなり・どうなったのか」を手がかりに文章でまとめさせた。まとめる時には、自分の生活とのかかわりを意識させながら、自分の考えを書かせるようにした。そうすることで、社会的事象を身近な出来事としてとらえ、知識として定着させられると考えた。

第一次 地いきにつくした先人を知ろう

「いのちの水一水を守った人たち」 (わたしたちの尼崎) では、身近な浜田川周辺の水あらしを学習することで、地域の発展や生活の向上に尽くした先人の働きに

ついて、児童が興味を持って読み進めていけると考えた。今では平凡な場所に見える所も、先人たちの苦労や願いによって築かれ、支えられてきたことを知ることができた。自分たちが当たり前のように飲んでいる水は、先人たちにとっては、命と引きかえにしても手に入れたいものであるなど、自分の生活と比較させながら読ませることで、調べ学習をする時の意欲づけになった。

次に「米をとれる土地をつくろう」（教育出版4年下）では、尼崎市以外の地域に尽くした先人について学習した。

昔の土地開発の背景には、開発しなければならない差し迫った動機がある。多くの場合が、地域の生産力が低く、少しでもそれを高めたいという動機である。「食べるため、生きるための開発」、そのことに共感を持たせながら理解につなげていくように指導した。

それぞれの学習の最後には、学習のまとめとして説明的な短い文章を書かせた。そこには、基本的な用語をおさえさせながら出来事の記事を書かせ、自分の生活に関連させるなど、必ず自分の考えも書くように指導した。

第二次 地いきにつくした先人の願いや思いを知ろう

二つの地域に尽くした先人の事例を比較させた。自分の地域と他の地域の共通点や相違点を見つけることで、昔の人の生活や思い、願いをより明確にすることができた。ここでは、農業が生活の基盤であること（年貢制度）、生活が苦しいこと、場所は違っても水を求める時代背景があるなど、水の大切さが比べることによって見つけることができた。

第三次 タイムスリップ尼崎

尼崎全体に視野を広げ、尼崎の発展につくした先人たちの働きについて調べ学習をした。「①課題設定②情報収集③情報の編集④発表⑤ふりかえり」の流れで展開していった。

- ①課題設定では、興味があることから課題を考えさせ、一人ひとりを面接しながら課題発見の支援をした。設定した課題をもとに、同じ課題やよく似た課題を持っている児童でグループを作らせた。
- ②情報収集では、本、インターネットだけでなく、現地に行き調査活動をしたり、詳しい専門家に来てもらうなど、体験的な学習を行った。
- ③情報の編集では、集めた資料の取捨選択をしたり、できるだけ自分の言葉に置き換えたりしながら、まとめるように指導した。
- ④発表では、調べたことを自分の言葉でわかりやすく説明するよう指導した。聞く側にも、メモを取らせて質問をさせたり、自分の考えと比べながら聞かせたりした。そうすることで、自分の知識として定着させることをはかった。
- ⑤ふりかえりでは、自分や友だちの調べたことをもとに、尼崎の発展に尽くした先人の働きについて自分の考えを持たせ、新聞にまとめさせた。

以下のように授業を実践した。

目標

- ・2つの事例を比較することで、昔の人の生活や思い、願いを考えることができる。

展開

学習活動	指導上の留意点	評価（方法）
1. 前次までの振り返りをする。	・尼崎の水あらし、吉田新田のことをまとめたノートで振り返らせる	・意欲的に発表することができる。（発表）
2. 学習のめあてを知る。	尼崎の水あらしと吉田新田の話をくらべてみよう	
3. 2つの話の相違点、共通点を考える。 相違点 ・場所がちがう。 ・尼崎は農民同士で争っている。 ・尼崎は死人がでている。 共通点 ・どちらも農業をしている。 ・水が関係している ・どちらも目的は、多くの農作物をとるためにしている。	・ノートに箇条書きさせる。 ・できるだけ多くの相違点、共通点をみつけさせる。 ・ノートにまとめてことを手がかりに考えさせる。 ・グループで交流して、友だちの意見を聞き、付け加えをする。	・できるだけ多くの相違点、共通点をみつけようとしている。（ノート） ・友だちの考えを進んで聞き、自分の考えに活かそうとしている。（態度）
4. 全体発表	・自分の考えと友だちの考えを比べながら聞くようにさせる。	・進んで発表しようとしている。（発表）
5. 授業のまとめをする。	・2つの話の共通点からわかったことを簡単な文章にまとめさせる。 ・自分の考えたことや思ったことも書かせる。	・自分の考えを進んで書こうとしている。（ノート）

6. 発表をする。	・自分の考えと友だちの考えを比べながら聞くようにさせる。	・進んで発表しようとしている。 (発表)
-----------	------------------------------	-------------------------

2. 実践の考察

○基本的な用語を意識した授業について

基本的な用語をおさえることは、本單元だけでなく、社会科や他教科を通じて指導してきた。授業ごとのふりかえりや単元のまとめなどで、重要語句を児童と確認しながら文章にして書くことを、繰り返し行った。そうすることで、文章中の重要語句を見つける習慣が付き、児童の中には予習などで重要語句を抜き出してくる児童も出てきた。また、教科書とわたしたちの尼崎を比べて読むことで、普段は大切な用語を見落としてしまう児童も、見落としがなくなってきた。

○説明的知識を育てるための文章を書かせる授業について

学習したことや調べたことを知識として定着させるために、社会的事象と自分の生活とのつながりを常に意識させながら学習に取り組んだ。最初は、全く文章が書けない児童もいたが、何度も回数を重ねるごとに書けるようになってきた。

また、調べたことや教科書に載っている内容をそのまま報告するだけでなく、自分の言葉で書き表す児童も増えてきた。

このように、学習のまとめを説明的な文章として書くことで、用語の理解につながり、知識の定着につながったのではないかと考える。

今回の授業実践は、「社会科の基礎学力向上と小中の効果的な連携」というテーマのもと、おもに「知識・理解」の定着を目指して行った。1学期当初に比べると、知識理解のテストにおける平均点は上がってきている。特に記述問題に関しては、全く書けていなかった児童が、しだいに書けるようになってきた。しかしこれが、時間が経っても知識として定着しているものかどうかは、今後も検証が必要である。

また、3・4年生では、高学年で学習する産業、地理、歴史のような中学校の社会科に直接関わってくるような学習ではなく、地域社会に関わる学習が多い。そこで、「学習のしかた」や「調べ方」「まとめ方」を中心に、高学年や中学校につながる指導を実践した。これについても、児童に対して目的を明確に示し、学習モデルを提示する必要性を感じた。

小・中学校が連携して9年間を見通し、系統立てた指導を続けていくことで、課題である知識の定着につながるのではないかと考える。

中学校の社会科の先生と意見交換をしながら研究に取り組めたことで、小学校での知識定着における課題について、その解決の糸口が見えた実感している。

(3) 実践例3(小学校6年生)

1. 実践の概要

ア 児童の実態

本学級の児童は、与えられた学習課題に対し、真剣に取り組む考えることができる。また、興味を持ったことなどを発展的に調べ、自習学習に励む児童もいる。一方、与えられた課題をするだけで、そこから新しい課題を見つけることができない児童や、取り組んだ課題に対しても、積極的に発表することができない児童もいる。いずれにせよ、基礎・基本の知識を学ぶ活動は積極的に行うが、それを表現し、自分なりに解釈をすることが苦手である。そこで、肖像画や錦絵などの資料を使った「一人読み」を通して、当時の人々への影響を考え、授業の終わりに要約を書く活動をする。そうすることで、言語活動の充実を図り、学習した知識を自分なりに表現できるようにしたい。

イ 授業の実践

単元名 第6学年 社会科 単元「近代国家への歩み」

指導計画(全12時間)

近代国家への歩み

1 オリエンテーション 新しい国づくりの足跡を訪ねよう

2 新しい時代の幕あけ(7時間)

①黒船が来た

②江戸幕府がたおれる

③新しい政府をつくる

④西洋に追いつけ

⑤人々の暮らしが変わった(本時)

⑥自由民権運動が広まる

⑦国会が開かれる

3 二つの戦争と日本・アジア(5時間)

①日清・日露の戦い

②戦争の影響と朝鮮の併合

③50年かかった条約改正

④産業の発達と暮らしの変化

⑤平等な社会を目指して

4 まとめ・発展の学習

近代化を進めた人や施設をポスターで紹介しよう

本時の学習

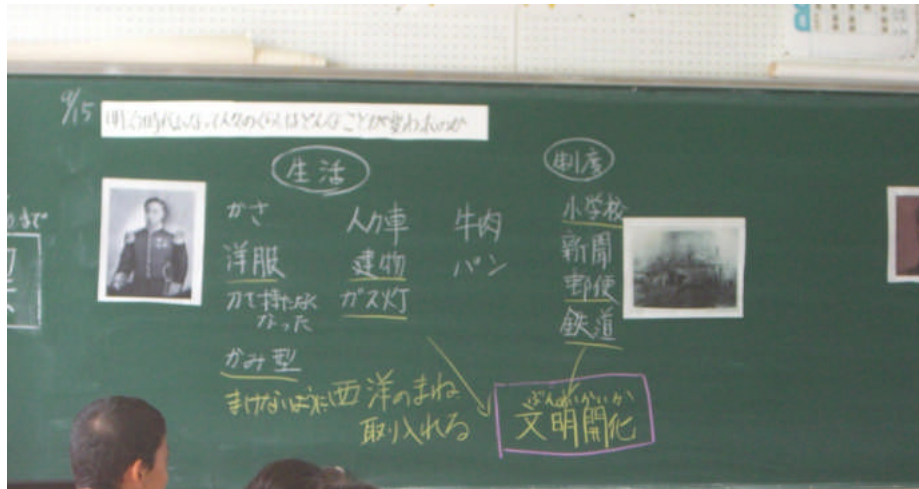
(1) 当時の街の様子や錦絵などの資料を通し、文明開化による人々の生活の変化を読み取り、新しい時代になり、西洋の文化、考え方が取り入れられたことについて理解を深める

(2) 準備物 提示資料(黒板掲示用)・提示資料(児童配布用)

(3) 展 開

学習活動	指導上の留意点	評価
1. 前時までの振り返りをする。 2. 本時の学習のめあてを知る ・明治時代になり人々の生活様式が変わってきたことを知る。	・明治政府が様々な改革を行ってきたことを思い出す。 ・明治時代の建築物の写真を見せる。	
明治時代になって人々のくらしはどんなことが変わってきたのだろうか		
3. 明治時代の人々の様子を調べ考える ・街にどのような変化があったのか知る。 ・新しい制度も導入されたことを知る。 ・なぜ、西洋の文化を取り入れようとしたのか考える。 ・明治時代の人々の考え方について知る	・「明治初めごろの東京の様子」の錦絵を見て考える。 ・江戸時代の町の様子と比較しながら考える。 ・西洋の文化が多く取り入れられたことに気づかせる。 ・現代の基盤となる諸制度がこの時代に作られたことに気づかせる。 ・当時の西洋が進んでいた様子をテレビで見せる。 ・西洋に追いつくために、積極的に取り入れてきたことに気づかせる。 ・福沢諭吉のエピソードをテレビで紹介する。 ・文化や制度だけではなく、人々の考え方も変わっていったことに気づかせる。	・資料の一人読みをして調べることができたか。 ・自分の意見を発表し、友だちの意見と比較しながら考えることができたか。 ・文明開化で人々の暮らしだけではなく、考え方も変わったことを理解することができたか。
4. まとめ	・文明開化について要約をする。	

板書と授業の様子



2. 実践の考察

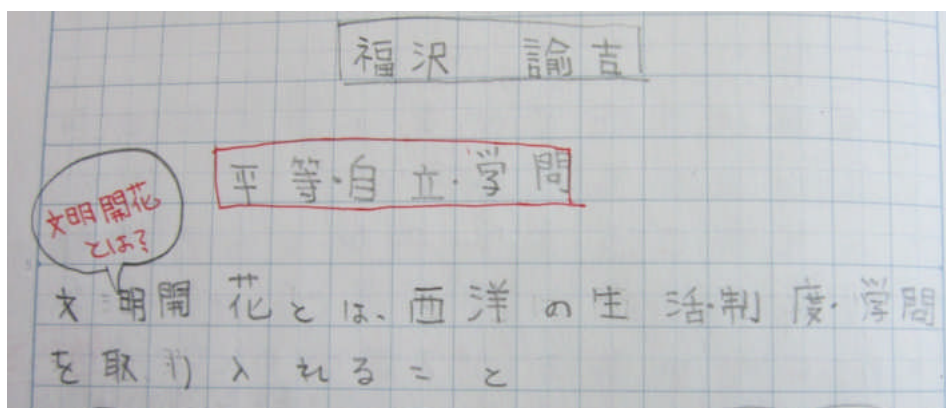
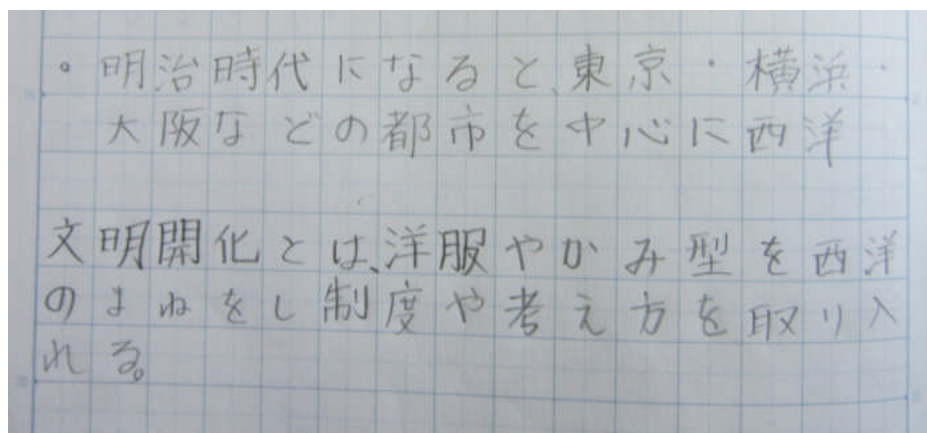
児童は「廃藩置県」や「殖産興業」などの単語についてはしっかりと覚えているが、それを説明する表現活動ができる児童は少ない。本学級では、1学期から継続して、授業の最後に「要約」の活動を取り入れてきた。最初は何をどうやってまとめればよいのか、戸惑う児童も少なくなかった。しかし、授業で学習

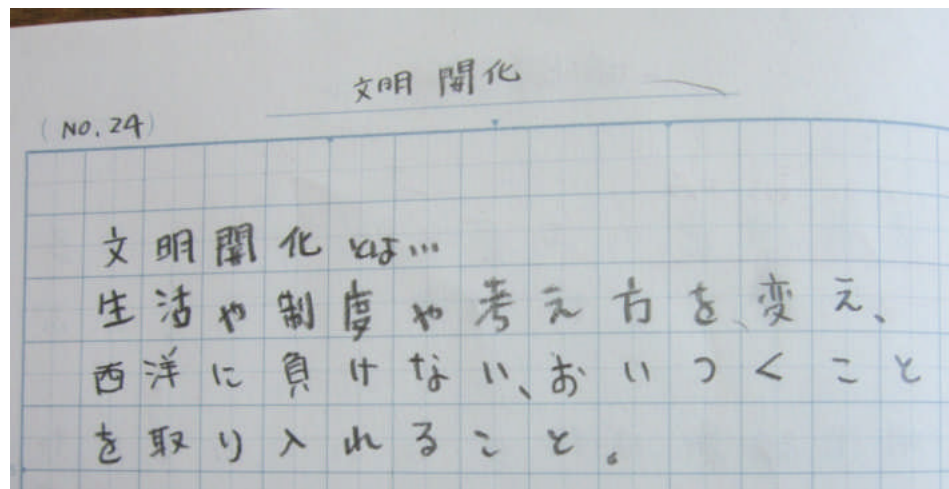
したキーワードをつなげる作業をすることで、2学期になって、次第にまとめを書くことができる児童も増えてきた。

1時間の授業の中でこのような表現活動を取り入れることで、次の時間で前時のふりかえりをスムーズに行うことができた。また、すでに学習したことが「これから学習することにどのようにつながるのか」を考えながら学習できる児童も増えてきた。

このような表現活動を行う上で重要なことは、提示する資料の精選だと考える。つまり、学習した内容が遠い昔の、自分たちの生活とは関わりのないものとなってしまうと、いわゆる「他人事」としてとらえ、知識としての定着が弱いように思える。歴史は積み重なって現代につながり、その結果、こうして我々が現代で生活している。歴史的事象を自分の立場で考え、自分の言葉で表現することが重要であると考え。そのために、身近な歴史資料を提示することが効果的ではないだろうか。

本時では、文明開化を学習するにあたり、尼崎の資料として「神埼ステーション」の写真や尼崎藩主であった「櫻井忠興肖像」を提示することで、文明開化が尼崎でも現実に起きていたことを気づかせることができたと思う。しかしながら、「要約」では自分の考えを書くまでには至っていない。「他人事」とならないためにも、「自分はそれに対してどう考えるのか」ということも書くように指導する必要があると考える。





本研究部会は、「効果的な小中連携」を研究テーマに掲げている。本時のような要約・表現活動は、中学校で学習するときに必要な基礎・基本の知識の定着につながると考えられる。小学校の児童が、やがて中学校で学習する時には学習指導要領に記されている語句は、自らの言葉で説明できるように指導しておく必要があると考える。

今回、このような授業に取り組んでみて、今後、さらにこのような活動を継続して行い、さらに中学校でもこのような活動を継続して行えるようにしていく必要があると考える。また、要約には、自分の考えを書くことができるように指導していく必要があると考える。

(4) 実践例4 (中学校2年生 歴史的分野)

中学2年生の社会科（歴史的分野）の授業において、本研究部会の研究テーマをもとに実践授業を行った。単元は「平安の都と武士のおこり」である。この授業を行うにあたり、以下のような3つの実践テーマを設定した。

- ① 生徒による主体的な言語活動が行えるように留意する。
- ② 思考力を養うという観点に立ち、生徒自身が自ら考えて、本授業のテーマに即した仮説の設定を行う。また、その検証を、文章表記を通して行う。
- ③ 写真や図・イラストを提示することによって、生徒が、視覚的にも歴史を体感できるように心がける。

1. 実践の概要

以下は、実践授業の指導案である。

第二学年 社会科(歴史的分野)学習指導案

1, 単 元 名 平安の都と武士のおこり

2, 単元目標

東アジアの動向と連動する形で天皇を中心とする王朝国家は、律令を軸とした中央集権国家の樹立を志向してきた。8 世紀に入ると、桓武天皇は政界に対して強い影響力を持つようになってきた奈良の仏教勢力を断ち、律令政治を再建することを目的として平安京への遷都を計画する。以後、京都を中心として律令の再建が進められるが、改革はなかなか進展しなかった。この単元では、王朝国家から院政への流れを律令制度の崩れからとらえ、しだいに社会の中心的存在に武士が成長していく過程をあわせて関連づけて理解させる。

3, 生徒観

本学級の生徒はおおむね意欲を持ってまじめな態度で授業に取り組むことができる。しかし、学習内容についての定着率は低く、小学校で既に学習した内容についての記憶も曖昧である。授業中の質問と発問に関しては積極的に発言を行うリーダー的な生徒が数名いるが、自己の意見を全体の前で公表することに対して苦手意識を持っている生徒が多い。自己の考えや、自ら発見したことを「文章」として表現することによって内容を整理すると共に、言語活動における力も伸ばせるように指導していきたい。

4, 指導観

本単元では、律令制度が形骸化して王朝国家から院政へと政治形態が変容し、さらに新興勢力である武士が中央に進出してくる様子を生徒に理解させる。中学歴史の授業の中身は、ともすれば用語解説の羅列になってしまう傾向がある。本単元では、できるだけ多くの「歴史人物に関するエピソード」を生徒に提示できるように心がけ、「歴史」という事象が、先人達から現代の我々へと繋がる「物語」であるという点を意識させたい。また写真や図・イラストを提示することによって、視覚的にも歴史を体感できるように心がける。

5, 指導計画（全4時間）

「平安の都と武士のおこり」

- (1) 京都に都を移すー（1時間）
- (2) 摂関政治がはじまるー（1時間）
- (3) 国風文化ー（1時間）
- (4) 院政がはじまるー（本時）

6, 本時の目標

- (1) 院政と平氏政権がどのようにして成立したかを理解する。

(2) 荘園の広がりとその影響について理解する。

7, 展開

本時の流れ	学習内容	生徒の活動	指導上の留意点
導入	前時の振り返り 平清盛について	・忘れ物チェック ・前回までの授業の振り返りを行う。 ・写真を提示しながら質問に答える。 (写真) ・神戸港の写真 ・平清盛・音戸の銅像の写真 ・平清盛について知っていることを発表しあう。 ・教科書 P50 の「僧兵」の写真 ・貴族を警護する武士の写真	授業の準備物の確認を行う。 平清盛の写真を見て、清盛について知っていることを発表させる。 新たな時代を切り開く武士のイメージを印象付ける。 武装する僧侶の様子を見せることにより、朝廷の支配力が低下し治安が悪化していることを認識させる。 「上皇」という言葉の意味について考えさせる。
展開	①上皇と院政	→ワークシートをもとにして、自分の推論（考え）を文章化させる。 「藤原氏の摂関政治をどう思う？」 ・天皇の気持ちになって考えてみよう。 ・中級貴族の気持ちになって考えてみよう ・摂関家を抑える為に必要なものは？	院政が摂関政治を抑える意図の元で発達したことを理解させる。 「上皇」や「院」という存在の意味について、生徒にとって身近な例をあげて理解させる。 ※クラブ活動の先輩の例 荘園が藤原氏のような大貴族や上皇の元に集まった理由についてイラストを用いて理解させる。楽しみながら生徒が作業に取り組めるように留意する。

	②荘園の発展	荘園という言葉の意味→教科書で確認 荘園という歴史用語の意味を理解する。	
	③平氏の政治	【保元の乱】 貴族の権力争いが、武士の力によって解決されたことを理解する。 (上皇と天皇の対立が原因) 【平治の乱】 2大武士団である源氏と平氏がぶつかりあい、結果勝利した平清盛が大きな力を持ったことを理解する。 →教科書を読んで、内容をノートに整理する	2つの乱を通して、貴族間の権力抗争の勝敗の鍵を武士が握っていたことを理解させる。 この乱の結果、武士の力が中央にも大きな影響力を有し始めたことを理解させる。
	④奥州 藤原氏	【平清盛の改革】 平清盛が初めての武士政権を樹立したことを理解する。 福原遷都・海外貿易などの政策について理解する。 →教科書を読む 奥州藤原氏が東北地方において独自の勢力基盤を築いていたことを理解する。	導入で提示した平清盛の写真を再度提示することによって印象を深める。 「平清盛の政策」が有していた先進性について、生徒が気づけるように指導を行う。 中尊寺金色堂のポスターを提示し、奥州藤原氏が有していた豊穡な財力と、文化の高さを理解させる。
まとめ	本時の内容確認	本時の内容について板書などを見直しながら確認し直す。(文章にまとめる)	本時の内容について簡潔に整理する。

指導案の「生徒観」でも述べているが、授業中の生徒の傾向として、自分の意見を全体の前で公表することに対して苦手意識を持っている生徒が多い。これは、児童間の意見交換を盛んに行っている小学校社会科の授業と比較すると、大きく異なる点である。そこで、本授業においては、レジュメを使用して、自分の考えや自ら発見したことを「文章」として表現させるようにした。自分の意見や感想を文章表記させることで学習内容の整理を行い、同時に言語活動における力も伸ばしていけるように指導した。

このワークシートを作成する上で留意したのは、「文章表記」という活動に対して苦手意識を持っている生徒が多いことを考慮し、出来るだけ作業に取り組むことへの抵抗を和らげるよう心がけたことである。すなわち、文章化した内容が必ずしも「正解」「不正解」という形で色分けされてしまわないよう留意した。またイラストなどを取り入れることによって生徒がイメージしやすいワークシートになることを心がけた。

【参考資料①】

【参考資料②】

66

また授業の最後には、まとめとして、「①院政とは、どのような政治ですか?」、
「②武士の力が、都の政治にまで影響を及ぼすようになった理由は何か?」、
「③荘園とは、どのようなものであるか説明しなさい」という三つの課題を与え、生徒に文章表記させた。

2. 実践の考察

まず【参考資料①】の内容についてであるが、「藤原氏の摂関政治をどう思うか?」という課題について、天皇、中級貴族という立場に立って生徒自らが考え、感想を書いた。その内容は「藤原氏がにくい」、「藤原氏をほろぼして自分が政治の実権にぎりたいたい」、「藤原氏がいなければ自分にも出世のチャンスがめぐってくるかもしれない」というような解答が殆どであった。このことから、天皇と摂関家の関係が次第に対立していく様子は理解できたのではないと思われる。中には「外戚である藤原氏に政治の実権を握ってもらえれば、天皇としては自分の仕事が軽減されて非常に楽である」というような面白い回答もみられたが、クラスに一人いるかいけないかの割合であり、少数派であった。

【参考資料①】に関しては、生徒からの意見がほぼ統一され、固定化してしまったような感があったが、【参考資料②】に関しては様々な意見が交わされた。「天皇や下級貴族の立場に立って、強力な藤原氏の権力に対抗するためには何が必要だと思いますか?」という形の問いに対する「生徒の仮説」で多かったのは、次のような内容である。「藤原氏の権力に対抗するために必要なものは…」→「大規模な軍隊」「財力」「強力な武器」「頭が良い官僚」「暗殺者」「藤原氏とのコネクション」「仲間」「家臣との絆」「勇気」、中には稚拙な内容のものも含まれるが、この課題に関しては能動的に取り組む生徒が多く、【参考資料①】と比べて、生徒間の意見交換にも広がりが見られた。また、生徒の自由な発想がよく出ていたと思う。

この後の検証では、「授業のまとめ」として生徒が書き出したものは、ほとんどが教科書またはノートからの書き出しであった。学習内容を整理するうえでは有益なものであり、授業の見直しにもつながるものであったが、思考力・判断力を育むという観点から見れば、【参考資料①】や【参考資料②】で見られたような「生徒の自由な発想」はあまり見られなかった。

今回の実践では「言語活動の充実」というテーマを掲げ、中学校社会科の授業で、小学校の授業に多く見られる「思考・判断力を育む」という観点を取り入れてみることを試みた。いわゆる「知識の詰め込み」中心の授業に比べ、それぞれの歴史人物の立場に立っての意見交換や、仮説の検証という取り組みに対して生徒は能動的に取り組む傾向がみられた。しかし、「言語活動の充実」という観点から今回の実践を振り返った場合、まだまだ課題は山積している。言語活動を充実させ、生徒たちの文章表現力を「思考・判断力」に結びつけ、生徒たちの知識の定着へとつなげていくためには、継続的な取り組みが必要であり、決して短期間で目に見えた成果が得られるものではないと考える。

今回の取り組みでは、生徒に文章表現をさせる場面を意図的に設けてみたが、これは、文章表記に対して苦手意識を持つ生徒たちに「いかにして文章を書かせるのか」という点に重点を置いた取り組みでもあった。いわば、「言語活動の充実を目指した

学習活動」の、まだ導入部分に過ぎないと考える。授業での言語活動を通して、生徒が、個性豊かに思考を重ね、そのうえで多面的・多角的な視野が養われるように導いていく、そうした授業内容へと高めていく必要がある。

今回の実践では取り組めなかったが、今後はクラスの中で大きく意見が分かれるような課題も設定してみれば、意見交換や文章表現にも広がりが見られるのではないかと思う。また、「授業のまとめ」や「仮説の検証」については上述したように、教科書やノートの単純な整理作業に陥ってしまう側面がある。確かに作業内容は生徒による文章表記ではあるが、これが「言語活動の充実」につながるかといえば、疑問である。また、中学校社会科の授業においては、このような活動を毎時間継続的に行うということについては、考慮すべき点がある。まず第一には、年間授業時数との兼ね合いが挙げられる。授業の進度を考えれば、いかに授業内容を精選するかという観点が必要になるからである。

今後も様々な課題を考慮したうえで、社会科が「単なる暗記の教科」として生徒に認識されるのではなく、小学校からの系統立った知識を定着させ、さらに思考力を育成する学習内容となるように、「言語活動の充実」を含めた教材研究を積み重ねていく必要があると感じた。

(5) 実践例5 (中学校2年生 歴史的分野)

限られた時間で出来るだけ多くの知識や用語を確実に覚えさせなければならないという現状の中、私自身は、「思考・判断・表現」のそれぞれの能力を伸ばすことに時間をかけることで、知識の習得にかかる時間が減少するのではないかという考えを持っていた。今後、「知識の習得」と「思考力・判断力・表現力の育成」のバランスが重視される中で、この考えについて、何らかの答えを見つけることは大切なことであると思い、自らの授業実践について、次のようなテーマを設定した。

- 1 「思考・判断・表現」に関する、生徒の意識・実態を調査する。
- 2 実践を行うことによって、次の疑問に対する解答の糸口を見つける。
 - 「思考・判断・表現」の力を伸ばす取り組みによって、基礎的な知識や用語は習得できるか。
 - 取り組みをすることで、生徒の苦手意識を変えることができるか。
 - 「思考・判断・表現」の力を伸ばす取り組みによって得た知識と丸暗記して得た知識のうち、どちらがより知識が定着するか。

1. 実践の概要

今回は、特に授業進度に追われる傾向にある第2学年の歴史の授業において取り組みを行った。その中で、中学校学習指導要領に示されている「時代の概略を説明する」力をつけることを主眼に置いた。

まず、実践に先立って「思考・判断・表現」に関する生徒の実態を知るために、アンケートを行い、そのうえで2部構成の実践を行った。まず第1部では、既習の時代（鎌倉時代）について新たに解説を加えることなく、ひたすら丸暗記を繰り返す時間を取り、基礎的な単語等を覚えさせる。そして小テストを行い、平均点を算出する。第2部では、第1部で取り上げた時代（鎌倉時代）とは別の既習の時代（平安時代）

について、時代の概略を説明させるための取り組みをしたうえで小テストを行い、平均点を算出する。その後、第1部と第2部の平均点を比較した。

さらに、定着度を測るために、一定期間の間隔をおいた後、予告なしで同じ小テストを行い、再び平均点を比較した。

ア 生徒の意識

事前に行った生徒に対するアンケートの質問と回答は次の通りである。

総数 37

①社会科が好きですか？

はい：20人　いいえ：10人　まあまあ（ふつう）：7人

②「説明しなさい」という問題が好きですか。

はい：5人　いいえ：31人　まあまあ（ふつう）：1人

③それはなぜですか。

好きな理由

- ・同じことを説明するのが多いから。1つ覚えれば、色んなプリントで解けるから。
- ・説明の仕方を覚えればいいから。
- ・分からなかったとしても答え合わせをすればくわしく頭に入るから。
- ・好きだから。社会科は説明できないと意味ないから。

嫌いな理由（複数回答あり）

- ・書き方、説明の仕方が分からないから。9
- ・人に伝えるのが苦手だから。3
- ・めんどくさい1
- ・長いから6
- ・文章を書くのが苦手だから10
- ・そもそも理解していないから1
- ・たくさんの答え方があってわかりにくい1
- ・間違えたら△か×になるから1
- ・何を書けばいいのか分からないから3
- ・深く考えて理解しないといけないから1

④詰め込みと丸暗記では、どちらが得意ですか。

丸暗記：23人　考える：9人　どちらも得意：1人　どちらも苦手：3人
どちらも言えない：1人

⑤詰め込みと丸暗記では、記憶に残っているのはどちらですか？

丸暗記：14人　考える：18人　どちらも残っている：3人
どちらも残っていない：1人　無回答：1人

「説明しなさいという問題が好きですか」という質問に「はい」と答えた5人のうち、3人が「歴史が好き」、2人が「歴史が嫌い」と回答している。

また、多くの生徒は、④では丸暗記の方が得意とし、「説明しなさい」という問題が苦手としながらも、記憶に残っているのはしっかり考えて理解する方であるとする。すなわち、生徒の学習プロセスは次のようになっている可能性があると思われる。

①授業の中で「思考・判断・表現」の力を伸ばすための取り組みができていない。

②したがって、家でも丸暗記の勉強方法に終始せざるを得ない生徒が多い。

③理解をした方が記憶に残るとしながらも、そのプロセスを身につけていない。

イ 授業の実践

1 鎌倉時代を振り返る。

過程	学習内容・生徒の活動	教師の指導・教材	指導上の留意点
導入 5分	・趣旨説明		
展 開 35分	これまでの学習をもとに、ノート、教科書等を使って丸暗記をする。	生徒が用語を覚えることに集中させるが、質問等があれば答える。	平安時代と覚える分量を同程度にするために、鎌倉仏教は試験範囲から除外していることを伝達した。
展 開 10分	小テストを行う	小テストは、基礎的な用語を問う問題10問に加え、「鎌倉時代とはどういう時代か、説明しなさい」という時代の概略を書かせる問題を設定。	「用語は分かるが漢字が苦手」という生徒もいる。用語を知識として備えているかどうかを調査したいという点から、生徒には漢字にふりがなをふることを認めた。その上で、「ひらがなで解答しても正解」、「漢字も正しく書いて正解」という2種類の採点を行った。 記述問題については、記述内容と量で判断する。

2 平安時代を振り返る。

過程	学習内容・生徒の活動	教師の指導・教材	指導上の留意点・評価
導入 5分	趣旨説明		
展開 35分	平安時代は、摂関政治・院政・武士が活躍し始めた時代とそれぞれの特徴をおさえながら理解する。 ・最終的に「平安時代はどのような時代か」を説明させる。	これまでの学習をもとに、プリントを作成して、段階的に平安時代の理解ができるように授業を行う。	あまり詳しく解説をすると、平均点を比較しづらくなるため、ポイントをおさえる程度にとどめ、そのポイントに基づいて最終的に生徒が概略を説明する。
展開 10分	小テストを行う	テストの内容等については、前回と同様。	

ウ 実践の結果

1 第1回小テスト

●平均点（10点満点中）

鎌倉時代 「ひらがな正解」…5.7点

「漢字のみ正解」…5.3点

平安時代 「ひらがな正解」…7.0点

「漢字のみ正解」…6.5点

●記述問題（「〇〇時代とはどういう時代か説明しなさい」）の結果

鎌倉時代 無回答…10人

ひと言だけ…8人（武士が中心の時代、など）

平安時代 無回答…4人

ひと言だけ…5人

2 第2回小テスト（第1回テストの約2カ月後）

●平均点（10点満点中）

鎌倉時代 「ひらがな正解」…5.3点（前回比-0.4点）

「漢字のみ正解」…5.2点（前回比-0.1点）

平安時代 「ひらがな正解」…5.1点（前回比-1.9点）

「漢字のみ正解」…4.8点（前回比-1.7点）

●記述問題（「〇〇時代とはどういう時代か説明しなさい」）の結果

鎌倉時代、平安時代とも大半が無回答、もしくはひと言での解答であり、きちんと書けている生徒は数名しかいなかった。

3 生徒の意識調査 2

第1回の小テストを終えた後、生徒に再びアンケートを取った。結果は次の通りである。

有効総数 34

① 暗記と説明する時、どちらが歴史の流れが分かったか。

丸暗記：12人 説明：19人 どちらも理解：2人 どちらも理解不可：1人

②丸暗記と説明、どちらがより重要なポイントをおさえられたか。

丸暗記：14人 説明：17人 どちらも理解：2人 どちらも理解不可：1名

③暗記と説明、単語が頭に残りやすいのはどちらか。

丸暗記：25人 説明：6人 どちらも○：2人 どちらも×：1人

④説明をする練習をしてから「説明しなさい」という問題に取り組みやすくなったか

はい：20人 いいえ：13人 分からない：1人

⑤丸暗記と説明をする勉強、必要なのはどちらだと感じたか。

丸暗記：2人

・よく頭に入るから。

説明：8人

・丸暗記は覚えてもすぐ忘れるが、説明なら覚えても忘れることがない。

・説明する勉強、歴史の流れや説明する分を考える力が身につく。

・説明が出来た方がなぜそうなったのかを分かりやすく覚えられる。

・単語の意味もしっかり理解できるし、流れが分かりやすい。

どちらも：24人

・説明するだけだと抜けるかもしれないから、丸暗記も大切。

・単語も覚えられて、その理由も答えられるようになるから。

・丸暗記をしても説明できなければ意味がないから。

・両方できるようになったほうが覚えやすいから。

・学校では説明をしっかり理解して、家では丸暗記をするやり方が良い。

2. 実践の考察

○「思考・判断・表現」の力を伸ばす取り組みによって、基礎的な知識や用語は習得できるか。

当然ではあるが、第1回のテストの、時代の概要を書かせる問題については、平安時代の方がよく書けていた。意外な結果になったのは用語を問う問題である。単語1つあたりにかける時間はおそらく丸暗記の方が長いように感じたため、鎌倉時代の方

が平均点は高いだろうと予測していた。しかし、丸暗記をさせた鎌倉時代よりも、時代の理解をさせ、時代の概略を説明する活動をさせた平安時代の方が平均点は高かった。用語と用語を有機的に結び付けて1つの時代のイメージをつくりあげ、その中で用語を習得していくことは可能であると思われる。

○取り組みをすることで、生徒の苦手意識を変えることができるか。

生徒へのアンケートにおいては、「〇〇を説明しなさい」という問題が苦手だという生徒が31人にものぼり、苦手意識を持っていることが浮き彫りとなった。このことは十分想定をしていたが、その後のアンケートで、「丸暗記」と「説明をする勉強」のどちらも大切と回答していた生徒が多かったことは予想外であった。生徒が必要であると感じながらも、苦手意識を持てしまい、それに対する十分な取り組みができていないことに対して大きく自省を促される結果となった。

しかし、時代概略の説明をしたわずか1時間の授業の中で「〇〇を説明しなさい」という問題に取り組みやすくなったという生徒が20人もいたことも予想外であった。

用語の説明から時代概要の説明へとステップアップしていくことによって、生徒の苦手意識を払拭させることは可能だと思われる。

○「思考・判断・表現」の力を伸ばす取り組みによって得た知識と丸暗記して得た知識のうち、知識が定着するのはどちらか。

第1回の小テストを行った約2カ月後、まったく同じ小テストを抜き打ちで行ったが、平均点は平安時代の方が大きく低くなっていた。一方、鎌倉時代は、あまり平均点が下がることはなかった。これを「丸暗記の効用だ」と安易に決めつけられないが、興味深い結果となった。

また、時代概要を記述させる問題においては、鎌倉時代、平安時代ともにどちらもほとんど書いていなかった。実際、生徒のアンケートでも、「忘れていた」「復習していなかったから書けなかった」という感想が見られた。

どのような勉強方法であっても、また、どのような力を身につけさせるにしても、「確かな学力の定着」には反復して取り組むことも必要であることを再認識した。

今回の結果について、私が2学年を1クラスしか担当していないことから調査のサンプル数が少ないものになってしまったこと、生徒には時代や分野による得意・不得意があること、家庭学習で各個人がどのような取り組みを行ったかということは要素として含んでいないことなどから、データとしてはまだまだ不十分なものである。

しかし、「知識の習得」と「思考力・判断力・表現力の育成」とのバランスが必要であること、そして、それは工夫によって十分に可能であると認識できたことは、今後の授業実践と小中連携にとって、大いに役立つものとなった。

4 研究のまとめ

今回の研究を通して、まず、小・中学校それぞれの学習指導要領、教科書、テストの問題、学習活動等について、実際に交流し、情報・意見の交換をすることで理解が深まり、効果的な連携につながることがわかった。

また、各学校で共通の学習活動については、意見の交流を通して共通理解をすることで、9年間を見通した学習活動への取り組みができることがわかった。

さらに、「まとめの活動」については、その取り組みによって、学習した内容を児童・

生徒が自ら整理し、思考し、表現することで、「言語力」のみならず様々な能力の育成につながると考えられる。

「まとめの活動」は、短時間でもくり返し取り組むことで、基礎学力の向上について成果があらわれると考えられるが、今後もさらに検証が必要である。

5 おわりに

小・中学校で共通の学習活動に取り組むことについては、継続していくことで成果があらわれると考えられるため、さらに取り組みを続けていきたい。

今後、基礎学力の向上を目的とした小・中学校の連携という取り組みをどのように広げられるか、また深められるかが課題である。

社会科の学習では「効果的な資料の提示」が求められる。小学校では大型デジタルテレビ等のＩＣＴ機器を活用した授業も行われている。今後は、デジタルコンテンツの活用も含めた、小・中学校共通の学習活動や教材の工夫など、幅広く視野を広げていく必要があると考える。

- 【参考文献】『平成20年度 尼崎市立小・中学校 学力・生活実態調査報告』
尼崎市 平成20年12月
『平成21年度 尼崎市立小・中学校 学力・生活実態調査報告』
尼崎市 平成21年12月
『平成22年度 尼崎市立小・中学校 学力・生活実態調査報告』
尼崎市 平成22年12月
『小学校学習指導要領解説 社会編』
文部科学省 東洋館出版社 平成20年8月31日
『中学校学習指導要領解説 社会編』
文部科学省 日本文教出版 平成20年9月25日

子どもの学習意欲を高める効果的な評価方法の研究

指導主事	寺 田 忠 司
研 究 員	常 見 雅 代 (名 和 小)
〃	手 嶋 浩 之 (塚 口 小)
〃	中 尾 絵 梨 奈 (武庫の里小)
〃	濱 田 智 子 (大 庄 北 中)
〃	平 井 優 子 (園 田 中)

【内容の要約】

子どもの学習意欲を高めるために、プロジェクト型学習の単元構成及び効果的な評価について研究し、次の2点を重点課題として取り組む。

- 1 評価規準及び評価方法を明確化したプロジェクト型学習の単元を開発する
- 2 授業実践を通してプロジェクト型学習の単元及び評価についての成果を確認する

授業実践を通して、児童生徒の行動観察や振り返りカードの結果から、質問項目について数値による自己評価が授業の回数を重ねるごとに高くなる傾向が見られた。また、プラス評価をさせることに留意して他者評価の場面を設定した結果、大きな充実感を味わったり、自信を持ったりすることができたという意欲的な感想が多数あった。

これらのことから、子どもの学習意欲を高めるためには、プロジェクト型学習の単元を構成し、自己及び他者評価の場面を設定することが有効であると考ええる。

キーワード：学習意欲，プロジェクト型学習，評価規準，自己評価，他者評価

1	はじめに	7 5
2	研究内容	7 5
	(1) 研究テーマ	7 5
	(2) 研究テーマ設定について	7 5
	(3) 重点課題	7 6
	(4) 研究の取組み	7 6
3	実践事例	7 8
	○実践例1 (小学校5年)	7 8
	○実践例2 (小学校6年)	8 2
	○実践例3 (小学校5年)	8 6
	○実践例4 (中学校1年)	8 9
	○実践例5 (中学校3年)	9 1
4	研究のまとめ	9 4
5	おわりに	9 5

1 はじめに

本年度より新学習指導要領全面実施に伴い、尼崎市では、小学校教員の英語運用能力を高めること、児童のコミュニケーション能力の素地を育て中学校の学力向上を図ることを目的として、日本人英語指導補助員（以下補助員）（年間8時間）及び Assistant Language Teacher（以下 ALT）（年間10時間）を配置した。これは、担任をはじめとする教師の実践力を高め、小中連携を視野に入れた取り組みである。小学校において、外国語活動の実践経験が少ない教員が系統的な指導計画や単元構成及び教材開発をすることや、外国語活動を経験した児童が進学する中学校の英語教員が授業内容の充実を図ることは、学習指導要領の目標に迫るためにも重要なこととなる。

昨年度、外国語活動研究部会では「外国語活動におけるコミュニケーションを図る楽しさを味わう授業の研究」－英語ノートを活用したプロジェクト型学習を通して－をテーマに、①英語ノートを活用したコミュニケーション能力の素地を養うためのプロジェクト型学習の単元及び教材の開発、②授業実践に取り組んだ。授業での行動観察や児童の振り返りカード（自己評価及び自由記述）からは、児童に目標を持たせ、主体的に活動を進めさせるには、プロジェクト型の単元を構成することが有効であると考えられるが、習得場面から活用場面での円滑な接続のための具体的な支援を検討することが必要であるという課題もあった。

英語科教育研究部会では、「小中の効果的な連携を図る」－小学校の外国語活動を土台にした中学校の英語科教育の指導の方法－をテーマに、①小学校の外国語活動の内容について知る、②外国語活動で養われたコミュニケーション能力の素地をどのように中学校1年生で伸ばしていけばよいかを探る、③これからの英語教育の充実に向けた小学校と中学校との連携のあり方を探ることに取り組んだ。外国語活動における取り組みの実態を踏まえ、英語科学習の具体的な指導の工夫や留意点をまとめることができた。また、小中連携についても先行研究の内容から実践事例を例示することができた。今後、効果的な取り組みを実践していくことが課題である。

それぞれの成果と課題を踏まえ、本年度より外国語活動研究部会と英語科教育研究部会が合併し、研究を進めることとなった。外国語活動及び英語科の目標を達成するために、これまでの取り組みをさらに深化させ、効果的な指導について授業実践を通して研究を進めることとした。また、指導案検討や授業発表等の機会を共有することで小中連携における成果を期待する。

2 研究内容

(1) 研究テーマ

「子どもの学習意欲を高める効果的な評価方法の研究」

(2) 研究テーマ設定について

中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会において平成22年3月に「児童生徒の学習評価のあり方について」の報告（以下報告）がとりまとめられた。そこでは、児童生徒の「生きる力」の育成をめざし、児童生徒の一人一人の資質や能力をより確かなに

ぐくむようにするため、目標に照らしてその実現状況をみる評価を着実に実施し、児童生徒の一人一人の進歩の状況や教科の目標の実現状況を的確に把握し、学習指導の改善に生かすことが重要であるとともに、学習指導要領に示す内容が確実に身に付いたかどうかの評価を行うことが重要であると述べられている。また、泉(2010)は、評価が変わることにより授業が変わり、それにより児童が変わるといった授業改善の視点を持つことが大切であると述べている。これらのことは、本研究部会の課題である効果的な指導や具体的な支援をより具現化するものであり、これまでの研究をさらに深化させるものである。

そこで、これまでの単元及び教材の研究を踏まえて、評価についての具体的な実践を研究することで児童生徒が意欲的を高め、目的意識を持ちながら授業へ取り組むことができるように研究テーマを「子どもの学習意欲を高める効果的な評価方法の研究」とした。

(3) 重点課題

研究テーマに迫るため、次の事項を重点課題として取り組むこととした。

- ① 評価規準及び評価方法を明確化したプロジェクト型学習の単元を開発する
- ② 授業実践を行う

① 評価規準及び評価方法を明確化したプロジェクト型学習の単元を開発する

昨年度の研究を踏まえ、小学校では、英語ノートを活用したプロジェクト型学習の単元開発及び授業実践等を検討することとした。単元計画に際しては、教師が一方的に教え込むのではなく、児童生徒が課題を意識しながら活動に取り組み、課題を解決するために英語を活用する場面を設定することや、評価(規準)の項目を設け、教師の評価の視点や児童生徒の目標を明確にすることとした。そして、教師や児童生徒の評価を参考に適切な支援を行いながら指導することを念頭に単元及び教材の研究を図った。

② 授業実践を行う

授業形態としては、①担任(担当)単独による授業、②担任(担当)とALTによるTTの授業、③担任(担当)及びJapanese Teacher of English(以下JTE)によるTT、④担任(担当)及び補助員による授業が挙げられる。本年度、補助員やALTの配置により、担任(担当)単独による授業場面が少なくなるため、授業実践では、各校の実態を踏まえた授業形態で授業を展開することとした。複数の指導者で授業を行う場合でも、単元及び本時の目標や評価の視点が明確になっていることで、効果的な指導や具体的な支援を共通理解しやすくなると考えた。

(4) 研究の取り組み

① プロジェクト型学習について

学習指導要領の目標である「コミュニケーション能力の素地及び基礎を養う」ためには、児童生徒が主体的かつ必然的に取り組むことが重要である。東野、高島はプロジェクト型カリキュラムの授業の流れについて図1のように示し、課題解決の過程で、児童たちは必要な活動を選択し決定していくため、必然的に主体的・創造的な学びが児童から生まれてくることになる。また、ゴールに向けての明確な目的意識があるために、活動が主体的・

創造的なものになり、児童の興味は最後まで持続することとなると述べている。また、昨年度の研究のまとめにおいても、プロジェクト型の単元を構成することは、目標を持たせ主体的に活動を進めさせる効果は大きく、有効であることが報告されている。これらのことから、単元構成に際してはプロジェクト型学習の単元を構成し、課題を設定すること、課題を解決するために毎時間の目標を明確に持つこと、英語を活用する場面を設定すること等を設定し、単元を開発することとした。

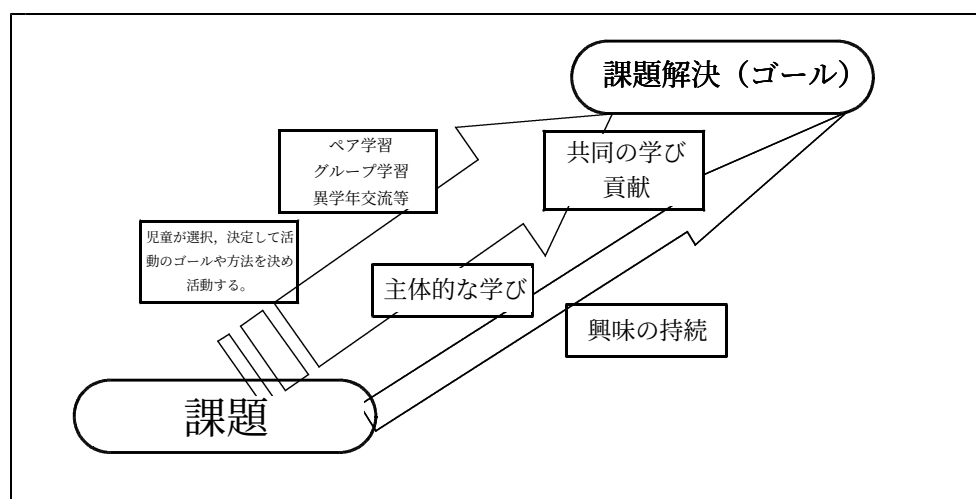


図1 プロジェクト型カリキュラムの授業の流れ

② 効果的な評価方法について

研究部会では、昨年度の取り組みを踏まえ、単に学期末評価のための情報蓄積ではなく、児童生徒の意欲を高め、具体的な支援を行うための評価を目指し研究を進めることとした。

文部科学省(2011)は、外国語活動における学習評価（評価規準の設定における考え方）において、評価規準を設定することで、指導者が授業の中で求める児童の具体的な姿とともに、どう指導すればよいかが明確になる。また、児童に各単元や授業のめあてを提示することで、児童にとって各単元、各授業等でどのような力をつけるのかが明確になり、授業に意欲的に取り組む契機となると述べている。また、評価の観点についても、①コミュニケーションへの関心・意欲・態度、②外国語への慣れ親しみ（外国語表現及び理解の能力）、③言語や文化に関する気づき（言語や文化についての知識・理解）を示している。これらのことは、研究の意図と合致すると考え、評価の観点として活用することとした。

評価方法については、文部科学省(2011)が観察、児童生徒との対話、ノート、ワークシート、学習カード、作品、レポート、ペーパーテスト、質問紙、面接等を例示している。また、児童生徒による自己評価や児童生徒同士の相互評価を工夫することも考えられると述べている。東野・高島(2007)は、相互評価について、活動をよりよいものにしていったり、児童の意欲を高め、興味を持続させる（よかったところを認め合う）という点において評価の中で重要な位置を占め、学習過程で行う形成的評価の役割を果たすと述べている。

また、自己評価についても具体的な方策として視点を与えて、よくできた、できた、もう少しといったような段階で評価するものと記述で評価する方法を例示し、活動後の自己評価は教師にとって授業評価となるが、同時に、児童自身の次の活動への見通しや意欲に

つながり、児童の興味が持続することが、次の単元への興味や内容の構想作りに役立つこととなると述べている。

これらのことから、児童生徒の実態に合わせた評価方法を検討し、本時の目標を明らかにさせること、数値による自己評価をさせること、自由記述を中心とした相互評価を授業場面に取り入れることとした。また、これまでの評価を通観しやすくするために、1単元1枚の振り返りシートを作成することとした。

3 実践事例

○ 実践例 1

名和小学校 指導者 常見 雅代 (JTE)・西川 ひとみ (担任)・葛生 佳子 (補助員)

対 象 第5学年3組児童37名

1. 単元名「5年3組 ファッションショー 2011」

(英語ノート① Lesson5「いろいろな衣装を知ろう」)

2. 単元目標

- 気持ちよく買い物ができるように積極的に英語で話そうとする【コミュニケーションに対する関心・意欲・態度】
- 買い物に必要な表現に慣れ親しもうとする【外国語への慣れ親しみ】
- 様々な国の民族衣装を知り、世界の多様な文化への関心を高めようとする【言語や文化に関する気づき】

3. 単元について

世界の国々には、それぞれの文化を背景とした多様な衣装があることを知り、実物に触れるという体験によって、児童に鮮烈な気づきを促し、異文化への関心を高める効果があると考え、8カ国分の衣装(兵庫県立芦屋国際高校内「子ども多文化共生センター」より貸与)を用意した。これは、異文化理解の要素であるが、身近な衣服の英語表現を学ぶことでコミュニケーションの要素へつなげていきたい。

児童には、デザイナーとして売れると思う衣服をデザインさせ、スタイリストとしての視点でモデルに似合うと思う衣服を買ってくる場面を設定した。買い物という活動は、児童にとって英語を活用する必然性を生み、自発的な学びを促進できると考える。慣れ親しむ活動では、教え合う活動を取り入れ、楽しみながら協力し合うことにより、自信をつけ、積極的に参加しようとする態度を育みたい。

そして、店員役とお客役の両方を演じ、これまでに学んだ英語表現を使って「ファッションショーをする」というゴールに向け、必要な表現や態度を段階的に学んでいくのだという意識付けをした上で、毎時の学習に取り組ませたい。

各授業の最後には、振り返りカード(JUST DO IT!)を記入させることで、自己評価や他者評価の内容を知り、今後の活動の支援に役立てたい。

4. 単元計画(全4時間)

	主な活動及び扱う表現・語彙	評 価
1	・様々な国の衣装(実物)を見て、それらの名前を知る。	

	・ いろいろな衣服の英語表現を知る。 kimono, Chinese dress, Ch'ima chogori, pants, skirt, socks, T-shirt, sweater, cap, shoes, shorts, ・ 色 (8 色) の英語表現を知る。 blue red orange black yellow green pink white Do you like (色の名前)? Yes, I do. / No, I don't. I like(色の名前), I don't like(). ・ 自分がデザイナーとなり, 売れると思う衣服を画用紙で作る。	・ 様々な国の民族衣装を知り, 世界の多様な文化への関心を高めようとする。【気】(行動観察・振り返りカード) 
2	・ 衣服と色の英語表現を練習する。 ・ 前時で作った衣服をペアで紹介し合う。 ・ CD を聞き、女の子が買ったものは何かを理解する。 ・ 買い物をする時の表現を練習する。 Hello. May I help you? Do you have (欲しい衣服)? I like (色の名前・物の名前). I don't like (色の名前・物の名前). Yes, I do. / No, I don't. (I'm sorry.) I have (物の名前). / (I don't have (物の名前)). Here you are. Thank you. Good bye. Bye.	・ 買い物に必要な表現に慣れ親しもうとする。 【慣】(行動観察・振り返りカード)  (本時の様子)
3 本 時	・ 衣服と色の英語表現を復習する。 ・ 買い物の場面で必要な英語表現を復習する。 ・ お互いに気持ちの良い態度がどんなものかに気づく。 ・ 買い物をする。(1 チーム 1 コーディネートを完成させる) ・ 各チームでコーディネートした衣服を黒板に掲示する。	・ 買い物に必要な表現に慣れ親しもうとする。 【慣】(行動観察・振り返りカード) ・ 気持ちよく買い物ができるよう、積極的に英語で話そうとする。【コ】(行動観察・振り返りカード)
4	・ 各チームでコーディネートした衣服にネーミングし紹介する。 My name is (自分の名前). I(We) have (物の名前), (物の名前), and (物の名前). ・ 見ている児童は、友達の発表を評価する。 ・ ベストコーディネート賞を選ぶ。	・ ファッションショーの紹介に必要な表現に慣れ親しもうとする。【慣】(行動観察・振り返りカード) ・ 積極的に友達の発表を聞こうとする。【コ】

5. 本時の学習

- (1) 目 標 好みをきちんと言ったり, 相手が気持ちよく買い物ができるような声掛けをして, 買い物をする。
- (2) 準備物 児童が画用紙で作成した衣服, 絵カード, CD, パワーポイント画像

(3) 本時の展開

	児童の活動	T1の支援	T2(担任)の支援	T3(補助員)の支援	評価
挨拶 3分	挨拶をする。 三人と挨拶をする。 Hello.How are you? I'm fine(happy/hungry/sleepy)	挨拶しながら、好ましい挨拶の姿勢を見せる。	全体に挨拶をする。 講師(T1, 補助員)を紹介する。 各児童が3人に挨拶したら座るように指示する。	挨拶に参加しながら、好ましい挨拶の姿勢を見せる。	
復習 10分	Head Shoulders Knees and Toes の替歌を歌う。(色の復習) デモンストレーションを見る。 買い物に必要な表現を復唱する。	楽しみながら復習できるようにする。 場面をイメージしやすいように説明する。 声を出しやすくする。	児童とともに歌いながら参加していない児童や声の小さい児童に声掛けをする。 デモンストレーションを行う。 買い物に使う表現を良い例で示す。 「気持ちよく買い物できるような態度」の指標(自然な笑顔, 適度な声の大きさ, アイコンタクト)を示す。	手本として替歌を歌う。 買い物に必要な英語表現を話そうとしている。 【慣】	
展開 27分	各(6)チーム内で客役、店員役を交代で行う。 店員役: 1チームが1専門店で担当する。(帽子, Tシャツ, ズボン, スカート, 靴下, 靴) 客役: スタイリストの視点で買い物をする。 前後半ともにモデルの衣服を一式購入する。 チーム内で話し合い、モデルの衣服を決定する。衣服を、黒板に掲示する。	ルール説明を行い、開始, 交代, 終了等を分かりやすく伝える。 	T1が説明中に用具の準備を行う。 参加しにくい児童や声の小さい児童などに、声を掛け、積極的な参加を促す。 英語を使つての買い物ができるように助言する。 「気持ちの良い態度」の指標を意識させる。 	積極的に英語を話しながら買い物しようとしている。【コ】 買い物を楽しんでいる。【コ】	
振り返り 挨拶	自己評価シートを記入する。 記入内容を発表する。	ポイント数を含めて記入するよう促す。 児童の取り組みについて良かった所を具体的にほめる。 次時は、買った物を皆			

挨拶		に紹介し、相互評価する		
5		ることを伝える。		
分	挨拶をする。	全員に挨拶する。		

6. 実践を振り返って（成果○と課題●）

（1）単元について

- 5年生全クラスが同一の単元計画で取り組んだことにより、改善案や支援の具体的な手だてを多角的に検討することができた。
- 児童らは、様々な国の民族衣装を実際に見て触れるという体験をした。その結果、使用されている素材、着用される場、形や色彩などの様々な視点から、異文化や洋服への興味・関心を高めることができた。また、言語や文化に関する気づきを促すこともできた。
- 単元計画作成段階から、児童が制作する衣服は、学年3クラス分を共有で使用し、種類と数を確保することにした。1クラス単独で制作する場合には、時数を増やす必要があると考えられる。

（2）本時について

- 「3人と挨拶したら座ろう」という取り組みは、全児童が英語を話す機会を得ることができる。また、毎時間行うことにより、英語を話すことへの負担を軽減し、各時間における良いウォーミング・アップとなった。また、本時においても、極めてスムーズにほぼ全員が笑顔で挨拶する様子が見られた。
- "Head Shoulders Knees and Toes"を先行の単元で学習し、そのメロディーに馴染んでいたため、歌詞を色に置きかえた。児童は、替歌そのものを好きなこともあり、大変、意欲的に歌う姿が見られた。
- 第一時より、伏線を敷いてきたファッションショーのモデルが本時で明かされるという期待感は、授業開始時点で最高潮に達していた。有名人5人と担任の計6人をモデルにしたこと、また、6人を一気に見せるのではなく、一人ずつ明らかにしていったことで、期待感が高まり続けた。これらのことは、次の活動である「モデルに似合う洋服を買いつける」という活動の意欲づけともなった。
- これまでの積み重ねから、予想以上に色の表現には慣れ親しんでいた。そのため、替え歌のテンポをもっと速くしたり、色の順序を変えて行うこともできたと考えられる。

（3）評価について

- 授業中には「ほめてやる気にさせる」ことを基本スタンスとして共有することができた。また、複雑な英語が飛び交い、児童が困惑することがないように、英語表現は`Short Simple Same'を心掛けた。このことにより、授業に一つの自然な流れが生まれ、児童の活動が自発的になったと思われる。
- 振り返りカード（JUST DO IT!）の記入を継続して行うことにより、記述内容に変化が見られた。最初は「面白かった」、「ゲームに勝って良かった」というものも少なからず見られたが、回を重ねるうちに「いらっしやいませ」という場面では、英語で

は"May I help you ?"（カタカナで表記していた）というのかと思った」,「習った表現を自分で使えてうれしかった」という記述が多く見られるようになってきた。このことから、言語や文化に関する気づきや英語へ慣れ親しんでいる様子が分かる。

- 児童の実態について、行動観察だけでなく振り返りカードを活用することで、表情や行動に反映されない部分を把握することができるようになった。また、「次は相手の目を見て話せるようにしたい」、「相手に聞こえる声で話すようにしたい」、「もっと色々な表現を知りたいと思います」等の目標を書く児童が増えてきたことから、児童が見通しを持ち、やる気を引き出すことにつながったと考えられる。
- 振り返りカードへの記入方法について、自己評価の視点を明確に伝えることにより、さらに効果的な自己評価として活用できると考えられる。

○ 実践例 2

武庫の里小学校 指導者 中尾 絵梨奈 対 象 第6学年2組児童34名

1. 単元名 「行ってみたい国を紹介しよう」(英語ノート 2 Lesson6)

2. 単元目標

- 世界にはいろいろな英語が話されていることに興味をもつ。【言語や文化に関する気づき】
- 自分の思いがはっきり伝わるようにスピーチの工夫をしたり、積極的に友達のスピーチを聞いてアドバイスしたりしようとする。【外国語への慣れ親しみ】【コミュニケーションに対する関心・意欲・態度】
- 自分が行ってみたい国を、理由を含めて紹介したり、友達のスピーチを聞いたりしようとする。【コミュニケーションに対する関心・意欲・態度】

3. 単元について

本単元では、理由を含めて自分が行ってみたい国についてスピーチすることを目標としている。まず、いろいろな国で英語が話されていることを知ることで、英語を使えば多くの国の人々とコミュニケーションをとることができるということを理解させたい。そして、自分が行ってみたい国やその国で食べたいもの、見てみたいものを選んでいくことで世界の文化に触れ、様々な国に対する興味や関心を深めていくことができると考える。最後に行ってみたい国について「I want to～」の形を使った簡単なスピーチを発表する場を設定し、友達が行ってみたい国を聞いたり、自分の選んだ国について聞いてもらったりすることで、意欲がより高まり、コミュニケーションの楽しさを感じられることが期待できる。

スピーチに向けては、まず、小グループ内でリハーサルの時間を設定し、練習したりアドバイスをし合ったりして自信を持ってスピーチに臨めるようにする。また、毎時間の目標を設定し、自分ができたことやもっとがんばりたいことを考えることで、向上心や意欲を高められるようにしたい。

4. 単元計画（全4時間）

	学習内容及び主な表現・語彙	評価規準
1	いろんな国の自己紹介を聞こう	

	○英語は世界の様々な国で使われていることを知る。 ○様々な国名や国旗に親しむ。 ○スピーチの方法を知る。 ・ Let's Chant ♪ I want to go to Italy ♪ What country is this? I want to go to Italy. Brazil / Australia / Korea / China / America I want to eat pizza.	・ 世界には様々な英語があることを知る。【気】  (本時の様子)
2	行ってみたい国についてまとめよう ○行ってみたい国やその理由について話を聞く。 ○発表資料を作成する。 ・ Let's Chant ♪ I want to go to Italy ♪ I want to go to ~. I like ~. I want to see ~.	・ 行ってみたい国やその理由について話を聞いて、その概要を分かろうとする。【慣】 
3	リハーサルをしよう ○行ってみたい国を尋ねたり、尋ねられて答えたりしようとする。 I want to go to ~. I want to eat ~. I want to play ~. I want to see ~. ○スピーチのリハーサルを行い、グループでアドバイスをし合う。 ・ Let's Chant ♪ I want to go to Italy ♪	・ 自分の行ってみたい国について理由とともに伝えようとする。【慣】 ・ 友達のスピーチを聞いてアドバイスしようとする。【コ】
4 本 時	行ってみたい国を紹介しよう ○行ってみたい国を、理由を含めてスピーチしたり、友達が行ってみたい国やその理由を理解したりしようとする。 ・ Let's Chant ♪ I want to go to Italy ♪ ・ Activity Show and Tell Where do you want to go? I want to ~. I like ~.	・ 自分の行ってみたい国について理由とともに発表しようとする。【コ】 ・ スピーチを聞いて、その概要を分かろうとする。【コ】

5. 本時の学習

- (1) 目 標 行ってみたい国を理由も含めてはっきりと発表したり、友達の行ってみたい国について理解しようとしたりする。
- (2) 準備物 自己評価シート, 世界地図, 各自資料

(3) 本時の展開

学習活動	指導の留意点	評 価
1 挨拶をする。 Hello. Good afternoon. How are you? I'm ~ 2 前時の復習をする。 ・ Let's Chant 3 本時の学習のめあてを確認する。	・ 全体と挨拶した後、数名の児童と挨拶をする。また、友達と挨拶を交わさせ、授業の始まりを意識させる。 ・ 必要な表現を思い出させ、確認させるようにする。	
行ってみたい国を紹介しよう		
・ 自己評価シートに目標を書く。 ・ スピーチの練習をする。 4 Activity Show and Tell Where do you want to go? I want to ~. I like ~.	・ デモンストレーションを見せて、スピーチの仕方を理解させるようにする。 ・ 個別に聞いて声掛けをして回り、自信をもって臨めるようにする。 ・ 行ってみたい国の理由や資料を提示することで、自分の意見が理解されやすいことに気づかせる。 ・ 問いかけに答える形をとることで、コミュニケーションの楽しさを感じさせる。 ・ 聞く児童には、友達のスピーチについて良かったところ等をメモするように助言する。 ・ 友達のスピーチについても書くように助言する。 ・ よかったところ、がんばったところを取り上げ、意欲を高めるようにする。	・ 自分の行ってみたい国について伝えようとする。【コ】 (発表観察) ・ 友達の行ってみたい国や理由について理解しようとする。【コ】(評価シート点検)
5 本時の振り返りをする。 ・ 自己評価シートを書く。		
6 挨拶をする。 That's all for today. Good-bye. See you.		

6. 実践を振り返って（成果○と課題●）

(1) 単元について

- 単元の最初に、最終的にスピーチをするという目標を伝えることで、自分の目標をもって熱心に取り組む児童が多く見られた。
- 自分で行ってみたい国を選び、その国について本やネットを使って調べていくことで、いろいろな国の文化にも興味をもち、発表に向けて楽しく活動できていた。
- 初めはなかなか声が出なかったり、分からないと言っていたりする児童が多かったが、チャンツをくり返し取り組むことで、I want to go to Italy.などのフレーズは自信を持って発声できる児童が増えた。また、休み時間にもチャンツの内容を口ずさむ児童が見られるようになった。

- 小グループでスピーチの練習を行い、友達に良いところを評価してもらえたことで、全体の発表に期待を持って臨むことができていた。また、友達の良いところに気づき、自分も取り入れてみようとする前向きな姿勢も見られた。
- 毎時間、自分の目標を立てることで、その時間に自分がやりたいことが明確になり、積極的に活動することができていた。また、目標が達成できると、次はこれがんばりたいと次時への意欲が高まっていた。
- 自分で目標を立てさせることで、その後の自己評価が反省的な内容になりがちであった。また、本時のスピーチでは「発表なので緊張して思うようにできなかった」という児童の自己評価が前時より下がることがあった。
- 振り返りカードにある自己評価（5項目）について、文字だけでなく関連した挿絵等を取り入れることで児童が内容を意識しやすくなり、見やすくなると考えられる。

(2) 本時について

- 授業の流れを示したことで、それぞれの児童が何をがんばりたいか、明確にすることができた。また、自分の立てた目標に向けて前向きに取り組むことができた児童が多かった。

(3) 評価について

- 自己評価をつけることで、達成度を自分で確認することができ、喜んだり次にまたがんばりたいという気持ちになったりする児童が多く見られた。
- 前時までの評価や、友達のリハーサルでのスピーチを見て良かったところから、今日のスピーチではこれをがんばりたい、という明確な自己目標をもつことができ、それに向かって意欲的にがんばろうとする様子が見られた。
- 他者評価をしながら友達の発表を聞くことで、友達のがんばっているところや良いと思うところ、アドバイスしてあげられるところを見つけようと、意欲的に聞こうとする姿が見られた。
- 他者評価は、より近いフィードバックの場として付箋などに評価を書き、発表後すぐに友達に渡すという方法でもよかった。
- 第3時の少人数での練習で自己評価が上がった児童が多く、第4時への期待が高まったため目標を高く設定した児童が多かった。そのため、緊張してうまく発表できなかったことが自己評価の低下につながってしまったと考えられる。スピーチ後すぐに友達からのフィードバックがあれば、もっと高い評価になったかもしれない。他者評価をもっと生かすことが必要であった。
- 自己評価の「動き」の項目が理解しにくかったので、ジェスチャーができた児童を紹介し、具体的な姿を見せることで具体的な姿について視点を持たせることができると考える。

○ 実践例 3

塚口小学校 指導者 手嶋 浩之 対 象 第5学年1組児童32名

1. 単元名 「クイズ大会をしよう」(英語ノート1 Lesson 7)

2. 単元目標

- 英語表現に興味を持ち、積極的にクイズ大会に参加しようとする。【コミュニケーションへの関心・意欲・態度】
- クイズを通して音声やリズムに慣れ親しみ、積極的に質問したり答えたりする。【外国語への慣れ親しみ】
- 英語と日本語との違いを通して、言葉の成り立ちを知る。【言語や文化に関する気づき】

3. 単元について

指導に当たって、本研究テーマに基づき、児童の実態に即した学習意欲を高めることのできる授業内容を目指す。具体的には、①仲間と協力した活動、②楽しみながら会話できるための支援、③自信を持って取り組める活動の3つである。

外国語活動において、グループで行う創作活動は今回が初めてである。これまでは教師主導の活動場面が多かったが、グループで協力し合い、出題内容を考えたり役割分担を決めたりしながらクイズの内容を作り上げていくことで、積極的に取り組み自信を持って発話することができると思う。ここでは、「みんなが楽しめるクイズ大会」というゴールに向けて明確な目的意識が生まれ、活動が主体的なものになることで、児童が楽しみながら継続して活動できると考える。そして課題解決の過程において、クイズ作りを通して、共同の学びも経験することになる。このように、課題を解決するため主体的、創造的な学びが生まれ、単元のゴールに向けて明確な目的意識が持続する授業を体系的に構成し、進めていく。

また自信を持って取り組ませる手立てとして、一人ひとりの状況を把握し、具体的な目標意識を持たせるための目標設定カードを開発した。毎時間自己評価及び他己評価を記入させることにより、児童自身の次の活動の見通しや意欲につなげたり、自信をつけさせたりする一助としたい。

4. 単元計画 (全4時間)

	目標・主な活動	評 価			
		コ	慣	気	規 準 方 法
1	色々なクイズを楽しもう！ 英語と日本語との違いを通して、言葉の成り立ちの面白さに気づく。 Activity 1 (水族館クイズ) 【英ノ】 Activity 2 (漢字クイズ) 【英ノ】 Activity 3 (シルエットクイズ) 【英ノ】			○	・英語と日本語の違いを通して、漢字の成り立ちの面白さに気づく。【気】 ・英語にも単語が組み合わさってできている言葉があることに気づき、言葉の多様性を感じる。【気】 行動観察 目標カード 行動観察 目標カード
2	グループでクイズを考えよう！		○	○	・積極的に What ' s this? と尋ねよう 行動観察

	“What's this?”を使って友だちと会話を楽しみながら、クイズを作る。 Activity 1 (ピクチャークイズ) Activity 2 (スリーヒントクイズ) Activity 3 (クイズ作り)			とする。【慣】 ・クイズ作りを通して、言葉の面白さに気づく。【気】	発表観察 目標カード 行動観察 目標カード
3	クイズ大会に向けて中間発表をしよう！ “What's this?”を使ったクイズを通して、友だちと会話を楽しむ。 Activity 1 (ピクチャークイズ) Activity 2 (中間発表)	○	○	・発音やリズムに気をつけるなど、練習を通して英語表現を楽しむ。【慣】 ・友だちのアドバイスを聞いて、発話方法を改善しようとする。【コ】	発表観察 目標カード 行動観察 目標カード
4	クイズ大会をしよう！ グループで考えたオリジナルクイズを通して、友だちと会話を楽しむ。 Activity (クイズ大会)	○		・クイズ大会を通して、助け合いや学び合い等、コミュニケーションを図る楽しさを体験する。【コ】 ・選んだクイズに答えたり質問したりする。【コ】	行動観察 目標カード 行動観察 発表観察 目標カード

5. 本時の学習

(1) 目 標

- 発音やリズムに気をつけるなど、練習を通して英語表現を楽しむ。
- 友だちのアドバイスを聞いて、発話方法を改善しようとする。

(2) 準備物 テレビ、コンピュータ、問題カード、解答シート、目標設定カード

(3) 本時の展開

過程	児 童 の 活 動	指導上の留意点(◎)と評価(◆)
Greeting	1. 挨拶をする。 T: Hello. How are you? C: I'm fine/happy/hungry/sleepy.	◎自分の状況にあった英語で挨拶をさせる。
Warm-up	2. チャンツを行う。 What's this? What's this? It's a book. It's book. It's a book.	◎言いにくそうな部分では教師が大きな声で発音する。
Activity	クイズ大会に向けて中間発表をしよう！ 3. クイズをする。★ Activity 1 (ピクチャークイズ) ・シルエットを見て、それが何かを答える。 T: What's this? Hint 1. (What number?) C: It's lemon. (Three please.) T: What's this? C: It's a banana. T: That's right. 	◎画面に絵を映し、それが何かを尋ねる。 ◎前時を想起させ、使用表現の確認を行う。 ◆発音やリズムに気をつけて表現を楽しもうとしている。(発表観察)

	4. グループで役割分担し、中間発表をする。 ★ Activity 2-1 (中間発表) シルエットクイズ、ピクチャークイズ、スリーヒントクイズ 5. よかった点、直した方がよい点を話し合う。 6. 役割を交代し、もう一度中間発表をする。 ★ Activity 2-2 (中間発表)	◎各グループを巡り、スムーズにいていないところには、一緒にクイズを出すなどの支援をする。 ◎今までの学習内容を喚起しながら、より児童に "What's this?" を使う場面を理解させる。 ◆ "What's this?" という表現を使い、相手に質問する。(行動観察)
Closing	7. 目標カードに記入し、振り返る。 8. 挨拶をする。 T: That's all for today. See you. C: See you.	◎友だちの態度や会話についてよかったところを具体的に書かせる。 

6. 実践を振り返って（成果○と課題●）

(1) 単元について

- クイズ作りでは、出題テーマを絞ったことで、どの児童でも比較的答えやすい問題を作ることができ、クラス全体の関心を高める結果となった。
- クイズ大会では、2～3人という少人数グループによる活動を行うことで、お互いに遠慮することのない主体的に取り組みやすい環境を作ることができ、他グループの出題に対して積極的に答える姿が多く見られた。
- 児童の発達段階と意欲を考慮してクイズ形式を3種類にしたが、それぞれの形式で使う英語表現にズレがあり、練習場面で混乱が生じた。クイズの形を1つにして使用表現を限定すれば、児童が発話しやすくなり、会話練習を楽しむことができると考える。

(2) 授業について

- 児童の実態に即した学習意欲を高めることのできる具体的な授業内容として、①仲間と協力した活動、②楽しみながら会話できるための支援、③自信を持って取り組める活動を目指して展開していった。
- 発話方法やクイズの出し方について教え合うなど、友だちと協力している姿がおおむね見られた。発話に関しても、役割分担させたことで個々の会話量に差が生まれなかった。
 - チャンツなどの表現練習では、英語ノートに準拠した語彙と共に、教師が選んだ語彙も発展的に練習させたことで、児童が意欲的に取り組むことができた。
 - 振り返りカードを活用して自分の目標を立てさせたことで、個人のレベルにあったゴールに向けて具体的に取り組むことができていた。
 - 外国語の発話練習よりもクイズ大会自体を楽しむことを優先して児童が活動していつてしまった。前面掲示のフラッシュカードが単に表現を飾ったものであったため、児童が少し混乱してしまった。会話の流れが目で見えて理解できるものに工夫していれば、会話量がさらに増えた活動になると考えられる。

(3) 評価について

- 学習の最後に振り返りカードを記入させ、4段階評価による自己達成度と、4択での質問（進んで授業に参加した・英語を使って会話を楽しめた・友だちと協力した）及び自由記述欄を設けた自己評価を行わせた。なお第1時に関しては、単元全体では導入部分に当たり【言語や文化に関する気づき】が評価項目として主に位置づけられている。本単元での英語表現を使用した評価が当てはまる第2時からの評価の変容を見ていくと、どの項目でも「できた」と捉える積極的評価をした児童が増えていた。これは、振り返りカードを毎時間記入することで、授業の流れと活動の中で目標とすべきことが確認できていることが要因の一つと考えられる。
- 「進んで授業に参加した」の項目について、「残念」の評価をした児童の割合が、前時に比べて増えている。行動観察からは、確かに友だち任せにしまい、進んで活動に参加できていない児童が見られた。この児童は、振り返りカードに設定した目標が適当でなく、目標を達成するために行うべきことが不明確になってしまったと考えられる。（振り返りカードから児童の実態を把握するための指標となったことは、成果であった）
- 自由記述からは、本時の評価として、友だちのことを記述しているいわゆる他己評価が多数あった。グループでのクイズ作りを通して、友だちのアドバイスを参考に内容を改善したり、リハーサルを行ったりしていた。このことから、一つの目標に向けて友だちからの評価を受けた意欲づけが子ども間で行われており、こうしたプロジェクト型学習の活動が児童に自信をつけさせる一助となるといえる。

○ 実践例 4

園田中学校 授業者 平井 優子・Gerrard Mahoney

対 象 第1学年6組生徒36名

1. 単元名 「電話で話すとき」(NEW CROWN 1 DO IT TALK6)
2. 単元について

電話は日常生活に欠かせないものである。特に昨今では、生徒が欲しいものとして携帯電話がまずあがるなど、電話が生徒にとってより興味深いものになっている。生徒同士の電話で連絡を取り合う実態が増えているため、本教材は生徒にとって親しみやすいものと考えられる。しかし、Hello という単語は既習しているが、「もしもし」という使い方は生徒にとって初めての表現であり、電話ではこのような独特の表現が多用される。

これらの電話特有の基本的な表現を定着させるために、実際に会話する場面を設定し、自分たちが発表する場面を目標にしながら学習させたい。会話文の暗記については、練習時間を確保し、パターンプラクティスによって十分に準備させた上で臨ませたい。英語の苦手な生徒であっても、最低限の電話の定型表現は使えるように、生徒同士でアドバイスし合ったり、ALTの個別指導を行うなどの支援をしたい。

発表の場面では、実際の場面を想定しやすいように、生徒を背中合わせにして顔を見えないようにし、音声のみを頼りに会話表現させたい。また、他者評価では、各項目の評価基準を生徒に共有化させるため、ALTと教師によるデモンストレーションを示すことで

より効果的に理解させたい。表現方法を工夫したり改善点を認め合ったりすることで、更なる生徒の意欲を引き出し、コミュニケーション能力の向上を図りたい。

4. 単元計画（全2時間）

第1時 電話表現の学習，英文理解，ペア練習（暗記）【知識・理解】

第2時 ペア練習，グループ内発表（1回目），相互評価，グループ内発表（2回目），

（本時） まとめ【意欲・関心・態度】【思考・判断・表現】

5. 本時の学習

(1) 目 標 相互評価を通して生徒の意欲を喚起し，電話特有の英語表現を適切に使い、相手に伝えることができる。

(2) 準備物 評価シート，電話イラスト，ベル

(3) 本時の展開

時間	生徒の学習活動	指導上の留意点(○)と評価(●) (方法)
3	英語で挨拶する。	○気持ちの良い挨拶となるよう促す。
10	電話での表現を思い返し，教師の後に続けて読む。  パートナーと練習する。	○単調にならないように，また，前回暗記したものを定着させるために，コーラスリーディングだけでなく，read & look up，役割分担，暗記等のパターンを用いて音読練習させる。 ○ALT は机間指導し，支援を必要とする生徒に手伝う。
5	評価シートをうけとり教師の説明を聞く。	○3人組には1人分だけ2枚渡す。 ○ALT と担任で模範演習を見せながら，評価すべきポイントを押さえていく。
6	2ペアが集まって4人グループを作り，互いに発表し，聞いているペアは評価を行う。	○席の前後でペアを作り，横のペアとの4人グループを作らせる。 ●電話特有の英語表現を適切に使う事ができる(行動観察)
3	グループの中で評価を伝えアドバイスを交流する。	○支援が必要なペアにつく。(ALT) ○相手に対して，プラス評価をするように助言する。 ●発表者の表現に対し，評価することができる。
6	1度目の評価とアドバイスをもとに，もう1度発表し，聞いているペアは評価を行う。	○机間指導し，支援が必要なペアにつく。(担任・ALT)
10	評価を活用して2回発表したことを踏まえ，各自評価シートに感想を書く。	
5	評価シートを集めて，教師の講評を聞く。	○成果が上がっている生徒や相手の良い変化について記入できたことを紹介する。
2	英語で挨拶する。	

6. 実践を振り返って（成果○と課題●）

（1）単元について

- ペア活動にすることで、学習の苦手な生徒でも、相手の生徒に教わりながら課題を達成しようと努力している姿が見られた。
- 発表の場面では、電話のイラストを全員に持たせ背中合わせにしたことで、状況がより現実的なものとなり、臨場感をもって取り組ませることができた。
- 発表者と評価者をグループにし、全員が誰かに評価されていることを意識させることで、やらざるを得ない状態を作ることができた。また、発表と評価を2回取り組ませたことで、1回目よりもうまくやろうと、生徒たちに意欲的な態度が見られた。
- 会話文について、定型のものだけでなく生徒たちが自分たちで場面設定を作っていく要素を取り入れていくことで、より豊かな自己表現ができると思われる。

（2）評価について

- 他者評価について、プラス評価をさせることで2回目は高評価が多数あり、生徒にとって英語で表現する自信につながった。
- 評価基準を明確にするため、担任とALTで模範例と逆の例とを予め示した結果、生徒たちとの間で基準が共有され、評価に統一性をもたせることに効果があったと思われる。
- 生徒のがんばったという自己評価を全体に紹介することで、具体的な姿を周知し、今後の意欲につなげることができたと思われる。また、評価者に対しても、自分の評価が相手の意欲向上に作用し、より良い成果を生み出したことに気づかせることができたと思われる。
- 全体場で高評価であった生徒たちの発表をさせることで、次の目標を具体的に持たせることができるようになると思われる。
- 評価が上がらなかったペアについては、評価シートのコメントから、苦手なりにも努力して、自分なりの達成感や、努力の過程を確認することができた。評価者にほめられた（2回目の評価）ことも自信につながったと考えられる。
- 学力の差はあるものの、アドバイスするという観点ではその差は何も感じられなかった。学力が高い生徒も、英語が苦手な生徒にアドバイスを通してさらに力を伸ばすことができていた。自分のアドバイスが相手の成績向上に役立っているということは、学力が高い生徒以上に、学習の苦手な生徒にとって大きな自信につながるとと思われる。

○ 実践例5

大庄北中学校 授業者 濱田 智子・陶山 智子

対 象 第3学年4組生徒33名

1. 単元名 「ビデオを見ようー提案するとき・誘うときー」(New Crown DO IT TALK 4)

2. 単元目標

- 英語で提案をしたり、何かに誘ったりすることができるようにする。
- 誘われたときに適切な応答ができるようにする。

3. 単元について

本単元では Why don't we ～?などの表現を使って他の人を何かに誘ったり、How about ～?と提案したりする表現が多く扱われている。生徒の会話では日常的に交わされる身近な表現なので、自分たちが作り上げた内容を英語で発表する場面を設け、単なる暗記の発表ではなく、その状況にいるものとして自己表現させたい。

これまでの学習では、人前で発表する機会が少なかったので、今回の発表が恥ずかしいと思う生徒が多いと思われる。そのため、ペアでの発表という形をとり、自分たちで会話を組み立てていく中で定着を図りたい。

4. 単元計画（全6時間）（ペア発表については、次の単元と平行して実施する）

- 第1時 教科書の内容・表現の学習、理解、発音練習
- 第2時 暗唱確認 ペア発表の内容確認
- 第3時 ペア発表（1回目）
- 第4時 ペア発表（1回目と2回目）
- 第5時 ペア発表（1回目と2回目）（本時）
- 第6時 ペア発表（1回目と2回目）

5. 本時の学習

(1) 目 標

○各観点に基づいて、より良い発表をすることができる【意欲・関心・態度】【思考・判断・表現】

○友達の暗唱について評価することができる【思考・判断・表現】

(2) 準備物 評価用紙

(3) 本時の展開

生徒の学習活動	指導上の留意点（○）と評価（●）
1 英語で挨拶する。	○気持ちよく挨拶する。いくつか質問をする。
2 宿題を見せ、答え合わせを丁寧にする。	○宿題の解説を丁寧にする。（教師1） ・長文の解説なので、文を音読してリスニングの練習になるようにも配慮する。
3 教師の英語を聞きながら英文を読む。	・長文解説の途中に内容についての質問をする。
4 教師の質問に答える。	○机間指導をして支援が必要な生徒に助言する。（教師2）
ペア発表（2回目）	
5 2回目の発表をする。	○発表について具体的に確認する。 ・発表の態度、協力すること ・声の大きさ ・相手の目を見て話すこと ・自然な身振りなどをする ・はっきりと話すこと ●内容を工夫し、協力し合いながら真剣に発表することができる。





- ・残りの生徒は評価する。
- ・発表した生徒は自己評価票に記入する。

6 講評を聞く。

7 英語で挨拶する

【意欲・関心・態度】

- 会話文を暗記し、聞き取りやすい発表をすることができる。

【思考・判断・表現】

- 忘れてしまった生徒にアドバイスする。(教師2)

- 聞き取りにくいなどの問題があるときには助言する。

- 友達の暗唱について評価することができる。【思考・判断・表現】

- 気持ちよく挨拶する。

6. 実践を振り返って（成果○と課題●）

(1) 単元について

- 定型文の暗唱ではなく、日常的に交わされる会話を自分たちで組み立てることで、楽しみながら文型の定着を図ることができた。
- 友達の発表を何度も聞くことで、自然に文型を身に付けることができた。
- 全員に発表を課すことで、生徒に自己表現の場を設けることができた。
- 文型の定着という点では今回の形式で達成できたように思われるが、臨機応変に返事等をするようにできるように応用の練習をする時間を設定したい。

(2) 本時について

- 発表の前に台本を教師がチェックし、間違った表現は指導したことで、生徒は自信を持って発表に臨むことができた。
- 1回目と2回目の発表の間に時間が少しあいたので、1回目の発表を覚えていないケースもあった。1回目の発表をビデオに撮っておき2回目の発表の前に見せる等の工夫が考えられる。

(3) 評価について

- 1回目の発表を友達に評価してもらい、その上で2回目の発表に臨むという形式をとったので、友達の励ましが喜びや刺激になっていた。2回目の発表までに友達の助言を取り入れながら、会話を組み立て直したり、身振りの工夫や小道具の用意などに意欲的に取り組む姿が多く見られた。
- 発表の前に評価項目を詳しく知らせたことで、生徒が具体的な視点を持って練習し、発表することができた。
- 全員発表であったので時間がかかった。必要に応じて、クラスを二つに分けて発表したり、発表形式を変えたりする工夫が必要である。

4 研究のまとめ

研究テーマ「子どもの学習意欲を高める効果的な評価方法の研究」に迫るため、評価規準及び評価方法を明確化したプロジェクト型学習の単元を開発し、授業実践を通して子どもの意欲を高める評価方法の研究をしてきた。

単元のゴールを示し、毎時間の目標を持たせ、自己評価及び他者評価を記録させた。その結果、小学校5年生から中学校3年生までの幅広い授業実践にも関わらず、多くの共通点を見出すことができた。

(1) 自己評価について

どの実践からも、振り返りカードの質問項目について回を重ねるごとに、数値による自己評価が高まる傾向が見られた。これは、単元及び毎時間の授業の目標を教師と子どもが共有し、積極的に活動することで学習目標を達成していく充実感や次時への期待感が高まったためだと考えられる。また、「友達と協力してクイズを作ることができた」や「友達に教えてもらってよかった」のような自由記述からも、個人の目標を達成できたことだけでなく、友達との関わりに着目する内容が増える傾向があった。これらのことは、コミュニケーション能力の素地及び基礎を養う点においても重要な役割を果たしていると考えられる。一時的に自己評価が下がる場合もあったが、1単元1枚の振り返りカードであるため、自己評価の変化を捉えやすく、発表に伴う緊張からうまく表現できなかったことや反省的な視点で評価していることが伺えた。できるようになったことや長期的な視点で学習を捉え、次の機会に挽回できるよう助言する等、個々に支援を行う場合の契機や指標としても有効であった。

(2) 他者評価について

「友達のよかった点」や「がんばっていたこと」、「こうすればもっとよくなる」といった建設的なアドバイスをするように留意して、他者評価を行った。その結果、評価者にとって友達の行動が活動事例の参考となるだけでなく、評価の視点を明確化させるとともに、意欲的に見たり聞いたりしようとする姿が見られ、コミュニケーションを図ろうとする態度の育成にも役立ったと考えられる。また、評価される側も友達から見られることで、活動や発表をせざるを得ない状況を作り出すことができた。さらに、アドバイス後の発表について「良くなった」や「聞きやすくなった」等の評価は、児童生徒に大きな充実感を味あわせ、自信を持たせることことができた。

(3) プロジェクト型学習について

単元のゴールを示し、児童生徒が課題を意識しながら活動に取り組み、振り返りカードを記録するという単元を構成した結果、多くの児童生徒に課題を解決するために最後まで意欲的に取り組み、友達と関わろうとする姿が見られた。また、学齢が上がるにつれて、定型文に好きな色や事柄を部分的に入れて表現するといった簡単な自己表現から、定型文をもとに自分で文を考え、必要な道具をそろえるといった効果的な工夫をする等、自発的な活動を行う姿が見られた。

これらのことから、外国語活動・英語科において、意欲を高めコミュニケーションの素地及び基礎を養うためには、評価方法を明確化したプロジェクト型学習の単元を開発し、授業実践を行うことが有効であると考えます。

（４）小中連携について

本年度の研究では、共同的な取り組みを実施することはなかったが、指導案の検討や授業参観を通して児童生徒の実態やそれに関わる教師の姿勢、あるいは教材研究や指導案作成に伴う指導の重点等、多くの類似点や相違点を実感することができた。また、教師の学習内容における長期的な視野を広げることで現在の課題を再認識することができたと考えます。今後は共同的な実践についても研究を深めることが課題である。

５ おわりに

平成２３年１２月に尼崎市立小中学校学力・生活実態調査報告が発表され、外国語活動及び英語に対する関心をいだかせるかどうかの学力の開きを縮める突破口になると考えられると報告されている。また、英語について小中交流経験の有無に学力差が見られたと述べられている。これに対する方策として、小中連携を通じた外国語・英語教育に力を入れることには、子どもたちの学習意欲を高めうる確かな可能性があるかとまとめられている。

また来年度は、小学校で、英語ノートに代わる新教材が配布される。中学校では新学習指導要領が全面実施となり、新しい内容の教科書が配布される。今後、益々授業実践における研究の深化が期待されるであろう。今後も、子どもたちが意欲的に取り組み、コミュニケーション能力の素地及び基礎を養うための授業めざして研究を進めていきたい。

<参考文献>

- 「小学校学習指導要領解説外国語活動編」文部科学省 2008
- 「小学校新学習指導要領の展開 外国語活動編」兼重 昇・直山 木綿子 2008 明治図書
- 「英語ノート1」「英語ノート2」文部科学省 2009
- 「英語ノート1 指導資料」「英語ノート2 指導資料」文部科学省 2009
- 「『英語ノート1』完全対応指導ハンドブック1」英語ノート指導研究会 2009 開隆堂
- 「『英語ノート2』完全対応指導ハンドブック2」英語ノート指導研究会 2009 開隆堂
- 「小学校におけるプロジェクト型英語活動の実践と評価」東野 裕子・高島 英幸 2007 高陵社書店
- 「小学校英語教育の展開」樋口 忠彦（代表）・泉 恵美子 2010 研究社
- 「プロジェクト型外国語活動の展開」東野 裕子・高島 英幸 2011 高陵社書店
- 「評価規準の作成のための参考資料」文部科学省国立教育政策研究所 2010
- 「評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料」文部科学省国立教育政策研究所 2011
- 「英語ノート1を活用した英語活動の授業」直山 木綿子 2011 小学館
- 「平成23年度尼崎市立小・中学校 学力・生活実態調査報告」志水 宏吉 2011 大阪大学大学院人間科学科教育文化学研究室

学級を基盤としたよりよい人間関係づくりを目指して

指導主事	青 木 優樹恵
研 究 員	磯 野 明 子（武庫の里小）
〃	由 良 健 一（武庫の里小）
〃	山 下 佳 奈（園 田 小）
〃	四 方 佑 季（武 庫 東小）
〃	岩 佐 真由実（武 庫 東中）
〃	高 田 奈央子（日 新 中）

【内容の要約】

子どもたちにとって一日の大半を過ごす学校において、生活の基盤となるのが「学級」である。そこで、学級における人間関係づくりについて研究する。

まず、子どもたちの実態を把握するために、アンケートを作成し、実施した。その結果、自尊感情が低いことがわかった。

そこで、「いいところみつけ」等、いくつかの実践を継続して行うことにより、学級がどう変わったか、個々のつながりはどう変容したか、自尊感情は高まったかを、アンケート結果をもとに考察する。

キーワード：人間関係，学級，帰属意識，実態把握のアンケート，自尊感情，
いいところみつけ，仲間意識

1	はじめに	97
2	研究の内容	97
3	実践事例	98
	（1）実践例1（小学校5年）	98
	（2）実践例2（小学校5年）	103
	（3）実践例3（小学校5年）	107
	（4）実践例4（小学校5年）	111
	（5）実践例5（中学校2年）	115
	（6）実践例6（中学校3年）	119
4	研究のまとめ	124
5	おわりに	124

1 はじめに

ひとりひとりの人間はかけがえのない存在である。しかし、所属する集団の中で不適応を起こし、孤立する子どもたちが増えているのも事実である。そこで、カウンセリングマインドを持って共感的に子どもに接し、予防的・開発的な関わりを行うことが重要となってくる。予防的・開発的な関わりとは、問題が起こってから対処するのではなく、集団の中で、人間関係を深めたり、自尊感情を高めたりすることによって、問題が起こらないように未然に予防するとともに、問題が起こりにくく、起こっても自分たちで解決できる力を育てることである。

学校において生活の基盤となるのが、「学級」である。子どもたちにとって、学級が、達成感や喜び等を共有することができ、安心して帰属できる心のよりどころであり、互いに認め合える場所であることが望ましい。そこで、本年度は、『学級を基盤としたよりよい人間関係づくりを目指して』をテーマに、研究をすすめていく。また、帰属意識を高めることによって、自主的に考え、行動し、自分たちで学級の質を高めていくことができるようになるための取り組みについても研究していく。

2 研究の内容

研究をすすめるにあたって、まず、児童生徒の実態を把握することが重要である。そこで、客観的に把握するためにアンケートを作成した。そのアンケートには「ふり返り」とタイトルをつけ、児童生徒にとっては、そのときの自分自身を振り返ることができるものとなっている。

また、質問事項は次の10項目とした。

- ① きまり
- ② 積極性
- ③⑤⑥⑦⑧ 友人関係
- ④ 自尊感情
- ⑨ 意欲
- ⑩ コミュニケーション

友人関係の項目が半数を占めているのは、よりよい人間関係づくりに取り組むにあたって、実態を具体的に把握したいと考えたからである。友人関係についての項目の中でも、③は自分自身がどう友人と関わっているかであり、⑤は友人が自分のことをどう思っているかを自分自身で振り返る項目である。また、⑥は友人との信頼関係を問う項目であり、⑦と⑧はお互いにどれだけ友人のことを知っているかを振り返る項目である。(表1)

その結果については、「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」「そう思う」、「どちらかと言えばそう思わない」「そう思わない」を「そう思わない」と表した。

ふり返り

質問項目	そう思う	どちらかと言 えばそう思う	どちらかと言え ばそう思わない	そう思わない
① 学校や学級のきまりや約束を守ることができている				
② 係活動や委員会活動には積極的に取り組んでいる				
③ 学級活動や学校生活では、思いやりをもって接することや協力を心がけている				
④ 自分のことが好きである				
⑤ 自分を頼りにしてくれる友人がいる				
⑥ 自分が悩んでいる時に助けてくれる友人がいる				
⑦ 自分の得意なことや好きなことを友人は知ってくれていると思う				
⑧ 友人の得意なことや好きなことを知っていると思う				
⑨ 今、自分はがんばっている				
⑩ 自分の意見を相手に伝えることができている				

表1 実態把握のアンケート

初回のアンケート調査の結果、自尊感情が低いことがわかった。自尊感情の低い子どもは、自分を大切にできない。自分を大切にできない子どもは、他者も大切にすることができない。言い換えれば、自分を大切に思えば、他者も大切にすることにつながり、よりよい人間関係を築くことができる。

自尊感情とは、自分のよさに気づくことであるので、自尊感情を高めるために、構成的グループエンカウンター（集団でいろいろな演習を行いながら心の触れ合いを通して人間関係を深め、個人の成長を図ろうとする体験方法）を活用し、「いいところみつけ」に取り組む。

また、それぞれの学級の実態に合わせて、それぞれのやり方で、年間を通して継続して実践する。

3 実践事例

(1) 実践例1 (小学校5年)

本学級の児童は、素直で明るく、進級して何事にも頑張ろうという気持ちを持っている。特に委員会の仕事など高学年として任された仕事には積極的に取り組んでいる。また、授業中は、自分の考えを進んで発言している児童が多い。お互いの考

えに共感する場面も見られる。その一方、指示待ちの傾向が強く、主体的に行動することができにくい。その結果、学級全体のことを考えて協力しようとする姿勢が低く、集団全体に迷惑をかけていることがある。その都度指導をすることで、自分自身を振り返り改善していこうという意欲は見られるが、継続しない。また、普段の生活の場では特定の友だちとの関わりは多いが、その他の友だちと積極的に関わろうとしていない面がある。

これらの児童の実態把握と合わせて、児童の意識調査をすることでより明確な児童の実態が分かったと考え、1学期末に「きまり」「友人関係」「自尊感情」「対人関係」などに関するアンケートを実施した。全10項目の中で、『自分のことが好きである』という質問に対して「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」と答えた児童が半数以上を占め、群を抜いて低かったのが自尊感情に関する項目であった。多くの児童が自分のことを好きと感じていないという意識を持っていることが分かる。合わせて過半数とまではいかないまでも30%程度とやや低く否定的にとらえている項目が4つほどあった。そのうち2つが、「学校や学級のきまりや約束を守ることができている」「学級活動や学校生活では、思いやりや協力を心がけている」であり、学校や学級に関する帰属意識の低さが感じられ、すすんできまりを守ったり、協力したりして学校をよくしようといった思いが少ないことが感じられる。さらに残り2つが「今、自分はがんばっている」「自分の意見を相手に伝えることができている」であり、自分自身が力を発揮できていないという思いを持っていることが分かる。また、対人関係の希薄さも感じられる。これらを総合すると、学校や学級に対する帰属意識の低さから、意欲的にきまりを守ったり協力したりしようとする姿勢が生まれておらず、協力して学級や学校をよくしていこうという意識が非常に低いということが言える。そのことが、友だちに自分の意見を積極的に伝える機会をなくし、様々な面でがんばりできていない自分に対して自信が持てないのではないだろうか。

そこで、目指す子ども像を『自分の学級や学校を大切に感じる子 自分も友だちも尊重できる子』とすることとした。まずは基盤となる学級の中で、学級を大切にすることはどういうことなのかを体験や活動、それに関するふりかえりを通して考えさせ意識させたい。きまりを守することはもちろん、よりよい学級にするための友だちへの接し方、自分自身の行動のあり方を真剣に考え行動できるようになってほしい。教師が主導権をにぎってばかりでは結局「やらされている」という思いになって、達成感を味わうことができず自尊感情も生まれにくいであろう。道しるべを示し、その都度の支援は丁寧に教師が行いながらも、児童自身が「自分でがんばっている」「自分達の力でクラスや学校がよくなっている」と実感できるような手立てを考えて実践していくこととする。

1. 実践の概要

目指す子ども像『自分の学級や学校を大切に感じる子 自分も友だちも尊重できる子』に近づくための具体的手立てとして3つの実践を行った。1つめが、「毎日のふりかえりノート」、2つめが「学級会」、3つめが「いいところみつけ」である。これらの実践について、以下、具体的に述べていく。

① 毎日のふりかえりノート

児童のきまりや約束に対する意識を高めさせることを主たる目的として行ったのが「毎日のふりかえりノート」である。学級や学校の基本的な生活のきまりの項目に一日を振り返って帰りの会に○×をつけ、5行程度簡単なふりかえりを書くという内容である。児童のふりかえりに対して教師は毎日コメントを返し、次の日へと意欲付けていく。(資料1)この実践によって、自分自身の行動を毎日振り返り、向上させようとする態度が身についてくるのではないかと考えた。継続して続けていくに従って、「友だちのがんばっていたところ」や「自分ががんばれたと思うこと」などがふりかえりの中に多く書かれるようになってきたので、その都度全体で紹介して具体的に自分の行動を振り返ることができるよう支援した。その中で、一人一人が、普段の生活の中で、具体的に「～をがんばろう」という意欲が高まっていったと感じる。

9月 14日 (水)					月 日 (水)					月 日 (水)				
宿題	忘れ物	くつ箱	名ふだ	あいさつ	宿題	忘れ物	くつ箱	名ふだ	あいさつ	宿題	忘れ物	くつ箱	名ふだ	あいさつ
○	家庭科	○	○	○			○	△	○	○	×	○	×	○
	そうじ	発表	チャイム			そうじ	発表	チャイム			そうじ	発表	チャイム	
	○	○	○			○	○	○			○	○	○	
今日のふりかえり 今日の授業は、ものすごく楽しかった。友達と協力して、課題をこなすことができた。明日は、もっと頑張りたい。					今日のふりかえり 今日の授業は、ものすごく楽しかった。友達と協力して、課題をこなすことができた。明日は、もっと頑張りたい。					今日のふりかえり 今日の授業は、ものすごく楽しかった。友達と協力して、課題をこなすことができた。明日は、もっと頑張りたい。				

資料1 児童の「毎日のふりかえりノート」

② 学級会

特別活動の「学級会」の実践である。計画的に議題を設定して話し合い活動を行い、実践を行うことで目指す子ども像に近づいていけるのではないかと考えた。相手の意見に耳を傾け意見を尊重しながら、学級をよりよくするための様々な議題に沿って話し合う場を継続的に設け、協力することの大切さや協力することによって得られる達成感を味わわせたい。さらに、その中で自分自身の力が発揮できる機会を増やし、友だちに認め

られる機会を持たせることにより、自尊感情も高めることができる考える。今回実践する「学級会」は、全員が司会を輪番制で体験し、全員発表を目指して話し合い活動を進めていく。一人一人の存在が大切であるという意識を全員に持ってほしい。また、お互いの意見を出し合いながら話し合いを進め、実践につなげていく中で、自分たちの学級や学校がよくなっているということを実感し、さらによくなってほしいという向上意識を高め帰属意識を持ってほしいと願った。

<2学期の学級会の実践>

議 題	提 案 理 由	実 践
2学期のみんなががんばれるクラス目標を決めよう	みんなで1つの目標に向かってがんばって、協力できるクラスにしていきたいから。	「一人ひとりが責任をもってそうじを最後まですみずみまでしよう」に決定し、それに向けて一人一人が目的意識を持って取り組めるように支援し、実践できるようにした。
体育大会を成功させよう	一人一人が全力を出して、2学期初めの大きな行事を思い出し残るものにしたいから	めあてを話し合いにより「赤白どちらも全力を出してがんばろう」と決定した。一人一人が、具体的に目標を持ち、体育大会に臨んだ。
体育大会がんばったね会をひらこう	みんなすごくがんばったので、それをお祝いして喜び合いたいから	体育大会に関係した出し物やゲームを考え、それぞれに係も作って自分たちで準備を進めていった。「体育大会がんばったね会」では全員が楽しんで参加していた。
音楽会を成功させよう	高学年として、心のこもった演奏をし、音楽会をすばらしいものにしたいから	体育大会の時と同様に話し合いを行いめあてを決めた。
音楽会がんばったね会をひらこう	一人一人が心をこめて演奏し、大成功だったのでそれをお祝いして喜び合いたいから	体育大会の時以上に自分達で話し合いを進め、率先して準備を進める姿が見られた。楽しんで会を開いていた。

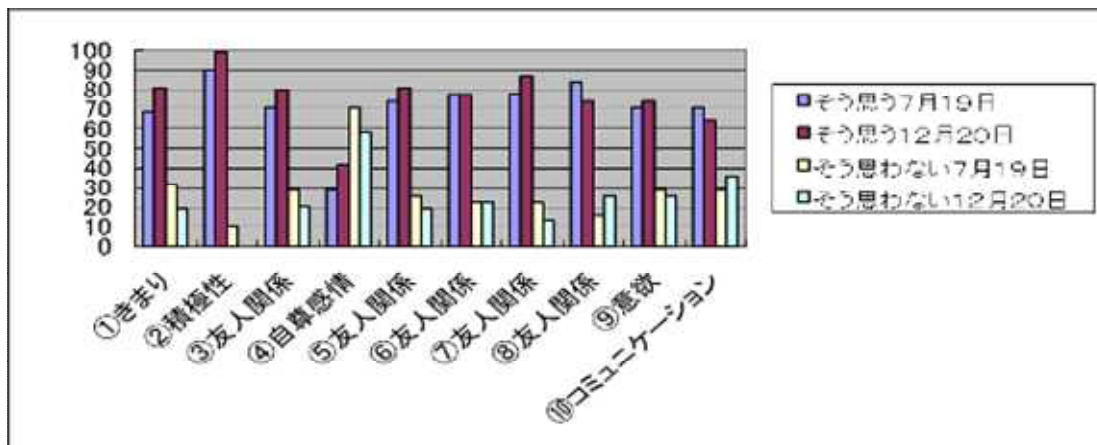
③ いいところみつけ

対人関係がなかなかうまく築けない実態を受けて「いいところみつけ」の実践を行った。友だちのいいところを見つけて紹介し合い、それを発展させてありがとう上手になるためにはどうすればいいか話し合いを行った。クラスの中には友だちのしてくれた親切に対する感謝の気持ちや尊敬する気持ちを持っている子が多くいることに気付かせ、そ

れを発展させて「ありがとう」の気持ちを友だちに伝える機会を多く持つにはどんな心がけが必要なのかを考えさせた。また、自分が「ありがとう」と伝えることで人との関わり方や自分への心のあり方にどんな変化が生まれるのかも話し合わせた。

2. 実践の考察

＜アンケート結果＞



アンケートの結果より、1学期と比べて顕著な数値の上昇が見られる項目が、4つあった。特に13%と大きく上昇を見せたのが①のきまりについての項目と④の自尊感情に関する項目であった。「学校や学級のきまりや約束を守ることができている」「自分のことが好きである」と答えた児童が増えている背景にはこれまでの実践による成果が出ていると考えられる。「毎日のふりかえりノート」の実践を通しては、児童の5行日記に教師がコメントを返したり、がんばっている具体例を朝の会などで紹介したりして、その都度、フィードバックしてきた。そのことが児童の励みとなり意欲付けとなって日々の成果として表れてきたのではないだろうか。また、「学級会」で、全員が話し合いや学級活動に参加して学級や学校をもっといいものにしよう実践を行ってきたが、その中で集団への帰属意識が芽生えてきたのではないだろうか。さらに、がんばっている自分を毎日のふりかえりや学級会の司会を担当する中で、評価してもらう機会を多くの児童が得ることができた。その中で、一人一人が自信を持てるようになり、自尊感情を高めることができたと考える。「いいところみつけ」でありがとうの気持ちを周りの友だちにもってもらっていることも一つの要素に入っていると推測する。自分が周りの友だちにありがとうと言われる行動をとっていることに気付かせることで、自分の存在意義を再認識させることができた。さらに、多くの児童が、自分からありがとうの言葉を言えるように友だちと接していきたいという思いをもつきっかけとなった。実践を通しての児童の実態とアンケートの結果より、児童の主体性を伸ばす日々の取り組みの重要性を感じた。また、その背景には教師との信頼関係がベースとしてあり、その信頼関係を継続させることでより効果的となると考えられる。

3. 今後の課題

アンケート結果より、⑧の友人関係に関する項目と⑩のコミュニケーションに関する

項目の数値が下がっていた。「友人の得意なことや好きなことを知っている」と「自分の意見を相手に伝えることができる」である。これらのことにより、自分自身に関しては肯定的に捉えられるようになってきているが、互いに気持ちを交流させるところまでは至っていないことが分かる。教師と子どもとの信頼関係、子ども同士の信頼関係を、今後さらに深めていく重要性を感じた。

(2) 実践例2 (小学校5年)

1. 実践の概要

本学級の児童は、何事にも楽しんで取り組もうとする。また、いろいろなことに興味をもち、初めて活動する委員会活動では、任された仕事に積極的に取り組んでいる。しかし、指示されたことだけしかできなかつたり、注意を受けてからしか行動できなかったりすることが多い。また、自分の意見に自信が持てず、悪いとわかっていても流されてしまう児童もいる。授業でも、自分の意見を持っているが、みんなの前で発表することができず、結局全体の中で深め合うことはできていない。

そこで、児童の実態を客観的に把握するために7月末にアンケートを実施した。その結果、「自尊感情」が55%と低く、「コミュニケーション」が次に低く59%であった。(図1) これらの結果から、今の自分に満足できず、今の自分に自信を持ってない児童が半数近くいることが分かった。これら2つの項目に関しては、自分に自信がなく、クラスの中でも自分の思いが伝えられなくなっているのではないかと、また、クラスに対する帰属意識も低くなってきているのではないかと考える。

そこで、まず、児童が自己理解をし自己を受け入れること、そして、クラスの中でそれぞれの考えを交流できる機会を設け、児童の思いを語りあえる仲間作りを目指して、研究を進めた。

2. 実践の考察

児童に自己を理解させ自信を持たせるために、一日の振り返り(以下「生活ノート」)を書かせた。「生活ノート」に書かれたことに対して、教師がコメントを返すときに、それぞれの児童が感じたことを受け入れ、意欲付けをし、自信を持たせるように働きかけた。

また、道徳の授業を充実させることで、思いやりや友情についてそれぞれの価値観を出し合い、今のクラスや友達関係をよりよくしていくにはどうしたらいいのかということを考える機会になると考えた。

また、サンキューカードを用いていいところみつけをし、児童がお互いを認め合える機会を作った。

①生活ノート

児童の自己理解と自信、教師と児童のつながりをつけるため、終わりの会のときに一日を振り返って、日記を書き、その日記に教師のコメントをつけて返した。(資料1)

生活ノート実践の考察

児童は、その日にあったことを詳しく書いた。その中には、がんばったことや、楽し

かったこと、友達関係で悩んでいることなどさまざまなことが書かれていた。教師の知らないところで起こったことが書いてあるので、教師の児童理解、児童の友達関係の把握にもなった。また、児童の感じたことを受け入れ、頑張っていることや苦労していることを積極的に認め励ましていくことで、一日の中で話しかけられなかった児童に対しても一人一人に個別の対応ができた。

資料1 生活ノート

②道徳の授業の充実

道徳の授業を充実させることで、自分の思いをそれぞれが持ち、話す楽しさ、それを聞いてもらえる安心感、また、思いやりや友情などについて、人の意見を聞くことにより自分の意見と同じ意見や違う意見があることに気付かせ、みんながいろいろな考え方を持っていていいんだということを実感できるようにした。最初のころは、自分の意見を言うことが恥ずかしいと思い話せない児童もいた。そこで、道徳の授業では、それぞれが資料を通じて感じたことが正解であり、間違った答えはないということを常に意識させた。教師もそれぞれの意見を大切に受け入れ、児童の意見をつなげていくようにした。授業の発問でも「～君、～さんならこの時どうする？」という聞き方をせず、「主人公はなぜこのようなことをしたと思いますか？」と主人公の気持ちで答えるようにさせた。こうすることで、自分の思いを語りにくい児童でも、主人公の気持ちを語るなかで自分の経験をもとに発言する児童が増えた。また、授業の最後には振り返りの感想を自由に記述させ、学んだことを五・七・五の俳句にもまとめさせた。後日、児童の意見をプリントにまとめ、それを配布し、みんなで読み合った。そして、教室に掲示し、学級の中で問題があったとき、道徳で学んだことを振り返り、実際の生活場面と結び付け、みんなで考えるように指導していった。(表1)

資料	ねらい
心の信号機 (学研)	思いやり

正直五十円分（文溪）	正直
小さい勇気をこそ（ともだち）	勇気
うばわれた自由（文溪）	自由・規律
ロレンゾの友達（文科省資料）	友情
おばあちゃんの指定席（大阪書籍）	思いやり
そろばんづくり（兵庫県副読本）	伝統・文化
ムカデ競走（日本文教出版）	協力
ありがとう上手に（東京書籍）	感謝

表1 道徳の実践で用いた資料

道徳授業の考察

授業の中で、自分の思いを語れるように働きかけてきたことで、何を言ってもいいんだという児童が増え、それを聞いている児童もいろいろな意見に耳を傾けることができるようになってきた。発表の場面では、違う意見であっても、自分の意見に自信を持って発言できる児童が増えてきた。そして、その意見の違いが大切と感じる児童が増えた。感想の中でも「～さんの言った言葉がすごくよかった」や「～君の意見は自分とは違っていて新しい事に気づけた」といった意見が増えてきている。

また、授業を通じて、生活の中でのルールについて考え、実際にルールをやぶった場面でも、道徳の掲示物やそのときの児童の意見を取り上げながら、ただ注意するだけでなく、授業の振り返りと実際の場面での結びつきを大切にしながら指導を続けている。

③いいところみつけ

クラスの中で受け入れられていることを実感させ、クラスの中での自己有用感をもたせるため、「サンキューカード」を使い、いいところみつけを実践した。

いいところみつけ実践の考察

一回目のアンケートでは、自分が困っているとき（特に友達とけんかをしたり仲間はずれにされたりしたとき）に声をかけてくれたこと、話を聞いてくれたことなどがうれしかったという児童が多かった。その結果をもとに、クラスの中のありがとうを取り上げ、それぞれのありがとうの理由について、クラスの中で交流した。「ありがとう」のなかには、「優しさ」「思いやり」「はげまし」があること、そして、いろいろなことをしてくれている人がいて、その行為に気づく事が大切だという意見が出た。

また、道徳で「ありがとう上手に」という資料を扱った。この資料を扱ったのは、「ありがとう」という言葉には、安心や勇気が含まれていること、そして、児童たちが今当たり前のように生活を送っているのは周りの支えがあるのだということや、周りの支えに感謝する心を持つことの大切さに気付かせたいと思ったからである。

その後、もう一度いいところみつけを行った。二回目のアンケートの感想では、「当たり前と思っていたことも実は思いやりを持ってやってくれているんだなということに気づけた」「自分はいつもいろいろなことに気をかけてもらっているから、自分もできるようにがんばりたい」「私を支えてくれる友だちがたくさんいることに気づいた。だから私

はいつも当たり前のように優しくしてくれている周りの友だちに感謝したいと思った」といった感想が多かった。

今回の結果から、自分は一人ではないこと、クラスの中で助けられ生活していることに気付けた。また、周りの児童の思いやりのある行動に気付くきっかけになったのではないかと考えられる。

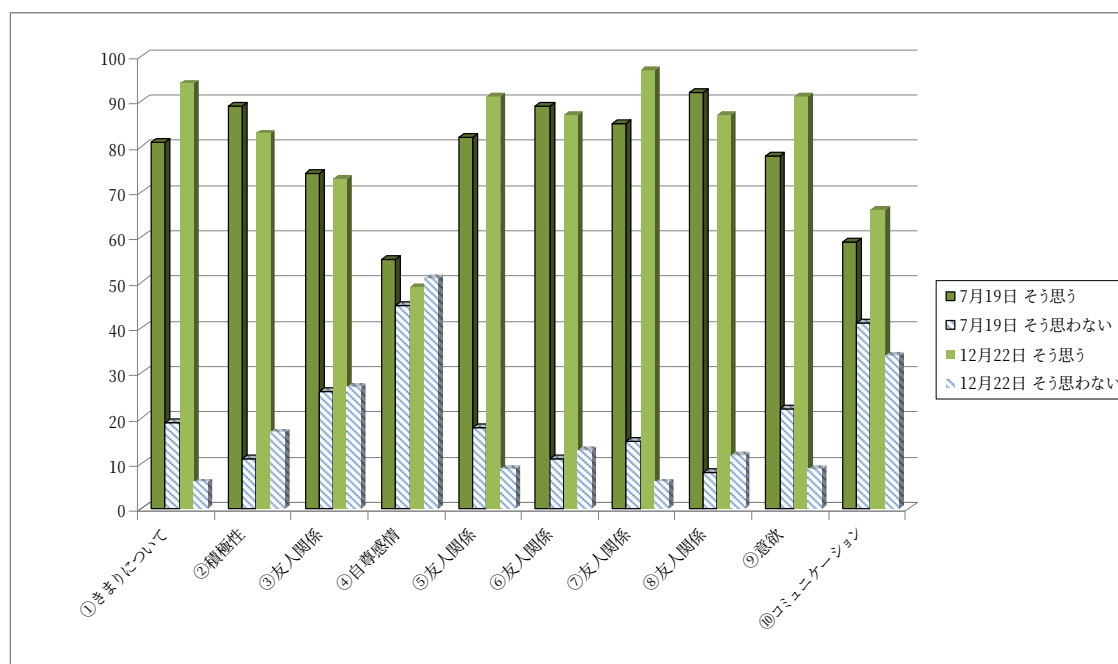


図1 児童調査アンケート

1 2月後半に2回目の児童調査アンケートを行った。「⑩コミュニケーション」の項目が65%、「⑨意欲」の項目が89%、「⑤⑦の友人関係」の項目が89%、93%、「①きまり」の項目が94%とそれぞれが高くなった。全体的に80%を超える項目が多くなった。

今回、「コミュニケーション」「友達関係」「きまり」の割合が高くなったのは、道徳の授業やいいところみつけで学級全体での子ども同士の意見交流とそれぞれの活動のフィードバックによって自分の意見を言ってもいいという安心感がクラスの中で生まれてきているからではないかと考えられる。また、その安心感から自分の意見に自信を持つことができた児童もいる。生活ノートや個別の面談などの個々に対する支援は「意欲」につながり、自分に自信をもって取り組もうという気持ちにつながったのではないだろうか。

これらの結果から、集団の中で自分と相手の折り合いをつけながら、クラスへの帰属意識ができてきたように思う。このような児童の変容から、継続して行うこと、何か活動をしたときにはフィードバックを行い、もう一度児童の生活を見つめなおすきっかけを作ることが大切であると感じた。これからも、一人一人を受け入れる姿勢、個々への支援と学級集団の質を高めるような実践を行っていきたい。

3. 今後の課題

今回、自尊感情が7月よりも下がっている。自尊感情を高めるためには、まず、自分

のことをどんなふうに思っているのか考えていく必要がある。今の自分に満足していないのは、もっと高い目標を持っている児童がいたり、今の自分のよさに気付いていない児童がいたりするからかもしれない。それらのことを把握するためにも、今後も生活ノートを使いながら、児童理解を深めたい。また、3 学期には自然学校があり、体験活動の中で助け合いや思いやりなどをクラスの中でも具体的に取り上げ、児童一人一人に自信をつけるように働きかけていきたい。そうすることで、クラスに対する帰属意識や自己有用感が高まり、自尊感情を高めるきっかけになるのではないかと考える。

(3) 実践例3 (小学校5年)

1. 実践の概要

本学級の児童は、明るく何事にも前向きに取り組むことができる。委員会活動など、高学年としての自覚も生まれ、意欲的に取り組んでいる。その一方で、まだまだ幼い面も残っており、自分の意見を通そうとして意見の食い違いから言い争いになる場面もみられる。お互いの意見を聞いて話し合うと、素直に納得しすぐに仲直りすることができるが、相手の意見を尊重し自分たちで解決するには至っていない。

学級内には、ADHDと診断され、落ち着いて学習することができにくいA児がいる。集中して話を聞くことが苦手なため、発問と全く違うことを答えることがあり、他の児童がすぐに否定する言葉を投げかけないよう注意が必要である。休み時間など一人で過ごすことも多く友だちとの関わり合いが課題である。

また、LDの疑いのあるB児は、ひらがなと一年生段階の漢字の一部、掛け算は6の段までしか習得していない。そのため、一斉授業についていくことは難しい。宿題も個別で一年生の計算ドリルと、カタカナの練習や一年生の漢字学習を行っている。最初は周りの児童が、宿題が違うことを気にしていたが、苦手なところを復習していることを理解したようで、気にしなくなった。となりの児童がノートを取るところを教えてあげたり、本読みのときは読めない漢字を小声で教えてあげたり自然に手助けができています。

基本的には人にやさしく声をかけ、自然に手助けのできる児童が多いため、2人の児童が困っているときには手を差し伸べることができている。だが、まだまだ理解をしていない児童もおり、時に攻撃的になったり、のけ者にしたりすることもあるので、注意深く見守り、うまく輪に入ることができるよう声掛けが必要である。また、どうせできないといって諦めるような発言もあるので、誰もが自分は認められており、やればできるといった自尊感情を高める活動を取り入れていきたい。

これらの児童の実態と合わせ、客観的に児童の実態を把握するために、1学期末にアンケート調査を行った。この項目の中で、「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」と答えた児童が多かったのが、『自分のことが好きである』という自尊感情に関する項目である。さらに、『自分の意見を相手に伝えることができる』という項目も否定的な意見が多く、自分の発言に自信を持つことができていない児童がいることが伺える。

一方で、『今、自分はがんばっている』という項目はクラス全員が「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えていた。また、『自分を頼りにしてくれる友だちがい

る』『自分が悩んでいる時に助けてくれる友だちがいる』という項目も肯定的に答えている児童が多かった。このアンケートは自然学校を終えた二日後に実施した。自然学校では、山登りのプログラムを行い、暑い中最後まで諦めず山道を登りきった達成感を味わった児童が多かった。また、キャンプファイヤーの出し物や飯ごう炊飯などのプログラムを通して、友だちと協力して行事を行う充実感を味わった。このため、これらの項目が高かったと考えられる。体験活動によって、普段の教育活動で味わうことのできない体験をすることは子どもたちの自己肯定や対人関係に大きな影響を与えることがわかる。

しかし、自然学校で達成感や充実感を味わったにも関わらず、自分に自信を持つことができず、友だちに対して思いを伝えることができていない児童がまだ多くいることがわかった。

そこで、目指す子ども像を『自分も友だちも認め合い、助け合うことのできる子ども』とした。自分は認められていると感じることのできる経験を多く取り入れ、自身に自信を持つことができるようになってほしい。また、友だちのよさを認める目を養うことで、A児やB児を含め、できていないことを責めるのではなく、手を差し伸べることのできる心を育てていきたい。

2. 実践の考察

① 「ふわふわ言葉とチクチク言葉」(道徳1学期)

出典「エンカウンターで学級が変わるショートエクササイズ集」図書文化社

普段何気なく使っている言葉をふわふわ言葉とチクチク言葉に分けて振り返ることで、言葉によって相手の受け取り方が違うことに気づく。あたたかい言葉を使うことで、よりよい人間関係を築けることを学習した。

② 「自分もOK? 相手もOK?」(道徳1学期)

出典「ほほえみ」

普段意識せず行っている自分の行動が、相手を不快にしていることがあることに気づき、クラスみんなが気持ちよく生活するためには、一人一人がどのような行動を取ればよいかということについて考えた。

③ 夏休み作品展のいいところみつけ

夏休み作品展で、友だちの作品を見て、いいところ・工夫しているところや努力しているところを付せんに書いて友だちの作品に貼り合った。工夫をしていたり努力をしたりしていると思った作品に対していいところみつけをすることができていた。一人2枚は書くように指示したが、意欲的に何枚も書いている児童も見られた。書き終わった後、自分の席に戻り友だちが書いてくれた内容を読んだ。どの児童も一人3枚程度付せんに貼ってもらっていた。自分が努力したところや工夫したところを書いてもらえたかどうかを聞くと、ほぼ全員が手を挙げていた。自分の作品を認めてもらったことが嬉しかったようで、作品と付せんに大切に持ち帰っていた。

④ いいところみつけ

12月1日(木) 詳しいことは伝えず、班の子のいいところを見つけるように指示した。中にはいいところが思いつかず、手が止まってしまう児童もいた。

ア. 新幹線のことをよく知っている・給食を残さず食べていた
間違っているかもしれないと言いながら発表していてすごい
サッカーがうまい・絵が上手

→自分と関わっていないが、友だちのよさに気づくことができている。友だちのよさに気づくことができる視点を持ってほしい。

イ. 松葉杖のとき助けてくれた・友だちに勉強を教えてあげていた

悪口を言われたときにかばってくれた・休み時間に遊びに誘ってくれた

→自分のことを気にして思いやって声をかけてくれている。その子のことを思いやって、その子に応じた声かけをすることができている。

ウ. 筆箱が落ちたらひろってくれた・のりを貸してくれた

→その子だからというわけではなく、困っている人を見て自然に行っている優しさ。
当たり前でできてほしい。

12月2日(金) アンケートを受けて導入の授業

いいところみつけの内容を一人一つずつ発表させた。ア、イ、ウの項目に分けて板書し、視点が違うことについて話し合った。授業を行う前は、ウの項目はできて当たり前のことなのでいいところではないと教師側は考えていたが、子どもたちは当たり前のことができない人もいるからそれができるのはすごいという意見が多かった。どの視点からも友だちの良さに気付くことができるのが大切であり、また特定の子だけではなくだれに対しても思いやりを持って行動できるようにしていきたいと話し合った。授業後に、いいところみつけを行った。

12月6日(火) ありがとう上手になるためにはという授業

導入でウの項目の当たり前のことでもできることは素晴らしいという意見が多かったので、『ありがとう上手に』を範読した。やってもらって当たり前だと思っていたことが、実は当たり前ではなく、様々な人に守られ、支えられて生きていることを再確認させた。

・今まで「ありがとう」と思っていたこと

お年玉をもらった・ご飯を作ってもらった

習い事でわからないことを教えてもらった・お小遣いをもらった

→今まででは何か物をもらったときや、してもらったときにありがとうと思っていたと感じていた。

・これから「ありがとう」と言いたいこと

働いていてくれる人たちにお礼を言いたい・お母さんにいつもありがとうと言いたい

お母さんに産んでくれてありがとうと言いたい・給食を配ってくれてありがとう

→当然だと思っていたことに対して、お礼を言いたいと書いている児童がほとんどであった。

授業後にいいところみつけを行った。

12月7日(水)、12月8日(木) いいところみつけを行った。

12月12日(月) まとめ

(1)二班分のいいところを紙に書き、切り取って本人に渡す。

(2)もらったカードの中から、ここが自分のいいところだなあと思うことや、気付いて

いなかったが言われて嬉しいことを選び、自分のいいところをカードに書く。
(3)もらった紙を画用紙にはった。
→友だちからもらったいいところは全員分を印刷して児童に配り、自分のいいところカードは掲示し、みんなが見ることができるようにした。

〈振り返り〉

自分のいいところを書いてもらってどう思いましたか

自分がおもしろいと思っていなかったけど、おもしろいなと思った。
優しいって書いてもらって嬉しかった。みんなに自分を見てもらっていてうれしい。
自分があまりしゃべらない人も自分のいいところを書いてくれて嬉しかった。
自分のいいところで書いてくれたことをもっとがんばりたいと思った。

友だちのいいところを見つけてどう思いましたか

いいところみつけをしてから、ぜんぜん遊ばなかった人とも遊ぶようになった。
それぞれにいいところがあるということがわかりました。
自分と違ういいところをまねできたらいいと思います。
悪いところしか目につかないけど、考えてみたらいいところがいっぱいあった。

この活動を振り返って

友だちのことをよく見るようになりました。自分のいいところを大切にしていきたい。
これからも自分のいいところも人のいいところも見つけていきたい。

いいところみつけのまとめとして、自尊感情と対人関係に関する項目だけを抜粋したアンケートを行った。『自分が悩んでいる時にたすけてくれる友人がいる』という項目が、1学期と比べ10パーセント上がっていた。友だちのいいところを見つける中で、友だちに様々な場面で支えられていることを実感した結果ではないかと思う。また、『自分の得意なことや好きなことを友人は知ってくれている』『友人の得意なことや好きなことを知っていると思う』という項目も1学期に比べて「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の項目が上がっていた。友だちから自分のいいところを書いてもらったり、自分が友だちのいいところを見つけたりして、自分のことを理解してくれている安心感や、相手を知っていると実感したのであろう。しかし、自分のことが好きであるという自尊感情の項目が「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の児童が30パーセント下がっていた。

3. 今後の課題

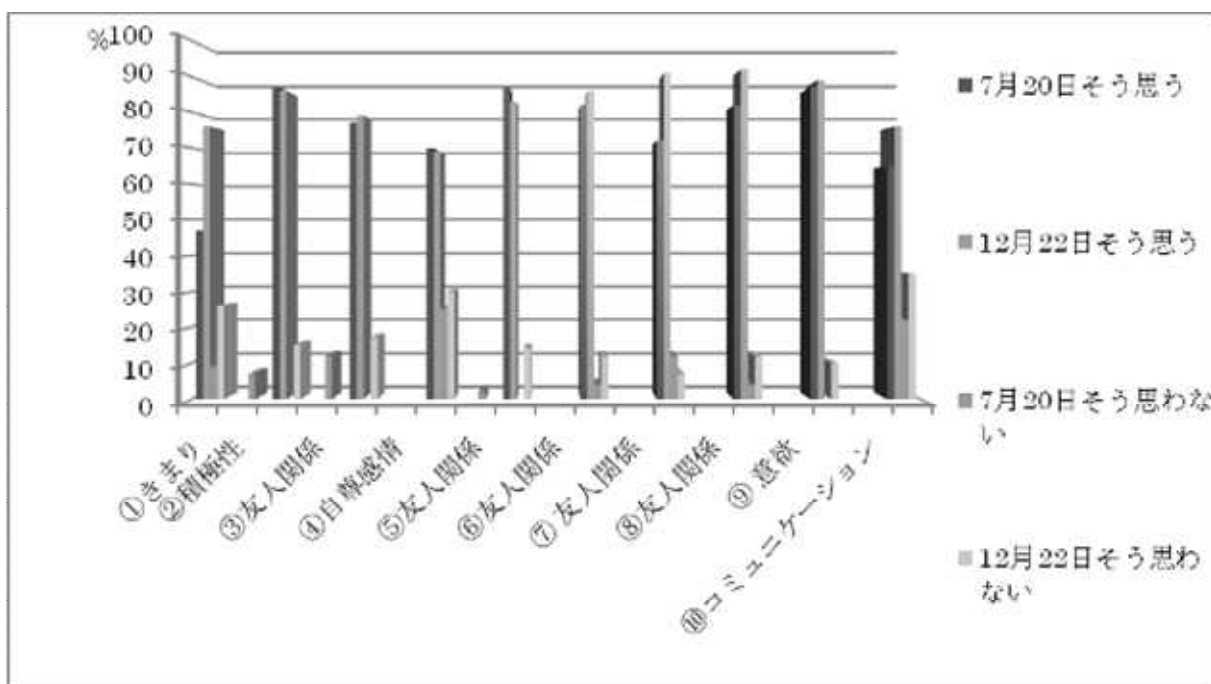
2学期の終業式の日、1学期と同じ10項目のアンケートを行った。その結果、いいところみつけのまとめで行ったアンケート結果から『自分のことが好きである』という項目が上がっていた。12月16日にいいところみつけで友だちに書いてもらった画用紙を全員分印刷し、児童に配った。一人一人に対して、できるだけ他者から見つけてもらったいいところを紹介した。子どもたちは、他の児童が他者に行っているいいところの内容も真剣に読んでいた。他者から認められていることを紹介され、他者のいいところを共有することにより、自尊感情が芽生えたのではないかと考えられ

る。また、ジョギング大会を行い、2キロメートル走り切ったことで達成感を味わった。そういった経験が数値として表れたのではないだろうか。

一方で、『今、自分はがんばっている』という項目は1学期に比べて下がっていた。2学期は体育大会や図工展など行事が多かったが、子どもたちにとって「やらされている」という気持ちがあったのかもしれない。それに比べ、自然学校での経験は自分自身ががんばったという達成感や充実感を味わうことができたのだろう。やはり、体験活動は自己肯定や仲間作りに効果があり、プログラムを通して子どもの自信に大きくつながっていくことがわかった。

成果として上げられることは、いいところみつけを行った後に、クラスの中で友だちと上手に関わることができなかった児童に声掛けをする児童が増えたことである。一週間友だちのいいところを見つけていく中で、関わりの少なかった友だちの新たな一面を見つけ仲良くなったと考えられる。

今後の課題としては、前述したように自尊感情があまり高まらなかったのも、いいところみつけの継続や、教師が普段の生活でその都度褒めたりお礼を言ったりするなどの声掛けにより、児童が自信をもつことのできる場面を多く取り入れていくことが必要である。



(4) 実践例4 (小学校5年)

1. 児童の実態

男子16名、女子23名（特別支援学級の児童1名）計39名のクラスである。

4月当初のクラスの雰囲気は、あいさつの声が小さく、元気がないという印象であった。男子は、比較的小となしい児童が多いが、企画やイベントになると盛り上がる児童が多い。女子は、人数が多く、人間関係に苦労しているようにも見えるが、最後まで一生懸命に取り組んでいる児童が多い。

クラス全体としては、一人一人いいところがたくさんあるのにそれを出し切れていないように感じる。また、男女の関わりが薄く、グループでの行動になるとなかなか自分をアピールできない児童が多いように思う。

「自分たちで気づけるように」と何度も話をしているが、なかなか自分たちだけで気づいて行動できていない。少しずつ自分たちで気づいて行動できるように、自然学校などの体験活動を通して、一人一人が心がけていってくれたらよいと考えている。

1学期のアンケートの結果より、自尊感情が他の項目より明らかに低いことが分かった。高学年になると「自分のことが好き」と自信を持っていえることが難しくなるが、少しでも自信を持って自分のことをアピールできるような取り組みをしていきたいと考えた。

2. 実践の概要

① 学級目標

学級目標は「光 明るく思いやりのあるクラス」である。光にちなんで、クラスのキャラクターを星にし、クラスで達成したことがあれば目標のまわりに星を貼ることにした。1学期は、教師主体で決め、2学期は、「行事・学習・生活」の3つの視点からクラスで達成しなければいけないことを話し合いで決めた。

② 係活動での取り組み

何か係でイベントをしてほしいと子どもに提案した。みんなでできる遊びを企画したり、帰りの会で教科に関するクイズを出したりした。また、新聞やクイズを書いて教室に掲示する係もあった。

③ いいところみつけ

「ありがとう」・自分がしてもらってうれしかったこと・友だちのいいなあと思ったところを書いてみよう!!! (理由もしっかり書きましょう。)というテーマでいいところみつけをした。

ア、1回目は、何も言わずに書かせる。

子どもたちの書いた内容をだいたいまとめてみると、出てきた内容は、25項目(優しい・教えてくれる・～してくれる・おもしろいなど)であった。

イ、25項目を「1. よく気づけた 2. 気づけた 3. むずかしかった」の3つに仕分けさせる。3はどうして気づくことが難しかったのか理由を考えて発表させ、これからどうしていったら気づくことができるのかをみんなで考えた。下記が出てきた意見である。出てきた意見をまとめて教室に掲示した。

これはむずかしいと思った理由は・・・

- ・なかなかしてる人が少ない。・実感がない。
- ・知っている人もいるけど知らない人もいる。・人をしっかりみていない。
- ・時間がたって仲良くなならないとみつけられない。

これからやっていきたいこと!!

- ・一人一人をよく知っていく。・もっと声かけ(積極的に)
- ・友だちをよく見る。・友だちのために。

・いろんな友だちと仲良くする。・自分のことよりも友だちを！！

また、道徳の資料「ありがとう上手に」を読み、感謝の気持ちを持つことが大切であることを話した。

ウ、5日間いいところみつけをする。

上記のことをヒントにしながらい今度は5日間いいところみつけを行った。1回目よりも友だちのことをしっかり見て、様々な視点で友だちのいいところをみつけることが出来た。

「ありがとう・自分がしてもらったこと・友達のいいところと星2個ところを書いてみよう！！」（理由もしっかり書きましょう。）

名前	名前
名前 さん	いつも優しいなをまねていていいなと思いました。 （理由）手伝おうかと聞いてくれたりしたからです。
名前 君	「しょに帰ろうて言ってくれるのがうれいです。 （理由）「しょに帰ろうて言ってくれるのがうれいです。
名前 さん	放課のときかき取りに行ってくれたり時間たよと教入くれる （理由）かき取りに行ってくれたり時間たよと教入くれる
名前 君	いつもみんなのランドセルを取っているのを見習いたいです。 （理由）ランドセルを取っているのを見習いたいです。
名前 さん	「しょに帰ろうて言ってくれるのがうれいです。 （理由）「しょに帰ろうて言ってくれるのがうれいです。
名前 さん	いつもみんなのランドセルを取っているのを見習いたいです。 （理由）ランドセルを取っているのを見習いたいです。

エ、5日間で集まったものを全て切って子どもたちに配布。

配布されたものを見ながら、振り返りカードとアンケート（1学期と同様のもの）と「私（ぼく）のいいところは～です。」というテーマで短冊に書かせた。短冊は廊下に掲示した。

振り返りカード

- ・自分のいいところをみつけてもらえると、こんなにもうれしいものなんだとわかった
- ・自分はやってるつもりじゃないけどいいところを書いてくれた
- ・自分では気づかなかったところがたくさんわかってよかった
- ・たくさんいろんなことをみんながんばっていることがわかった
- ・みんな友だち思い
- ・友だちのことをよく知れたし、仲良くなれたかなと思う

上記のような感想が多かった。友だちのよさに気づけただけでなく、自分が何気なくやっていることが友だちから喜んでもらえていると気づけた活動であったことが感想からわかる。

短冊作り

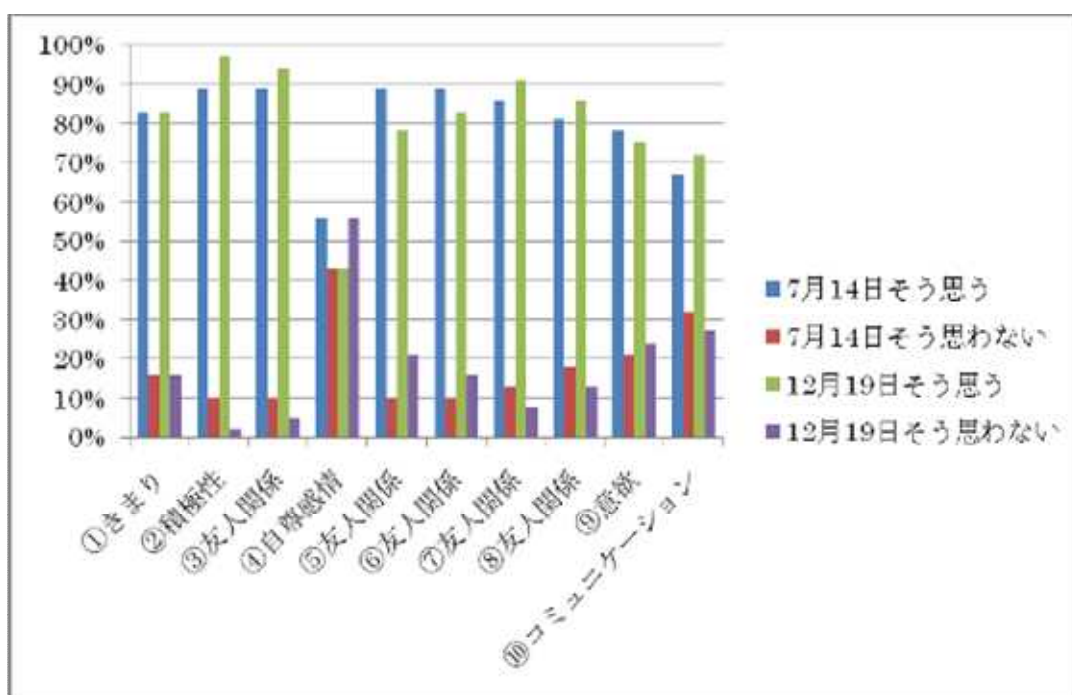
自分のいいところを書くことに抵抗がある児童がいた。言い切ってしまうと書きにくいということだったので、語尾を「思います」にしてもよいことにした。いいところカードを配布した後だったので、すぐに短冊に書くことができた。

3. 実践の考察

1学期よりも意欲的に自分達で考えて取り組めるようになってきたと感じる。学級目標については、目標の周りに星を貼っていくことが目にみえた達成感となり、クラス全体で何か達成しようという気持ちがだんだん強くなっていったように思う。だから、もっと日常の中で頑張っていることも認める機会を多く作っていく必要があった

と考える。いいところみつけについては、2 回目のいいところみつけのカードを全ての子どもたちに配布した時、自分が予想していたよりもたくさんのカードをもらうことができ、もらった瞬間全員が笑顔になった。普段何気なくしていることがみんなに評価されるということは子どもたちにとってとてもよいことであった。しかし、短冊を書くことには、抵抗があったようだ。自分のことをアピールすることはやはり苦手だということを改めて実感した。2 学期の終業式の日配布した学級だよりに5 日間に集まったいいところが451 個であったことを書いた。まさか451 個集まったとは誰一人思っていなかったようだ。一人一人のいいところみつけであったが、クラス全体として振り返ることも大切であると感じた。

実態把握のアンケート



● 2 回のアンケート結果から

1 学期に比べて割合が高くなった項目は、②③⑦⑧⑩である。割合が低くなった項目が、④⑤である。ほとんど変化しなかった項目が、⑥⑨であった。

②については、自分から積極的に行動することができていると児童自身も感じていることが分かる。これは、5 年になり委員会が始まり、だんだん仕事を任され、2 学期からは仕事をきちんとできるようになったこと、また、係活動で児童だけでイベントを考える機会があったことにより、自ら行動しようという気持ちが出てきたのではないかと考えられる。

③については、学級目標の中に「思いやり」という言葉があり、何かあれば繰り返し学級目標に戻ってクラス全体で考えてきた。「群れ」ではなく、よい「集団」になろうとみんなで心がけてもきた。また、いいところみつけをしたことにより、友だちをよく見ることに加えて、友だちのことを気づかい、優しい心で友だちに接することが

できるようになったと考えられる。

⑩については、最初は、なかなか男女で上手くコミュニケーションが取れなかったが、班での話し合いなどを取り入れることにより、少しずつみんなで話せるようになってきたので自分の意見を相手に伝えられるようになったと考える児童が増えたのではないかと考える。⑦⑧の項目が増えたことは、やはりいいところみつけをしたこと、関係があるかどうかははっきりしないが、コミュニケーションが取れるようになってお互いのことを知ることができるようになったことも要因ではないかと考える。

④の自尊感情は、なかなか上がらなかった。⑤も「自分を頼りにしてくれる友人がいるか」という項目なので、自信のない子どもが多いことがアンケートの結果からも分かった。1学期は、自然学校、2学期は、体育大会・音楽会とどちらの学期も大きな行事があり、どの子どもも意欲的に取り組み最後まで頑張っていたのだが、自分自身を認めてあげるまでには到達することができなかったと考える。達成感などをもっと味わったり、友だちに認めてもらったりする場面を多く作っていく必要があるのではないのかと考える。また、自然学校などの体験学習をすることはやはり大切なことであると感じた。

4. 今後の課題

今後の課題としては、自尊感情を高めるためにはどうしたらよいのかをもう一度考えていかなければならないと思う。一人一人いいところがあるのに、それに気づいていない児童が多いことがわかった。何気なくしていることが実は素晴らしいことであるということをもっと気づけるような取り組みを行っていかなければならないと考える。また、恥ずかしいという気持ちが強く、自分をアピールすることが出来ない児童が多いとも感じた。積極的に行動しようという気持ちが強くなってきているので、もっと認めてあげなければならぬと考える。児童にとって、体験→達成→そして、認められることにより、初めて自信につながっていくのではないかと考える。

(今後、取り組んでみたいこと)

① いいところの木作り

一人一人の木を作り、いいところを書いて教室に掲示する。

② ほめほめタイム

毎日帰りの会に、「ほめほめタイム」という時間を作り、前に出てくる友達(一人)のよかったことを全員が一言ずつ話をしていく。

(5) 実践例5 (中学校2年)

2学年は6クラスあり、担当しているクラスには男子20名、女子19名、計39名が在籍している。クラブ活動への加入率は高く、男子は20名中17名、女子は19名中15名が部活動に所属し、学校外でも野球やサッカー、水泳などに男子2名、女子1名が参加している。

男子は、指導不服従などの問題行動が多いA、学習についていけずカッとなると暴力を振るうB、コミュニケーションがうまくとれずアスペルガー症候群の疑いがあるC、Aの影に隠れて好きなことをしているDなどが目立つ。

女子は、服装違反や指導不服従などのa、気が強く思いどおりにものごとを運びたがるb、bと行動をともにするc、aのグループと敵対関係にあるdが目立つ。一人一人と話をすると、落ち着いて受け応えができることもあるが、だらしなく自分に甘いので、クラス集団では孤立しやすい傾向にある。

昼食時は仲間はずれを作らないという条件で自由に昼食を食べているが、4月当初からいくつもグループを変わる生徒がおり、まだグループが固定していない。(6月現在) 体育大会では学年優勝をしたが、まだまだ学級としてはまとまりがない状態である。

1. 実践の概要

①トライやる・ウィーク

9月下旬に5日間「トライやる・ウィーク」があり、それぞれ場所や業種も異なる事業所で5日間職業体験をした。男子Aは1日のみ参加、女子dは不参加だが、他は全員参加。数日休んだりウソをついて早退したりした生徒もいたが、それぞれに得るものがあった。また、その活動を写真つきで展示したところ、興味をもって見ている生徒が多かった。しかし、興味を持つにとどまる生徒が多く、親しくしている生徒間でしか質問などのやり取りは見られなかった。

②合唱コンクール

10月末に全校で合唱コンクールと文化発表会があった。10月中旬から学級での練習が始まった。担任が音楽科なのでどうしても学級の練習というより授業の延長という感じが強く、担任主導で実施する状況であったが、「朝練習をしたい」という女子からの申し出によりクラス全員で朝練習を開始した。全員はそろわないまでも毎日28人～33人が参加した。男子は壁にもたれながらも歌い続け、女子はパートで音を確認しながら意見を言い合うなどしていた。歌が苦手な生徒に厳しい声をかけた生徒がおり、女子の1人が「合唱が終わるまで学校に行きたくない」と言って休んだことがあったが、翌日からは参加できた。Aは練習中にクラスの生徒にちょっかいをかけ、教室からいなくなるなどを繰り返していたが、担任が厳しく注意すると暴れて帰宅し、合唱には参加しなかった。女子dは練習に1度来たがその後は学校に登校しなかった。朝練習への違和感は特になく、男女でもめることもなく合唱でき、上位入賞こそならなかったがよい合唱ができた。「協力できてよかった」「みんなで声を出して歌えてよかった」など前向きな感想が多かった。

③転出していく生徒との関わり

合唱の練習が始まってすぐの11月中旬に、女子生徒が、父の仕事の都合で海外に行くことが決まった。10月中旬、みんなに「あと1ヶ月で転校します」という話を自らし、みんなの「どこに行くの?」という質問に「海外(国名)」と言うと「エエー!!」とクラスは騒然となった。「合唱コンクールが最後の行事になるので、一緒にがんばりたい」というコメントに、女子は結束が少し強くなったように感じられた。男子も今まではあまり印象がなく、どちらかという行動に時間のかかる彼女に対しては、「うざい」というコメントを発する生徒もいたが、転校することにショックを受けていた。担任が「クラスメイトはずっといて当たり前とは限らない。今ここでみんなが学んでいることは運命的な出会いなのだ」という話をし

たら静かに聞く生徒が多かった。

合唱コンクールの後、「優勝できなくて残念だけどみんなと歌えてよかった」と転出する女子生徒が泣きながら友だちと話す姿を、クラスの生徒の多くが見ていた。

女子生徒の最後の登校日。それまで数名の女子が中心となってひそかに用意した色紙と花束を、放課後にクラス全員の前で渡した。

④「いいところみつけ」の取り組み

自分のいいところを書いてから、クラスメイトのいいところを探した。自分のいいところを書いた後に書かせた感想では、「自分のいいところを書くのは違和感があって気持ちが悪い」「いいところなんかない」という否定的な意見が多かった。クラスメイトのいいところみつけを始めたところ、異性の生徒の苗字が漢字で書けない生徒もいたが、お互いのことを意識して見るようになったことで、クラスの生徒同士が仲良くなれたような印象を受けた。その日その日に感じたことを書くので、実技教科でのことや体育の授業中の声をかけた内容など細かなところに気づけたように感じた。

全員のいいところを一覧表にして全員に配付したところ、用紙を食い入るように見つめ、しばらく静かな時間が続いた。その後、少しずつ会話が始まったが、お互いのいいところを確認しあうような様子であった。その後、振り返りのワークシートを配付した。

「クラスメイトが書いてくれた自分のいいところを見てどう思いましたか？」という質問に対して「自分にはあんまりいいところはないと思っていたけど、いっぱい書いてくれてとてもうれしかった」など、自身が気づいていないことをほめられたことに対する驚きと喜びが多く見られた。ほかの生徒と比較していいところの数が少なかった生徒も「案外少なかったから自分なりに増やしたい」と前向きなコメントを寄せており、「そのイメージを保ちたい」や「もっと頑張りたい」など、今後への意欲を感じさせるコメントも多かった。

また、「『いいところみつけ』をした感想を教えてください」という欄には、「考えてみるといっぱいあった」「限りなくくらいにある。一人一人にいろんな個性がある」などのほかに、「一日の終わりにいいところを思い出して紙に書くと人に対してのいやな気持ちが消えて、いい気持ちで帰ることができた」「いいところを見つつけようとすると同時にいっぱいしゃべることができて、楽しく取り組めた」などクラスメイトとの関わりに変化があったことに気づく感想もあった。

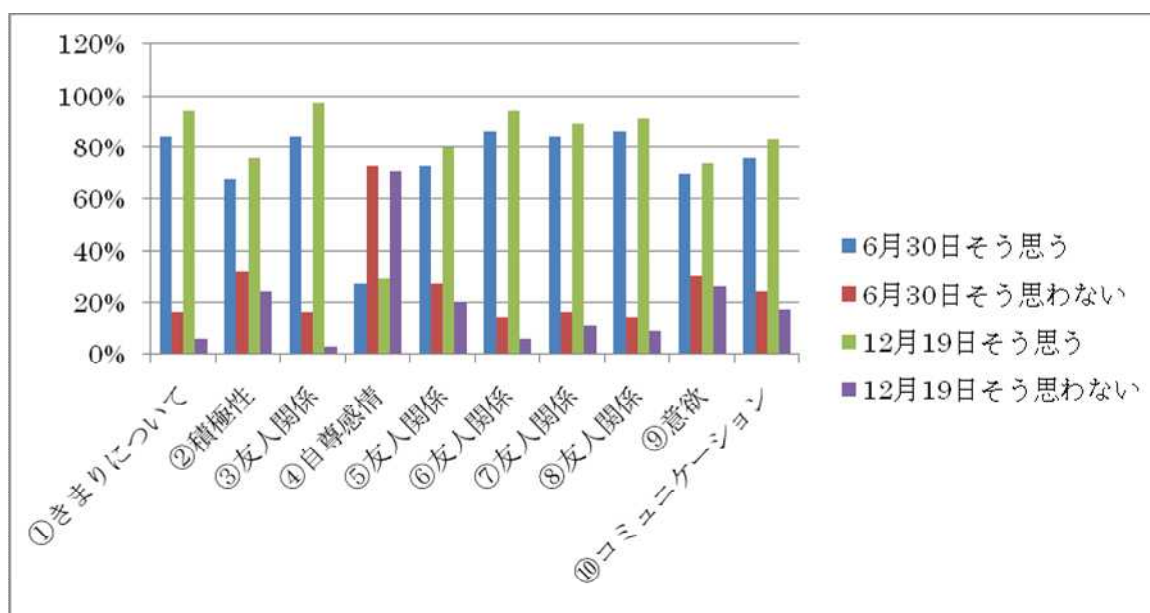
その後、「ありがとう上手に」の話を全体に読み聞かせ、プリントでも配付をして感想を書かせたところ、「ありがとうをもっといっぱい言いたい」「ありがとうをちゃんと伝えることは素晴らしいことだと思います。日頃当然のように使っている物などに感謝の気持ちをもって使うことなんてなかなかできないし、人に言うなんて恥ずかしくて余計に言えないなと思いました。これからは何事にも当たり前と思わず、ありがとうという感謝の気持ちを持って生きていきたいなと思います。」という感想もあり、中には「ありがとうという言葉を忘れかけていた私にこの話をしてくれた先生、ありがとう。そして、いいところをたくさん書いてくれたクラスのみんな、ありがとう。」など、今置かれた状況に感謝することができた生徒もいた。

男子のA、女子のdは欠席していたが、B、C、D、a、b、cの生徒は静かに話を聞き、ほかの生徒と同じように「ありがたいは大事なんだと思った」「これから積極的に言っていきたい」などと感想を書いていた。

2. 実践の考察

研究部会で決めた10項目について、6月30日と12月19日にアンケートを実施し比較した。12月のアンケートは、「いいところみつけ」と「ありがとう上手に」の取り組みの後に実施した。

◆「ふり返し」のアンケート結果について



ほとんどの項目について、「そう思う」が増えている。特に友人関係のところで伸びが見られた。

アンケートでは自尊感情についての項目「自分のことが好きである」は「そう思う」の数が増えなかった。そこで、「そう思わない」を選択した生徒に直接話を聞いてみたところ、「今の自分には満足していない。もっと理想的な姿があるから」「現状に満足したくない」という要求水準の高い生徒がいることがわかった。個別に聞いてみて、生徒たちの価値観に違いがあることがわかった。また友人関係の項目についても「自分を頼りにしてくれる友人がいる」という項目について「頼られることがいいこととは思わない」という意見を持っている生徒もいた。

日頃から思春期の生徒たちの想定外の言動に驚かされることは多いが、今回も自分自身の思い込みに気づかされることになった。

上記のようなことから、「自分のことが好きではない」と言う生徒がすべて自尊感情が低いとは言いきれない場合もあり、自尊感情が高いがゆえに要求水準が高く、現状の自分に満足できない生徒もいるので、気になる生徒については個別面談が必要なのではないかと考える。

3. 今後の課題

12月の学級活動の時間に、海外にいる転出した女子生徒にクリスマスカードを書かせた。ほとんどの生徒がカードを完成させることができ、人のために何かできることがあれば取り組みたいという気持ちが、以前より強くなったように感じられた。女子生徒からお礼のメールが届いていたことをクラスに伝え、うれしそうな顔をしている生徒が多い。「いいところみつけ」をしてから「うざい」「黙れ」「消えろ」などの否定的な言葉を聞く機会が格段に少なくなったことも成果として挙げられる。

また、孤立しやすく感じられた生徒たちにも変化が見られ、特に男子のBやD、女子のbとcは他の生徒がいいところを認めてくれたことを喜び、他者に対して配慮のある言動が以前より多くとれるようになった。

しかし、これから3学期を迎え、3年生に向かっていく中で進路について考える時間が増え、「テストの点数」や「教科の評価」を、「自分の価値」に置き換えてしまうのではないかと懸念される。また、学級全体で取り組む行事がほとんどないので、他者との協力で達成感を得られる経験をさせてやれる機会が少なくなる時期でもある。せっかく「ありがとう上手に」で感じた気持ちや、「いいところみつけ」で見つけたことが見失われ、自分自身のいいところもわからなくなってしまう生徒も出てくるのではないかと予想されるので、今後継続して指導していきたい。また、クラスという集団に語りかけ、お互いに助け合い、高めあえる集団を作っていければと考えている。生徒に対し、「ありがとう」と言う姿勢を持ち続けることで、コミュニケーションをとる機会を積極的に増やし、前を向く生徒を育てていきたいと考えている。

(6) 実践例6 (中学校3年)

1. 実践の概要

本学級の生徒は、明るく活発な生徒が多い。行事の際には一致団結し、まとまりのある活動を行うことができる。しかし、他者との関わりにおいて言葉で上手く表現できず自分の感情が暴力となって現れる生徒や、学校になじめず学習の遅れから非行傾向にある生徒もいる。このような生徒は人間関係を築きにくく、学校内の友人との距離を縮めることができていない。例えば、Aはこだわりが強く信念を持って行動するが周りからはわがままととらえられる傾向にあり、対人関係でトラブルを抱える。また、思春期ならではの気持ちの不安定さを抱える生徒も多い。

そこで、生徒の実態を客観的に把握するため、7月に第1回目の「アンケート」を行ったところ、規範意識の高い生徒が多い一方で自尊感情が低い生徒が多いことが判明した。しかし、自分自身のことを主観的に見て好きだとは思えないが、友人との関わりの中では悩んでいる時に助けてくれる友人がおり、自分の得意なことを友人が知ってくれていると実感している生徒は比較的多かった。この結果を受けて客観的なアプローチから主観的に自分自身のことが好きだと思えるよう、他者との関わりを通して自尊感情を形成させようと考えた。

2. 実践の考察

1学期末に行ったアンケートをもとに自尊感情を他者との関わりの中で形成するこ

とを目的とした。2学期の行事ごとにねらいを定め、行事ごとにふり返りを行った。また、研究部会で発案した「いいところみつけ」を作成し、客観的な目線をもとに自分自身を見つめなおす授業を行った。そして、2学期末に再度「アンケート」を行い、自尊感情が高まったかどうかを1学期と比較した。

① 体育大会での取り組み

(ア)ねらい

組体操を通して他者との積極的な関わりを持ち、一人ではできないことをやり遂げる達成感を他者と共有する。自分の役割を自覚し周りの役に立っていることを実感させることをねらいとした。

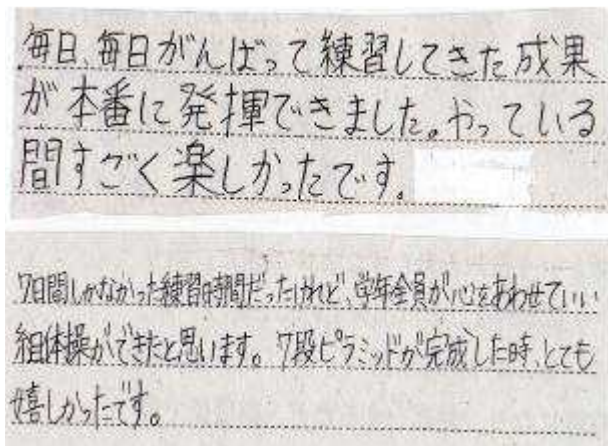
(イ)生徒の感想

組体操について

- ・今まで練習で何回も失敗して、本番が心配だったけど自分なりに完璧な演技ができたと思った。女子の7段ピラミッドも完成できてよかった。
- ・組体操では土台と中間の両方をした。学年で一つのことを一緒にできたのでよかったと思う。

体育大会全体について

- ・結果、最下位だったけど、クラスは前より団結したと思います。なので、みんなで頑張ったかいがありました。



(体育大会アンケート)

(ウ)取り組みの考察

男女とも体育大会を通して、努力したことに対する達成感が得られたようだ。対人関係でトラブルを抱えていたAは「最後の体育大会」と気持ちが高まり練習も積極的に取り組むことができた。大きな体を活かして土台として声を掛け合いながら頑張っており、ピラミッドが崩れかけると「俺の背中に乗れ。」と言い、ピラミッド完成のために自分の力を最大限出すことができた。わがままな所は残るが、周りの生徒もAのこだわりを理解し、少しずつ協調性が現れてきている。

① 合唱コンクールでの取り組み

(ア)ねらい

クラス合唱は誰か一人が欠けても完成しない。歌うことが得意、不得意に関係なく協力して活動をする事、各パート内でお互いをサポートし合うこと、そして、自分が学級の一員だという意識を育てることをねらいとした。

(イ)生徒の感想

- ・合唱コンクールで最優秀賞をとることができて嬉しかった。今までで1番頑張ったから、その成果を出すことができて良かったです。
- ・クラス全員が一つになって最高の合唱をすることができた。
- ・みんなで練習して頑張ってきたので、アルカニックにいられて嬉しいです。



(ウ)取り組みの考察

合唱コンクールでは集団として意欲的に取り組むことができた。普段は控えめな生徒も大きな口を開けて歌い、行事を通して生徒の新しい一面に気付くことができたのは教師にとって大きな発見であった。生徒の感想からも達成感や級友との一体感を感じることができたことが伺える。

アルカニックホールリハーサル

③「いいところみつけ」(特別活動3時間)

(ア)ねらい

自分自身の「いいところ」や「他者から感謝されているところ」に気づくこと、また、人から見て自分はどう思われているか(他者→自分)だけではなく、学級内の友人が周りから見てどう思われているか(他者→他者)を知る、ということもポイントにした。

(イ)展開

学習内容	生徒の活動	指導上の留意点
・「いいところみつけ」の説明を聞く。	・ 友達のいいところやありがとうの気持ちを伝える、という主旨を理解し、カードを記入する。	・ 誰からももらえない生徒が出ないよう、必ず自分の班のメンバーにはカードを書くように指示をする。
・ 一週間かけて「いいところみつけ」のカードを作成する。	・ 毎日、カードを記入していく。	・ 生徒の負担にならないよう短時間で記入できる時間を設ける。(終学活など)
・ 「いいところみつけ」の交換をする。 ・ ふり返りを行う (第2回アンケートの実施)	・ 自分が書いてもらったカードを読み、また、人が人へ書いたカードも読む。	・ 内面の部分がよく分かる1枚を抽出してプリントを作成する。

取り組みの様子

- ・ 男女ともカードを配布するとすぐに記入に取りかかることができた。
- ・ 男子から女子へは照れくさいようであるが、女子から男子へは比較的書きやすい様子だった。

- ・何枚も書く生徒もあり、男女ともに意欲的に取り組むことができた。

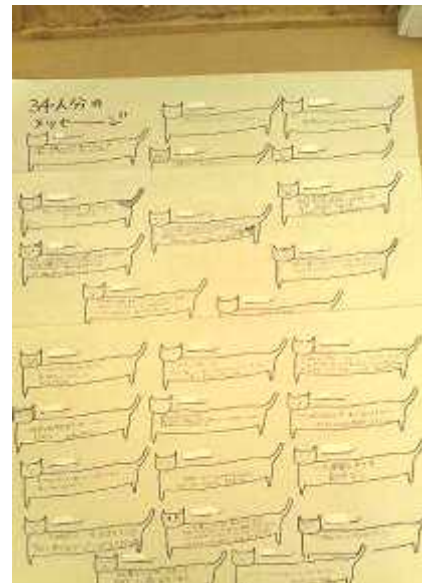
(ウ)生徒の感想

自分の「いいところ」や「ありがとう」を見て

- ・すごく嬉しかったです。こう思ってくれていたのだとびっくりしたこともあったけど感動しました。
- ・自分が相手に「ありがとう」と思わせていても自分はそれに気づいていないことがあった。
- ・とても良い気持ちになりました。でも恥ずかしかったです。

友人の書いた他の人の「いいところ」を見て

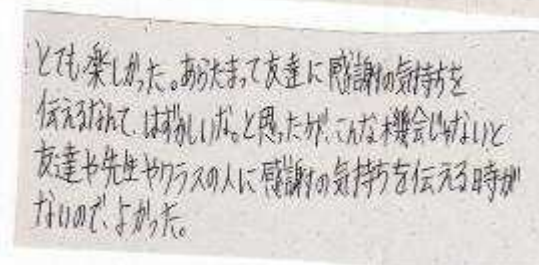
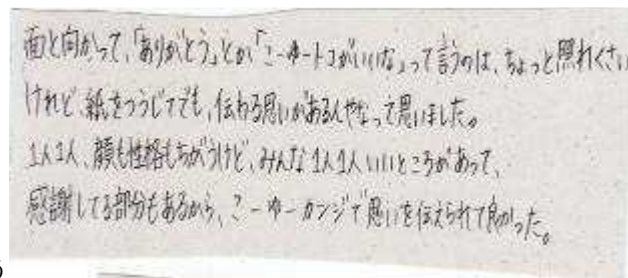
- ・みんなちゃんと友達のことをよく見ているのだな、と思った。
- ・この人ってこういう所があったのだ、こんなに愛されてるのだ、とわかっておもしろかったです。



(一人一つずつ載せたプリント)

この活動をふり返って

- ・言葉にはしにくい「ありがとう」や「いいところ」が相手に伝わっていいなと思った。
- ・みんながそれぞれに「ありがとう」という気持ちを持って生活をしていることに改めて気づいた。これからも、こういう気持ちを持って行動して欲しいし、自分もそうしたいと思う。
- ・「ありがとう」の紙をもらって嬉しかったし、自分のことが以前より好きになりました。



(ふり返りワークシート)

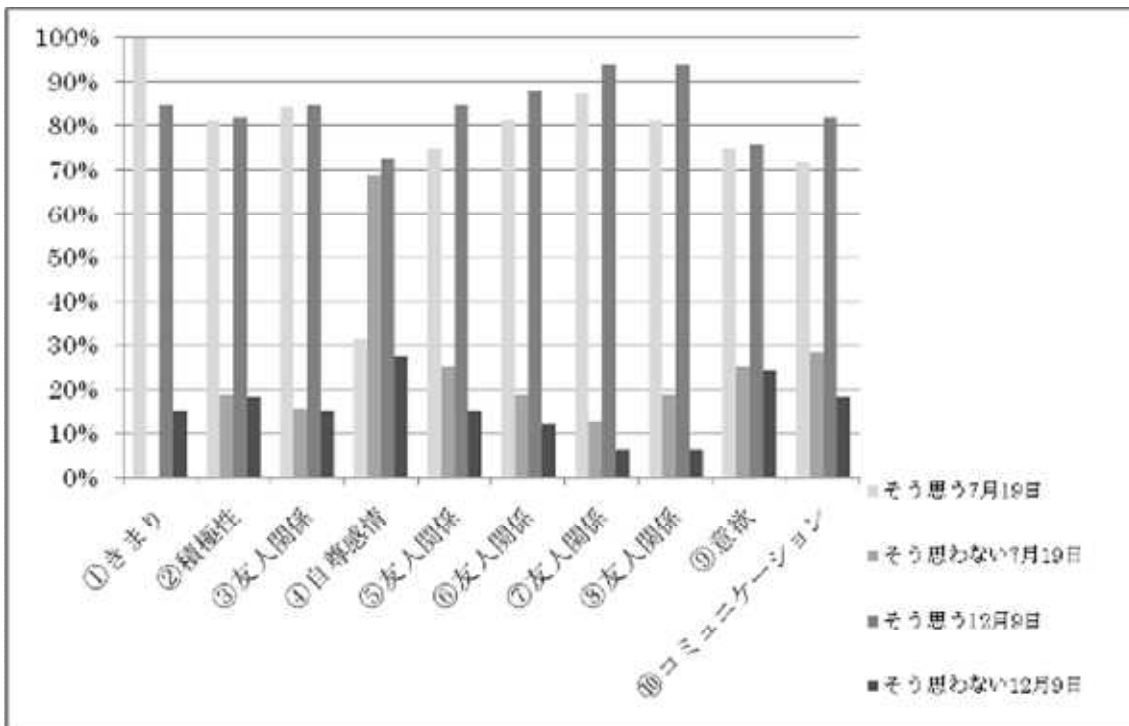
(エ)授業の考察

生徒は友人から「自分のいいところ」や「ありがとう」の気持ちを伝えてもらい、今まで自分でも気づくことのなかった「自分のいいところ」に気づくことができた。自分宛てにカードを書いてもらえるのか、という不安を持つ生徒もいるので班のメンバーには必ず書くなどの教師側からのルール提示も必要だろう。カードを受け取ると気恥かしいと感じる生徒も多いが、大半の生徒が書いてもらえて「嬉しい」と感じていた。Aも抵抗感を表すのかと予想していたが友人に多くのカードを書くことができた。またAに対してのカードも多くあり、教師の把握していない人間関係を知る収穫になった。

3. 今後の課題

これらの実践を終えて第2回目の「アンケート」を行ったところ、項目④「自分のことが好きである」について「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」と答えた生徒が全体で14名増加した。「どちらかと言えばそう思わない」「思わない」が12名減少した。2回目のアンケートを「いいところみつけ」実践の直後に行っていることから、「いいところみつけ」で客観的に自分自身を評価してもらうことにより「嬉しい」と感じたことが主観的に「自分のことが好き」だという自尊感情を育てるのに一定の効果を表していると思われる。項目⑦「自分の得意なことや好きなことを友人は知ってくれている」について「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」が3名増加し、項目⑧「友人の得意なことや好きなことを知っていると思う」について「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」が5名増加した。2学期の行事でねらいを提示することにより、より意識して他者と関わり他者理解を深めることができた結果だと思われる。そして、「いいところみつけ」で改めて教師が気づく人間関係も存在したことから、生徒間の相互理解が実践を通して深まっていったと考えられる。

今後の課題として、これらの実践への評価を数値化し、実践と結果との相関関係をさらに調査する必要があるだろう。また、継続的に「いいところ」や「ありがとう」を他者に伝える機会を設け、クラスを基盤とするよりよい人間関係を築く手がかりとしたい。



実態把握のアンケート

4 研究のまとめ

本年度、学校において生活の基盤となる学級に焦点を当て、学級がどう変容したか、子どもたちの個々のつながりはどう変わったかについて研究した。また、変容を客観的に捉え、実践前と実践後や他校との比較がしやすいように、アンケートを作成し、実施した。そして、「自尊感情が低い」という1回目のアンケートの結果をふまえ、「いいところみつけ」や、学級の実態に合わせた実践を行った。

その結果、子どもたち自身が友だちの良いところに気づき、友だちに親しみが持て、学級の雰囲気明るくなったという成果があった。同じ学級であっても、教師が何も働きかけなければ、子どもたちは友だちの良いところを意識することが少ないのだろう。また、今まで一人でいることが多かった子にすすんで声をかけ、友だちを気遣う面も見られた。それは、「いいところみつけ」等により、仲間意識が強くなったからではないかと考える。

では、自尊感情についてはどうか。学級が自分を認めてもらえる場所であることを実感し、自信が持て、自尊感情が高まった。一方で、向上心が強く今の自分に満足していない子は自尊感情が低いままである。このことから、アンケートの結果を数値で捉えるだけではなく、個人の思いを知るために個別面談が必要ではないだろうか。また、「自分のことが好きである」だけが自尊感情をはかる問いであるのかということも再考する必要があるだろう。

今後も、継続して学級を基盤とした人間関係づくりに取り組み、活動のあとには必ず活動だけではなく、自分の変容についても振り返ることによって、自分のよさに気づかせたい。そのためには、日常の中で、教師がすすんで子どもたちをほめたり、子どもたちに「ありがとう」と言葉で感謝の気持ちを伝えたりすることも大切である。教師と子ども、子ども同士の信頼関係を深め、学級が「安心していられる場所」であり、「自分の思いを表現できる場所」であると子どもたち自身が実感できるためにどのような取り組みが有効か、さらに研究していくのが課題である。

5 おわりに

『平成23年度 学力・生活実態調査報告』によると、「学校が好き」と感じている子どもたちほど学力が高いという結果が出ている。学校が好きな要因として、授業の理解度も挙げられるが、最も影響の大きかった要因は学級の雰囲気であるという。つまり、学級の雰囲気が良いと感じている子ほど学校が好きであり、学力も高いということである。学力向上にも大きな影響を与える学級における人間関係づくりについて、今後も教育相談の立場から研究を深めていきたい。

【参考文献】

- 『エンカウンターで不登校対応が変わる』片野智治、住本克彦、川端久詩、山下みどり 編
図書文化社 2010年
- 『社会性を育てるスキル教育 35時間』清水井一 編 図書文化社 2006年
- 『月刊学校教育相談 12月号』ほんの森出版 2011年
- 『平成23年度 指導の重点』兵庫県教育委員会
- 『平成23年度 学力・生活実態調査報告』尼崎市教育委員会

学校情報セキュリティに関する研修モデルカリキュラム開発

－研修モデルの開発と評価－

指導主事	大 濱 洋 治
研 究 員	野 村 重 義（塚 口 中）
〃	片 山 雅 之（若 葉 小）
〃	兒 玉 崇 （園 田 小）
〃	山 本 宣 忠（小 園 小）
〃	福 田 達 也（立花南小）
〃	貝 畑 健 太（武庫東小）

【内容の要約】

昨年度、外部委託により実施した尼崎市小・中学校の情報セキュリティ実態調査結果をふまえ、教員の情報セキュリティ意識を高めるとともに、組織としても個人情報等の重要な情報を守る確かな取り組みができるよう、主に各校の情報教育担当者がリーダーとなって取り組める『学校情報セキュリティ研修モデルカリキュラム』を開発する。

さらに、開発にあたっては、情報通信分野の企業の協力を得ながら、外部より、コーディネーター及び講師を招聘し、学校に合った効果的な研修が実施可能となる研修モデルカリキュラムにしていく。

キーワード：情報セキュリティ 校内研修 個人情報 調査アンケート 研修モデル
研修モデル評価 情報セキュリティクイズ 情報教育担当者

1	はじめに	125
2	研究の概要	125
3	研修モデルの開発と実践による検証	128
4	学校情報セキュリティ研修モデルカリキュラムの提案	143
5	『セルフチェック de セキュリティアップ』の開発	146
6	おわりに	147

1 はじめに

近年、情報関連機器及び情報通信ネットワークの急速な進展により、情報を扱う社会の様子は随分変化してきた。日本の教育の分野における情報化は諸外国のハード面の整備率等を見ても分かるように、遅れていると言っても過言ではないが、そのような中でも、情報を保存し持ち運べる記憶媒体、とりわけUSBメモリに代表されるようなコンパクトなフラッシュメモリ等は、大容量化とともに、誰もが手軽に購入できる価格となったことで、多くの教職員も私有のものを私用に校務用にと便利に利用している現状がある。しかし、一方で、教職員による個人情報情報を保存したUSBメモリの紛失及び盗難の事故が本市でも相次ぎ発生している。手軽であるが故に起こってしまう事故であり、これは、教職員の情報管理の甘さを表していると言える。

そこで、学校情報セキュリティを高めるため、昨年度、外部委託による本市全小・中学校を対象に学校としての情報セキュリティに関する実態を調査し、その結果をふまえて、各校の教頭及び情報教育担当者を対象に情報セキュリティ研修を実施することで、教職員の情報セキュリティを高める必要性と、本市では、特にどの部分について取り組まなければならないかを伝えた。

その上で今年度は、引き続き本市の実態を踏まえ、教職員の情報セキュリティ意識を高めるとともに、組織としても個人情報等の重要な情報を守る確かな取り組みができるよう、主に各校の情報教育担当者がリーダーとなって取り組める『学校情報セキュリティ研修モデルカリキュラム』を開発することが急務であると考えた。

そして、この研修モデルカリキュラムをよりよいものにしていくため、情報通信分野の企業の協力を得ながら、外部よりコーディネーター及び講師を招聘することで研究体制を強化し、学校に合った効果的な研修が実施可能となるよう開発をすすめる。

2 研究の概要

(1) 研究テーマ

学校情報セキュリティに関する研修モデルカリキュラム開発

(2) サブテーマ

研修モデルの開発と評価

(3) テーマ・サブテーマ設定の理由

昨年度、全小・中学校を対象に実施した、学校としての情報セキュリティに関する実態調査の結果、「機器のウイルスチェック」、「セキュリティポリシーの遵守」、「ソフトウェアの定期更新」、「情報資産の持ち出し」、「離席時の対応」について、本市では特に課題が見られた。(表1・表2)

[表1：平成22年度情報セキュリティ実態調査結果]

チェック項目	評価平均	チェック項目	評価平均
1 パスワードの管理	2.67	6 情報資産の持ち出し	2.03
2 ソフトウェアの定期更新	2.00	7 離席時の対応	2.13
3 機器のウイルスチェック	1.30	8 パソコンの持ち出し	2.86
4 ソフトウェアの導入	2.59	9 AMA-NET規程の遵守	2.47
5 情報資産の保管	2.20	10 ポリシーの遵守	1.80

[表2：平成22年度情報セキュリティ実態調査における評価値]

評価基準 ※チェック項目1～9	評価基準 ※チェック項目10	評価値
全ての職員が出来ている	セキュリティポリシーがあり、それに基づいて運用が行われている	3
ほとんどの職員が出来ているが、一部で出来ていない職員もいる	セキュリティポリシーはあるが守られていない部分もある	2
一部の職員は出来ている	セキュリティポリシーはあるが守られていない	1
出来ていない・分からない	セキュリティポリシーが存在していない	0

これらの結果から、先に述べたように、各校の教頭及び情報教育担当者を対象に実施した情報セキュリティ研修では、図1に示す4つの項目を選択しその重要性について理解を図ったが、各校においては、全教職員に対してそれらがまだ十分伝えられていない現状がある。

管理職や情報教育担当者は本市の課題を理解したものの、それを伝えるための資料や研修教材が身近にないため、教職員の情報セキュリティについてのスキルや意識を向上させる取り組みには至っていない。

昨年度の情報セキュリティ研修で取り上げた課題

- ① パソコン及びUSBメモリ等の記録媒体のウイルスチェック
- ② 学校毎のセキュリティポリシーの共通理解と運用
- ③ 個人情報等のデータの持ち出し
- ④ 離席時におけるパソコンのセキュリティ

[図1：平成22年度情報セキュリティ研修 本市の課題]

物理的にどのようなセキュリティ強化の仕組みを作っても、情報を扱う人の意識が低ければ、どこからか情報は漏れてしまうことになる。情報漏洩における要因において、ヒューマンエラー（人為的ミス）が多くを占める現状から考えても、「教職員の情報セキュリティ意識を向上させることは重要な課題である」と位置づけることができる。

以上のことから、主に各校の情報教育担当者がリーダーとなって取り組める『学校情報セキュリティ研修モデルカリキュラム』を開発することが必要である。そして、学校組織としても個人情報等の重要な情報を守る確かな取り組みが行えるよう、研修モデルについては、実践と評価をすることにより、伝えやすく、学びやすく、研修効果のあるカリキュラム開発を目指したい。

(4) 研究の方法

1. 研修モデルの位置づけ

今年度は昨年度の実態調査の結果をもとに、どのような内容のセキュリティ研修が必要であるかを検討し、その中から、取り組みやすいもの、それぞれ研究部員の所属する学校において今必要なものを中心にモデル化する。

1つの研修モデルは、15分から30分程度の研修時間を目安にした内容量で作成する。これは、校内でリーダーとなる情報教育担当者等が準備しやすく、研修を受ける側にも負担が少ない、日々忙しい現場の状況を考慮したためである。実際には職員会議や校内研究会の前後等を活用することで、1回の内容は少ないが、年間で継続して実施できるというメリットがある。その上、プレゼンテーションソフトウェアを利用して作成した提示資料の内容量も少ないので、ソフトの扱いに少し慣れた人であれば、データを自分なりに修正しやすい。また、複数の研修モデルを組み合わせること

で60分や90分間の研修も設定でき、それぞれの学校の実情に合わせた研修が可能となる。

さらに、校内のリーダーが中心となって進める研修の時間だけではなく、個々のすき間時間で学べる環境も必要である。それにはWeb化された研修教材コンテンツとして「情報セキュリティクイズ」を位置づけ、個々に楽しみながらすき間時間に取り組むことができる研修モデルの開発をする。

2. 研修カリキュラム作成の流れ

- (1) 研修内容の検討（大学准教授によるコーディネート）
 - ・ 本市の情報セキュリティに関する課題によるもの
 - ・ 形態、場所、環境
- (2) 研修モデルに必要な資料の検討（大学准教授によるコーディネート）
 - ・ 提示資料（プレゼンテーションソフトウェアを利用したデジタル資料）
 - ・ 配布資料（研修時に利用するもの：基本的に提示資料の印刷物）
 - ・ 研修の流れ（研修リーダー用）
- (3) 研修モデル資料の作成及び修正（大学准教授による指導助言）
 - ・ 資料作成のための情報収集（協力企業からの情報提供：NTTドコモ関西、視察等）
 - ・ 本研究部員による意見交換
 - ・ 中学校教員による研修モデル資料評価
- (4) 評価及び調査アンケートの作成
 - ・ 研修モデル評価アンケート
 - ・ 実態調査、意識等変容調査
- (5) 実践による研修モデルの検証
 - ・ 研修実践
 - ・ 研修モデルの評価及び調査の実施（大学准教授による分析）
- (6) 研修モデル資料及び内容の修正
- (7) 研修モデルカリキュラム試案作成

3. 学校情報セキュリティクイズの開発

- (1) セキュリティクイズの位置づけ
- (2) プログラムの設計
- (3) 問題の収集（協力企業からの情報提供：NTTドコモ関西）
- (4) 問題データの作成

4. 研修モデルの評価の方法

研修モデルの評価については、次の3つの方法で取り組む。

【方法1】研究協力校1校において、作成した研修モデル資料のうち、研修の流れがわかるものを紙ベースで手元に持ってもらい、提示資料となるデジタルデータを自分でページをめくりながら5段階の評価シートに個々の評価を記入してもらう。

【方法2】研究協力校複数校において、教職員を対象に教職員研修を実施し、研修を受けた教職員への研修直後のアンケート調査により、作成した研修モデルにおける提示資料（デジタル資料）、配布資料、研修内容がわかり易かったか、よく理解できたか等について個々の評価を記入してもらう。

【方法3】研究協力校複数校において、研修直前と研修後1ヶ月程度経過時の個々の意識や実態を調査、比較することによって、理解の定着度や行動の違いについて明らかにするとともに、意識向上に効果的か等について評価する。

3 研修モデルの開発と実践による検証

(1) 実践事例 その1

研修テーマ 「こんなものも個人情報」

1. 研修の目的

本研修は、情報セキュリティの研修を行っていく中で、導入の研修として位置づけたものである。

個人情報と聞いて、どんなものが個人情報か正確に理解している人は少ないだろう。個人情報とは、「生存する個人に関する情報であって、当該情報に含まれる氏名・生年月日その他の記述等により特定の個人を認識できるもの」と個人情報の保護に関する法律第2条に記されている。これを研修で紹介し、個人情報の定義を知ることが1つ目の目的として設定した。

また、2つ目の目的は、学校で扱う個人情報を確認することである。学校のいろいろな場所に児童に関する個人情報がたくさんある。そんな個人情報を再確認し、どうやって守っていけばいいのか意識を高めることをねらいとしている。

2. 研修の内容

【研修の展開】

活 動	留意点
1.研修の課題を知る。	・研修の課題を提示し、今回の研修の流れを確認する。 【課題】 個人情報の定義を知る。 学校で扱う個人情報を確認する。
2.個人情報の定義について知る。	・個人情報の定義を提示し、個人情報の説明をする。
3.学校のそれぞれの場所（校長室、職員室、保健室、教室、事務室）にある個人情報について考え、交流する。	・それぞれの部屋にある個人情報について考え、考えたものをワークシートに記入する。 ・ワークシートに個人情報を記入した後、それぞれの部屋にあると思われる個人情報を提示し、交流をする。
4.他に学校にあると思われる個人情報を考え、交流する	・これまでに交流した以外で、他に個人情報があればワークシートに記入する。
5.まとめ	・まとめを提示し、研修のまとめをする。

この研修は、まず初めに個人情報の保護に関する法律と国語辞典に記されている個人情報の定義を提示し、個人情報の定義を理解する。そして次に学校にある個人情報について考え、紹介していくという流れになっている。

この研修では、実践的な演習を行う場面がない。そこで全体に提示する資料（スライド）と配布資料に違いを持たせる工夫をした。配付資料はワークシートとしての役割も持ち、学校にある個人情報について、自分の考えを書きこむことができる。そうすることでより活発な研修になるのではないかと考えた。

2 個人情報って何？

生存する個人に関する情報であつて、当該情報に含まれる氏名、生年月日その他の記述等により特定の個人を識別できるもの（他の情報と容易に照合することができ、それにより特定の個人を識別することができるもの）をいう。
（個人情報の保護に関する法律 第2条）

[図2：提示資料]

図2は、個人情報の定義を提示する時に使用した「個人情報の保護に関する法律」である。また、このスライドとは別に国語辞典に記されているものも紹介し、個人情報の定義を知ることができるようにした。

学校にある個人情報を確認する場面では、校長室、職員室、保健室、教室、事務室に分けて順番に確認していく。確認の仕方は、まず部屋の写真を大型スクリーンで提示し、ワークシートにその部屋にあると思われる個人情報を書き込む時間を取り、書いたことを発表する。その後、その部屋にあると考えられる代表的な個人情報をスライドで紹介するという流れである。図3図4は、校長室にある個人情報を紹介したときに提示したものと、配付資料の中にある個人情報を書き込むためのワークシートである。

校長室にある個人情報

- ・指導要録Ⅰ・Ⅱ（一覧表）
- ・健康診断簿
- ・除籍簿
- ・成績記録一覧表
- ・生活記録一覧表
- ・卒業生台帳
- ・学力調査結果関係書類
- ・学校諸経費引き落とし口座関係書類

[図3：提示資料]

校長室にある個人情報

[図4：配布資料(ワークシート部分)]

4 まとめ

(1) 個人情報とは・・・

- ・生存する個人に関する情報
- ・当該情報の記述等により個人が特定できる情報

(2) 学校にはたくさん個人情報がある。

↓

私たちは、このような個人情報を守る責任があります。情報機器が発達した今、個人情報を守るために、どのようなことをしていかなければならないか考えていきましょう。

[図5：提示資料]

図5は、研修のまとめとして2つの内容を提示したものである。

1つ目は、個人情報の定義についてのまとめである。定義の中でも特に大切だと思われること「生存する個人に関する情報、当該情報の記述等により個人が特定できる情報」を確認した。

2つ目は、学校の中にはたくさんの個人情報があり、これを守る責任があり、守るためにどのようなことをしなければならないのか考える必要があるということを確認した。

3. 研修モデルの評価

研修の直前と直後と研修の1ヶ月後にアンケートを実施した。結果は次の通りである。（表3、表4、表5）

[表3：研修実施直前アンケート集計結果] (回答数23人) 人(%)

	そう思う	少しそう思う	少しそう思わない	そう思わない
1. 個人情報の定義について確かめたことがありますか。	1 (4.3)	5 (21.7)	7 (30.4)	9 (39.1)
				(無回答1)

直 前	2. 校内にどんな個人情報があるか十分理解していますか。	6 (26.1)	16 (69.6)	1 (4.3)	0 (0.0)
	3. あなた自身の個人情報の取り扱い方は、安全であると思いますか。	3 (13.0)	14 (60.9)	5 (21.7)	1 (4.3)
	4. 学校にある個人情報を守るために、取り組みをしていますか。	5 (21.7)	16 (69.6)	2 (8.7)	0 (0.0)

[表 4：研修実施直後アンケート集計結果] (回答数 23 人) 人 (%)

		そう思う	少しそう思う	少しそう思わない	そう思わない
直 後	1. 今回の研修で配布した資料は分かりやすかったですか。	12 (52.2)	8 (34.8)	3 (13.0)	0 (0.0)
	2. 今回の研修で学校にどんな個人情報があるか認識することができましたか。	17 (73.9)	5 (21.7)	1 (4.3)	0 (0.0)
	3. 今回の研修で学校にどんな個人情報の定義について理解できましたか。	10 (43.5)	10 (43.5)	3 (13.0)	0 (0.0)
	4. 情報セキュリティに関するこのような校内研修は大切だと思いますか。	15 (65.2)	6 (26.1)	2 (8.7)	0 (0.0)

[表 5：研修実施 1 ヶ月後調査アンケート集計結果] (回答数 23 人) 人 (%)

		そう思う	少しそう思う	少しそう思わない	そう思わない
1 ヶ 月 後	1. 個人情報の定義について理解していますか。	6 (35.2)	11 (64.7)	0 (0.0)	0 (0.0)
	2. 校内にどんな個人情報があるか十分に理解していますか。	5 (29.4)	12 (70.5)	0 (0.0)	0 (0.0)
	3. あなた自身は以前より安全に個人情報を扱っていますか。	7 (41.1)	9 (52.9)	1 (5.8)	0 (0.0)
	4. 学校にある個人情報を守るために取り組みをしていますか。	4 (23.5)	13 (76.4)	0 (0.0)	0 (0.0)

- ・ 直前アンケートの項目 1 (表 3) と直後アンケートの項目 3 (表 4) を比較してみると、直後アンケートの項目 3 (表 4) で、そう思う・少しそう思うと答えた人数が 6 人から 20 人に増え、全体の 87% になったことから、本研修で個人情報の定義について理解することができたと考えられる。
- ・ 直後アンケートの項目 2 (表 4) から、そう思う・少しそう思うと答えた人数が 22 人と全体の 95.6% となっており、本研修で学校にある個人情報について再認識することができたと考えられる。
- ・ 直後アンケートの項目 4 (表 4) を見ると、今回行ったような情報セキュリティに関する校内研修が必要だと感じている人数は多いようである。
- ・ 1 ヶ月後アンケートの項目 1 (表 5) では、直後アンケートの項目 3 (表 4) に比べ、そう思うと答えた人数が減ってはいるが、1 ヶ月後でも概ね個人情報の定義について理解している人数は多いと言える。

4. 研修モデルによる教員研修の効果と考察

これらのアンケート結果から分かるように、個人情報の定義と学校にある個人情報について理解することができた人数が増えたことから、本研修モデルによる研修効果が認められる。

しかし、学校にある個人情報を紹介する時のスライドや提示の仕方については、もっと工夫する必要があると感じた。

(工夫の仕方)

- ・スライドに文字数が多いものがあったので、少なくする。
- ・読みやすい字体に変える。
- ・個人情報を提示する時に、具体例を1つずつクリックで表示できるようにする。

本研修モデルは、個人情報の定義を説明した後に、学校にある個人情報を交流し、紹介するだけの研修内容であったため、少し物足りない感じがした。そこで、個人情報を紹介した後に、個人情報を紛失してしまったらどうなるのかということや、個人情報を守るために教職員ができることなどを具体的に話し合うことで、さらに理解を深めることができるのではないかと考える。

また、直後アンケートの「個人情報を守るためのこれからの取組」についての記述には、「セキュリティをかける」「ロック（パスワード）をかける」や「USBメモリを分ける（個人情報とそれ以外など）」「個人情報を持ち出さないようにする」などの回答が複数あり、他の研修モデルの内容と一致するものも多いことから、本研修モデルに加えて、他の内容のものを一緒にすることで、研修内容につながりが出て、より効果的に本研修ができると感じた。

(2) 実践事例 その2

研修テーマ 「USBメモリの整理と管理 情報事故を防止するために」

1. 研修の目的

本研修の目的は、職員のUSBメモリに対する理解を深める、より安全に扱うための方法を身に付けることである。また、本事例の実施校においては、本研修モデルを校内セキュリティ研修の導入として位置付けている。

全国的に教職員の現状を見ると、個人情報の扱いについてのセキュリティ意識が高いとはいえ、これまでも何度も事故を繰り返しては市民の信用を失墜してきた。しかし、サービスの形態が他職と大きく異なり、家庭へ持ち帰る仕事が多いため、依然個人情報を保持している状態が続いている。そのため、事故を防ぐための方策を講じることが急務である。

本事例の実施校における本研修モデルの必要性については、次の2点が挙げられる。第一は「時期の適合性」であり、第二に「導入としての総論（抽象性）」である。

「時期の適合性」

本研修を行った頃、身近なところで情報に関する事故があった。よって、組織的に情報管理に関して綱紀を肅正する必要がある。また、情報事故が多いとされるのは年度初め、学期末、学年末であるが、ちょうどその時期とも重なり、職員に対し啓発しなければならなかった。

「導入としての総論（抽象性）」

本研修の内容は、USBメモリに関する総論的な内容であり、そこから多くの話題

へ派生させやすい展開となっている。この点を我々の構想である「15～30分単位の小研修の組み合わせ」という視点から有効に捉えていきたい。というのも今回の本題から逸れる多くの疑問は、それらを職員から抽出することで職員のニーズに変え得ることができ、従ってここから各論につなげることができる考える。例えば本事例実施校ではここから、ウイルスチェックや完全消去についての研修内容を次回に持ってきていたいと考えている。

2. 研修の内容

【研修の展開】

活 動	留 意 点
1.研修の課題を知る。	・研修の課題を提示し、今回の研修の流れを確認する。 「USB メモリについて詳しく知る。」 「USB メモリの整理と管理の仕方を考える。」
2.USB メモリについて知る。	・USB メモリについて基本的な知識を提示し、扱い方が理解できるようにする。
3.USB メモリの整理と管理について考え、共通理解を図る。	・管理情報区分によって USB メモリを整理することが安全管理につながるとともに、USB メモリの管理についても意識が高まるようにする。
4.クイズを考え、意見を交流する。	・クイズを提示し、交流をする。
5.まとめ	・まとめを提示し、研修のまとめをする。

本研修は、上の展開に基づき行った。大別するとUSBメモリに関する知識に関することと、USBメモリの管理に関することである。

USBメモリに関する知識を広げる内容には、名称、利点、欠点、媒介ウイルス、容量、自動再生について取り上げた。容量を述べる際に、フロッピーディスクやUSBメモリを分解し、中身を実物投影した。

USBメモリの管理に関する内容では、管理情報区分として、「職務個人情報用」「職務一般用」「私物」の3種に分けることを推奨した。そして、「職務個人情報用」は職場でも鍵のかかる金庫等に保管することを推奨した。

3. 研修モデルの評価

研修モデルを作成する過程において実施した「中学校教員による研修教材評価」では、次の改善点の指摘を受けた。

・提示資料は「黒字が目立って、読みづらい。」

2. 研修内容

- ・ USBメモリとは？
- ・ USBメモリの容量
- ・ USBメモリの使い方を考える
- ・ ウィルス手動検索
- ・ USBメモリの整理と管理
- ・ クイズ
- ・ 答え
- ・ まとめ 参考資料 情報セキュリティサイト（1）
- ・ 参考資料 情報セキュリティサイト（2）
- ・ 用語解説

[図6：提示資料]

6. USBメモリの整理と管理

- ・ USBメモリの管理
 - ①職務個人情報用USBメモリは、鍵のかかる金庫に保管する。
 - ②職務一般用USBメモリも、できるだけ鍵のかかる場所に普段は保管し、職場から持ち出さないように心がける。

[図7：提示資料]

「文字が多くてわかりにくい。」

- ・研修の終わりに行う三択「クイズ」は、「正答だけを示すのではなく、間違いの回答の解説も必要」

そこで、文字の色を変更したり、1枚の提示シートの内容を2枚のシートに分けて表し、1シート分の字数を減らすなどの工夫をした。また、イラストや写真などを用いて視覚にも訴えられるような表現も効果的な提示資料になると考える。

「クイズ」の回答の解説については、提示資料に表すのではなく、口頭でわかりやすく説明することにした。

○研修前の教職員の実態調査結果

[表6：研修実施直前のアンケート集計結果] (回答数33人) 人(%)

	アンケート項目	はい	いいえ	もっていない
直前	USBメモリを「個人情報用」と「その他の情報用」に区別していますか？	16(48.5)	16(48.5)	1(3.0)
	個人情報の入ったUSBメモリは校長室の金庫に保管するなど、安全な管理をしていますか？	6(18.2)	21(63.6)	6(18.2)

表6を見ると、項目1、項目2ともに「はい」が低いと言わざるを得ない。約半数が「個人情報用」のUSBメモリを持たず、更に半数以上がその個人情報を金庫等の安全な場所に保管していないという実態である。如何に個人情報の扱いに配慮が足りないかが分かる。

○研修実施直後のアンケート調査による研修モデル評価

[表7：研修実施直後のアンケート集計結果] (回答数33人) 人(%)

	アンケート項目	よく理解できた	理解できた	あまり理解できなかった	まったく理解できなかった
直後	今回の研修で提示した資料は分かりやすかったですか？	3(9.1)	22(66.7)	8(24.2)	0(0)
	USBメモリについて理解できましたか？	8(24.2)	20(60.6)	5(15.2)	0(0)
	USBメモリの整理と管理の方法が理解できましたか？	7(21.2)	20(60.6)	6(18.2)	0(0)

表7では「まったく理解できなかった」という回答はないものの、項目1の「あまり理解できなかった」は24.2%に上る。自由記述で「何を伝えたいのかがわかりにくいので、もっとポイントをしばった方がいいのでは。」というような記述が2件見られた。これは研修前段に見られる知識習得の内容に専門用語が多いからではなかろうかと思われる。

また、項目2や3で見られる「あまり理解できなかった」に回答した教職員をどう導くかが改善の課題である。

○研修前後の実態比較（研修前と研修実施1ヵ月後）

[表8：研修実施1ヵ月後調査アンケート集計結果] (回答数31人) 人(%)

	アンケート項目	はい	いいえ	持っていない
1ヶ月後	USBメモリを「個人情報用」と「その他の情報用」に区別していますか？	20(64.5)	9(29.0)	2(6.5)
	個人情報の入ったUSBメモリは校長室の金庫に保管するなど、安全な管理をしていますか？	11(35.4)	15(48.3)	5(16.1)

表8の「個人情報用」と「その他の情報用」との区別については、直前アンケー

ト（表6）と比較すると48.5%から64.5%と伸びている。安全な管理をしているかについても「はい」が21.2%から35.4%に伸びている。直前の調査結果と比べてみて教職員の行動が変容していることが分かる。よって本研修により確実に情報セキュリティ意識が向上していると考えられる。

しかし、結果自体に上昇が見られるものの項目2（表8）に見られるように、その数値は決して高いものとはいえない。

4. 研修モデルによる教員研修の効果と考察

研修効果が高いか低いかについて今回の資料のみで論じることにはできないが、本研修によって教職員に「意識の変容」と「行動の変容」があったことを認めることはできる。この点については本研修モデルカリキュラム開発の方向性から、1回の研修で高い研修効果を求めることを目的としていないことから、概ね良いと判断できるのではないだろうか。研修効果が時間の経過と共に薄れることは実証されているが、研修すること自体の意義は失われておらず、今後継続した取り組みの中でどのように行動変容が教職員に現れるのかを注視せねばならない。

さて、今後知りたいことについて、教職員からとったアンケートの自由記述を見てみると「ウイルスに感染したときの対策」「できるだけわかりやすい使いやすいパスワードつきUSBを教えてください」「USBメモリーの個人情報流出で大変なことを具体的に説明していく必要があります」「ファイルの消し方」というように多岐に渡り、本研修モデルが導入として、職員自ら課題を生起させるという役割を見事に担った結果となった。反面、受講者にとって疑問ばかりが先立ち中途半端な印象を与えてしまったという欠陥は否めない。

また、「これだけの研修なら、忙しい時に時間をとって研修しなくてもよいのではないかと思った」という記述に見られるように、教職員それぞれの持つ情報技術に差があり、そのことがそれぞれの疑問や課題に差を生じさせることとなった。そして、「教職員それぞれの技能別に研修を行えないのか」という問題点を我々に与える結果となったが、研修リーダーとなる各校の情報教育担当者が取り組みやすい研修モデルでなければならないことを考えると、技能の高い教職員には、研修リーダーの補助としての役割を求めてもよいのではないだろうか。

（3） 実践事例 その3

研修テーマ 「ウイルスチェックをしよう」

1. 研修の目的

学校では、授業支援だけでなく、校務処理上でもICT機器を使用する機会が多くなっている。校務処理上扱う情報の中には、成績や住所など児童の個人情報に当たるものが多くあるため、それらの情報の管理には十分な注意を払わなければならない。本研修モデルは、データの保存・管理の面でよく問題とされる「コンピュータウイルス」をテーマとして取り上げている。ICT機器に不慣れな人は、ウイルス感染に気付かないでいることや、感染した場合の対処の仕方を知らないために被害を広げてしまうことが予想される。そこで、本研修モデルの第一の目的として、「個人でウイルスチェックができるようになること」を設定した。

開発にあたって、パーソナルコンピュータ（以下PC）の操作に不慣れな人にも理解できるよう、場面や段階を分け、順序立てて組み立てることを意識した。また、演習を取り入れることでウイルスチェックの手順を体験的に理解できるようにした。本実践では、研修を通して、USBメモリの扱い方やコンピュータウイルスの感染防止について意識を高められるようにすることを心がけた。

2. 研修の内容

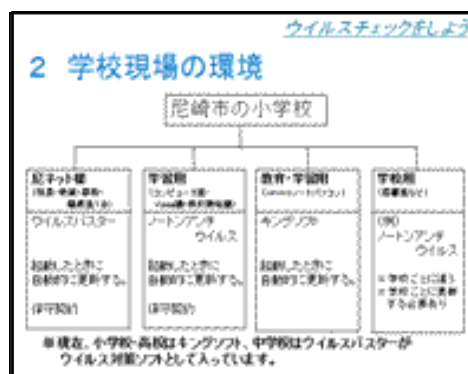
【研修の展開】

活 動	指導上の留意点・支援
1 課題を確認する。	○3つの課題を提示する。 ・学校にあるPCのウイルス対策ソフトの現状を知る。 ・自分の持っているUSBメモリなど記憶媒体のウイルスチェックができるようになる。 ・ウイルスが見つかったときの対処の仕方を知る。
2 学校の環境について確認する。	○自校の環境に照らし合わせて確認する。
3 USBメモリのウイルスチェックの仕方を確認する。 【演習】USBメモリのウイルスチェックをする。	○提示資料（スライド）で確認する。 ○ノートPCで個人で使用しているUSBメモリのウイルスチェックをする。
4 「もしウイルスが見つかったとき」の対処の仕方を確認する。	○自校の環境に照らし合わせて確認する。 ○全員ができなければならない最低限の対処の段階までを確認する。
5 まとめ	○本研修の課題・内容を振り返りながら確認する。
6 クイズ	○三択問題を提示する。

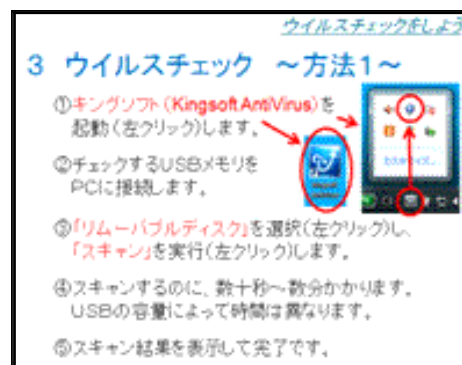
本研修ではまず初めに「学校にあるPCのウイルス対策ソフトの現状を知る」、「自分の持っているUSBメモリなど記憶媒体のウイルスチェックができるようになる」、「ウイルスが見つかったときの対処の仕方を知る」の3つの課題を確認する。同時に、研修後3つの課題にそれぞれが答えることができるようになることを目標としていることを伝える。

学校で使用されているPCの管理形態は様々で、PCごとに入っているウイルス対策ソフトも異なっている。ウイルス対策を意識する上で、学校にあるPCがそれぞれどのように管理されており、どのようなウイルス対策ソフトが導入されているのかを把握することが重要になる。学校のICT環境（ウイルス対策ソフト）については、イメージとして捉えやすくするため、図をもとに説明した。自校の環境に照らし合わせて具体的に確認することで理解しやすくなると考えた。ここでは、各PCに入っているウイルス対策ソフトが異なっていることを確認する。

そして、USBメモリのウイルスチェック



〔図8：提示資料〕

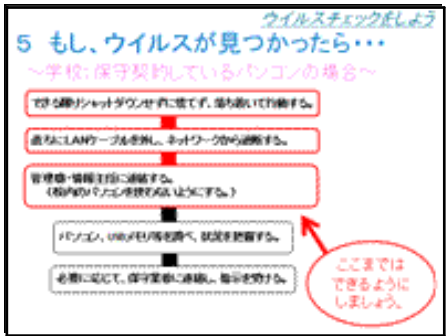


〔図9：提示資料〕

を演習として行った。本研修を行なった職員室のノートPCに入っている「ウイルス対策ソフト」のウイルスチェックの方法を2通り取り上げた。ウイルスチェックの方法を提示資料で確認した後、実際にウイルスチェックするという流れである。手順の説明だけで終わることがないよう、「ウイルス対策ソフト」の操作画面を提示資料で見せ、視覚的に理解できるように工夫した。予備知識として「ウイルスの自動感知について」「他のウイルス対策ソフトでのウイルスチェックの方法」、基礎知識として「コンピュータにウイルス対策ソフトをインストールすることについて」も取り上げた。



〔図10：提示資料〕



〔図11：提示資料〕

後半は、「もし、ウイルスが見つかったら…」という視点で「ウイルスが見つかったときの対処の仕方」を確認する。PC操作が不慣れな人にとっては、ウイルスの感染に気付かないでいることや気付いても対処が遅れることが予想される。コンピュータウイルスの感染では、対処が遅くなると被害が大きくなったり、被害を他に広げてしまう恐れがあるため、早急の対処が必要になる。ここでは、業者と保守契約しているPC、学校管理のPC、USBメモリ、個人所有のPCに分け、ウイルスが見つかったときにどのように行動すればよいかについて図で説明する。ウイルスの駆除の仕方を具体的に説明することよりも学校として全教職員が共通理解しておかなければならない行動指針を示した。

最後には、3つの課題に沿ったまとめと三択問題で本研修の内容を振り返った。

3. 研修モデルの評価

研修前と研修後と研修1ヶ月後にアンケートを実施した。結果は次の通りである。

〔表9：研修実施直前アンケート集計結果〕 (回答数27人) 人(%)

アンケート項目	はい	いいえ	持っていない
PC(パソコン)やUSBメモリ等のウイルスチェックを定期的に行っていますか。	12(44.4)	13(48.1)	2(7.4)
PCやUSBメモリなどでコンピュータウイルスが見つかったとき、どのように行動・対処すればよいかを知っていますか。	5(18.5)	22(81.4)	

〔表10：研修実施直後アンケート集計結果〕 (回答数27人) 人(%)

アンケート項目	そう思う	ややそう思う	少し思わない	そう思わない
今回の研修で提示した資料は分かりやすかったですか。	22(81.4)	5(18.5)	0	0
USBメモリやファイルデータのウイルスチェックの仕方について、理解できましたか。	23(85.1)	4(14.8)	0	0

コンピュータウイルスが見つかったときの 対処の仕方について、理解できましたか。	21(77.7)	6(22.2)	0	0
--	----------	---------	---	---

[表11：研修実施1ヶ月後アンケート集計結果] (回答数27人) 人(%)

アンケート項目	はい	1回以上はし た	いいえ	持っていない
12月に行った研修後、定期的にPC(パソコン)やUSBメモリなどのウイルスチェックを行なっていますか。	4(14.8)	17(62.9)	5(18.5)	1(3.7)
PCやUSBメモリなどでコンピュータウイルスが見つかったとき、どのように行動・対処すれば良いかを覚えていますか。	24(88.8)		3(11.1)	

自由感想としては、次のようなことがあげられる。○がプラス評価、●がマイナス評価である。

- とてもシンプルな説明でわかりやすかった。実際にPC操作できたことは良かった。
- これまでウイルスチェックの仕方や対処の仕方がわからなかったもので、わかってよかった。
- USBメモリを長い間使っているが、やり方がわからずチェックしていなかったので、これから定期的にチェックをしていきたいと思います。
- インターネットにつないでいないPCにもウイルス対策ソフトを入れることを初めて知りました。
- ウイルスチェックのマニュアルが欲しいです。
- 箇条書きをもう少し簡潔に、図表が小さすぎる。少し文字が多い。

直前アンケート結果(表9)から、PCやUSBメモリを使っていながらもウイルスチェックを定期的に行っているのは44.4%に止まっている。また、ウイルスが見つかった時の行動・対処方法を知っているのは18.5%しかいなかった。

直後アンケート結果(表10)では、資料のわかりやすさ、研修内容の理解ともに「そう思う」「ややそう思う」を合わせて100%の高い評価であった。しかし、感想の中に「マニュアルが欲しい」という意見があった。本研修では配付資料なしで実践したが、研修後に再確認するためにもやはり必要であったと考える。また「箇条書きをもう少し簡潔に、図表が小さすぎる」、「少し文字が小さい」など提示資料の改善点も挙げられた。

実施1ヶ月後アンケート結果(表11)では、「ウイルスチェックを定期的に行っている」「一度はウイルスチェックをした」という割合が合わせて77.7%と直前アンケート結果(表9)の44.4%より高くなっている。また、「PCやUSBメモリなどでウイルスが見つかったときの行動・対処を覚えていますか」という問いに対して、「はい」と答えた割合が88.8%と直前アンケート結果(表9)の18.5%より高くなっている。

4. 研修モデルによる教員研修の効果と考察

本研修モデルを開発した本人が研修を行ったこともあり、研修自体はスムーズに行うことができた。研修直後アンケート結果(表10)から「ウイルスチェックの仕方」「ウイルス感染時の行動・対処」についての理解は高くなったと考える。ま

た、研修直前アンケート結果（表 9）と 1 ヶ月後アンケート結果（表 11）を比較してみると、これまでウイルスチェックをしたことがなかった人も含め、研修後にウイルスチェックを個人で行った人の割合が増えていることがわかる。ウイルスが見つかった時の行動・対処についても覚えている人の割合が多い。意識が高まるという意味では、研修の効果はあったといえる。研修のテーマを絞り、課題を明確にした点、演習を取り入れた点が高い評価を得た要因だと考える。すでに知識があった人には再確認ができた研修に、意識はしていたがやり方は知らなかった人、全く知らなかった人には新しく確認する研修として役割を果たせた。

しかし、定期的にウイルスチェックを行うようになった人は少なく、ウイルスが見つかった時の行動・対処についてはアンケート上での回答ということもあり、定着しているとまではいえない。研修中には、資料や操作マニュアルを配布していなかったため、記憶の中での理解に止まっている。いつでも個人で再確認できるように資料やマニュアルを配布できるようにしておく必要があった。また、ICT機器に苦手意識が高い人にとっては、少し情報量が多すぎる提示資料になっていた。専門用語が多い説明やスライドはできるだけ避けたい。研修モデルの利用を広めていくためには、誰もが扱いやすい研修内容、研修教材に改善することが重要である。

研修後、個人への資料の配布と身近なところに操作マニュアルの設置をしたので、状況は改善している。より高い研修成果を目指すには、ウイルスチェックが習慣化するような働きかけを、今後、継続して行っていかなければならない。

（４） 実践事例 その４

研修テーマ 「本当は消去できていない！？ ～データを完全に消去する方法～」

1. 研修の目的

まず、「完全消去」という言葉について確認しておく。本稿におけるこの言葉は本研修で用いたアプリケーション上の表現であり、「完全削除」と置換してもなら相違ない。

さて、本研修モデルの主たる目的は、ファイル削除に対する理解を深めUSBメモリ等のメディアから、指定したファイルを完全に削除する方法を身に付けることである。従って、セキュリティ全般に関する概論や総論は他に譲ることになる。

コンピュータにおけるデータ削除の危うさは、「削除」ということばそのものの認識が間違っていることにある。OSの仕様ではあるが、パソコン利用者に重大な誤りを与えていることになる。OS上の削除コマンドでは、見かけ上ファイル名が消えるだけで、ファイル本体は残っているということである。

本研修モデルは、一般的なファイル削除が如何に不十分で危険であるかということ認識し、全教職員がファイルを完全に削除する技術の習得ができることを期待するものである。

2. 研修の内容

【研修の展開】

活 動	留 意 点
1 課題を確認する。	「完全消去の意味を知る。」 「完全消去の方法を知る。」
2 普段使うデータの消去方法を確認する。	・ゴミ箱へ移すことや、右クリックから削除コマンドができることを確認させる。

3 データの復元の実演を行う。	・フリーソフトを使って、空になったゴミ箱からファイルを復元する。
4 完全消去の重要性を知る。	・個人情報等が消したつもりでも復元できることにも触れる。
5 完全消去の実習を行う。	・身近にある専用ソフトを用いて実習を行う。
6 まとめをする。	・まとめとして三つの提言をする。

3. 研修モデルの評価

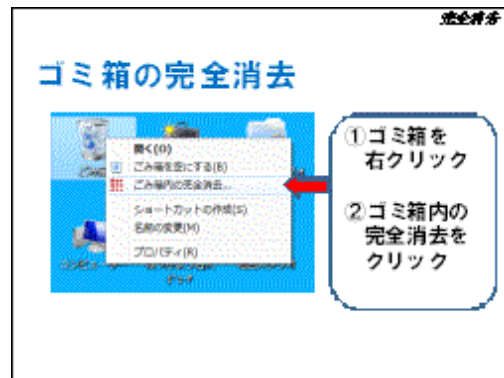
本研修モデルでは、普段行うファイルの削除方法では実際のデータ部分が消えないことを知る。「普段行うファイルの削除方法」とはファイルをゴミ箱に移し、ゴミ箱を空にする方法や、右クリックのメニューから、削除を選ぶ方法である。

それを、実感させるために「普段行う」方法で削除されたファイルの復元を実演した。

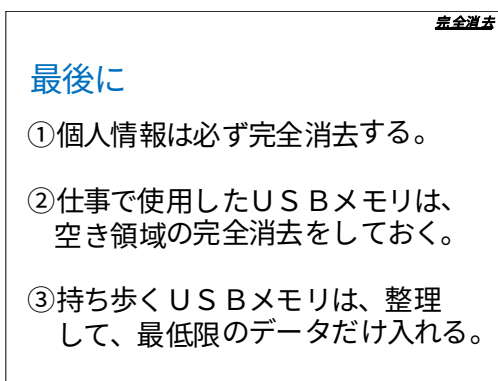
データが容易に復元されることで完全消去の必要性を感じさせ、その上で完全消去の演習を行った。演習を行う際には、不慣れな者でも扱えるよう提示資料に配慮した。

まとめとして以下の三つの提言をした。第一に「個人情報はず必ず完全消去すること」。第二に「USBメモリの空き領域の完全消去の励行」。第三に「持ち出すデータの極小化と精選」である。

本研修の中核を成すのは実演と実習である。実際に見ることや、操作することで、より研修効果が高まるものと考えている。



【図12：提示資料】



【図13：提示資料】

○研修前の教職員の実態調査結果

【表12：研修実施直前のアンケート集計結果】 (回答数27人) 人(%)

	アンケート内容			
事前	1.私物のUSBメモリ等に個人情報を入れたことはありますか？	はい 24(88.9)	いいえ 3(11.1)	持っていないので該当しない 0
	2.個人情報を除去する場合、どうしていますか？	完全消去 2(7.4)	ゴミ箱からも削除 2(7.4)	右クリックで削除 ゴミ箱へ移動 23(85.2)

表12は研修前の教職員の実態調査結果である。

項目1からわかるようにUSBメモリの使用に際し、個人情報を伴う者が全体の88.9%を占める。大勢を占めると言って過言ではない。それにも関わらず、項目2に

見られるように、完全消去を行っていた職員は2名のみであった。

故にほとんどの職員が持つUSBメモリの中には、個人情報と思われるファイルが残っていることとなる。これは由々しき状態である。

○研修実施直後のアンケート調査による研修モデル評価

[表1 3：研修実施直後のアンケート集計結果] (回答数27人) 人(%)

	アンケート内容	そう思う	ややそう思う	少し思わない	そう思わない
直後	1.今回研修で提示した資料は分かりやすかったですか？	11(40.7)	16(59.3)	0	0
	2.完全消去の意味は理解できましたか？	19(70.4)	8(29.6)	0	0
	3.完全消去の方法は理解できましたか？	15(55.6)	11(40.7)	1(3.7)	0

表1 3は研修直後の調査結果である。

研修資料に関する項目1では、ややそう思うが59.3%と半数を超えるため、より精練された資料の必要性を感じるが、職員の理解に関する項目2及び3の評価は良好と言える。

4. 研修モデルによる教員研修の効果と考察

研修直後アンケートの自由記述より、本研修の効果として以下の3点挙げられる。第1に削除、消去だけでは不完全であり、完全消去が必要なことを理解できたという点。第2に不完全な削除により残っているデータがあるという事象への危機感。第3に校務のやり方そのものに対する意識の変容である。

第1の点であるが「個人情報はず必ず完全消去していこうと思う」「消去削除だけでは簡単に復元できるということ」などが見られた。この類の記述は多く見られ、意識の高まりがうかがえる。また、削除ファイルの復元に関する理解も深まったと考えられる。

第2の点。「ゴミ箱を空にして、何となく安心していたが、それでは危険なことがよくわかった」「空き領域に見えない情報がのこっているのはこわいと思いました」これらの記述に見られる「危険」「こわい」のように情報が残っていることに対する危機感を感じ取ることができる。この危機感が情報セキュリティに対する意識の変容へとつながっていくものと考えている。

第3の点で見られた記述は「何でも保存してしまうが、整理してUSBメモリには最低限のデータだけ入れておいて、必要がなくなれば確実に消去しようと思う」というように、校務のやり方そのものに対する意識の変容が見られたことは特筆すべき成果と考える。なぜならば研修を行うことで一朝一夕に職員の行動変容が望めるのではなく、何度も研修を繰り返し行うことで少しずつ変化していくものと考えているからである。

研修内容の理解については良好な結果が出たといえる。これは、本研修モデルは演習を用いた個別具体的な内容であったためと考える。既知と思っていたことが誤りであることから危機感が生じ、そこから演習に入ったことで高いモチベーションを維持できたのではないだろうか。

さて、本件に求められるのは、今後の教職員の「完全消去」に関する行動様式の変容における動向であり、追跡調査が必要である。

(5) その他の研修モデル (実践検証なし)

研修テーマ 「強いパスワードを作ろう」

1. 研修の目的

近年、個人情報流出する事件が相次ぎ、問題視されている。校務において児童生徒の個人情報を取り扱うことが多いなかで、個人情報をどう守っていくかが、必然的に重要になってきている。個人情報を守る方法として、パソコンやフォルダ、ファイルに「パスワードを設定する」という方法は広く使用されている。しかし、パスワードを設定すれば安心だと考え、安易なパスワードを設定してしまうことも予想される。

本研修モデルでは、パスワードにも強弱があることを理解し、「強いパスワードを作成できるようになること」を第一の目的として設定した。

コンピュータ操作に慣れていない人にも理解しやすいように演習を取り入れ、パスワードの作成手順を段階的に提示しながらパスワードを作成していけるよう工夫した。個人情報を守るため、より強固なパスワードを設定し、運用する意識を高めることをねらいとしている。

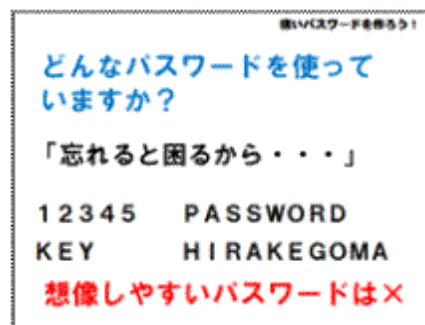
2. 研修の内容

【研修の展開】

活 動	留 意 点
1 課題を確認する。	○2つの課題を提示する。 ・強いパスワードを知る。 ・強いパスワードの作成方法を知る。
2 パスワード解除ソフトの存在と仕組みを知る。	○実際に使用しているパスワードを想起させる。 ○解除ソフトの仕組みから、弱いパスワードと強いパスワードについて考えさせる。
3 強いパスワードを知り、手順にそって実際に作成する。 【演習】3種類のパスワードを作成する。	○プレゼンテーションソフトで提示している作成手順に沿って、ワープロソフト等に文字入力をさせる。 ・時間があれば、各自でパスワード例を考え、交流してもよい。(交流したパスワードは、実際に使用しないよう注意が必要)
4 パスワードの効果的な運用を知る。	○運用の例を提示する。
5 まとめ	○本研修の課題・内容を振り返りながら確認する。 ○注意点やメモについて確認する。

本研修モデルでは、まず初めに、「強いパスワードを知る」「強いパスワードの作成方法を知る」の2つの課題を確認する。また、それらの知識から、強いパスワードを設定し、運用できるようになることを目標としていることを伝える。

パスワードを設定した経験の有無は人により異なっている。どんなパスワードを設定するか想起させることで、経験の有無に関わらず、パ



[図14：提示資料]

パスワードの強弱を意識する足がかりになると考えた。その後、パスワードにも想像されやすいものがあることや、解除するソフトがあることを知ること、強いパスワードを設定する意識が高まると考える。特に、想像されやすいパスワードの例を多く知らせることは、より強いパスワードの作成にも繋がり、重要である。

そして、総当たり攻撃や辞書攻撃といった解除ソフトの仕組みから、弱いパスワードや強いパスワードについての理解を深めた後、強いパスワードの作成方法について説明し、演習を行う。

パスワードを入力する際、入力した文字がアスタリスク（*）等で表示されることが多く、目で確認することが少ないので、演習ではワープロソフト等を使って文字入力を行い、ローマ字の大文字や記号を正しく入力できるよう確認する。作成方法の違う3種類のパスワードを、手順にそって入力していくことで、本研修モデルの目的である「強いパスワードを作成できるようになること」に繋がると考える。

また、3種類のパスワードの解除にかかる時間を提示し、強いパスワードを作成することへの意欲を高める。時間があれば、各自でパスワードの例を考えてもらい、交流できると良い。ただし、交流したパスワードを個人のパスワードとして使用しないよう注意が必要である。

演習が終了した後には、パスワードの効果的な運用について説明する。強いパスワードを設定することで、利便性が失われてしまうことが予想される。そうしたデメリットを最小限にするための運用の工夫を紹介する。

最後は、研修内容を振り返り、強いパスワードを作成するときの注意点や、パスワードをメモする場合の保管について確認する。

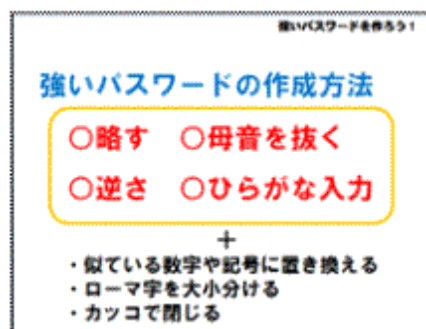
3. 研究モデル作成過程における改善点

本研修モデルを開発する過程で、中学校教員による研修モデル資料評価の結果から、「わかりやすさ」「見やすさ」の改善点を検討した。挙げられた改善点は、「文字について」「研修の流れについて」の2点だった。

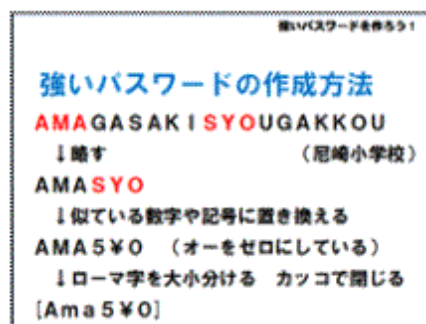
まず、「文字について」は、スライド1枚の文字数が多いことと、文字のサイズが小さいことが挙げられた。これに対して、全てのシートの文字のサイズを2～12ポイント上げ、最小の文字サイズも20ポイントから32ポイントに改善した。

そして、少ない文字数で表現を工夫することや、必要性の低い説明箇所を省き、研修目的につながる最低限の情報のみを記述することで、スライド1枚の文字数を最大50%減らした。スライド1枚の文字数は50～60文字を基本として、どんなに多くても100文字以内になるよう再編集した。

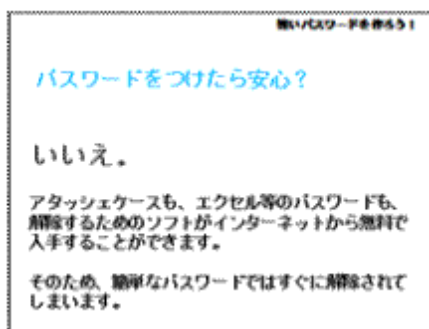
他にも、各スライドの見出しの色が見えにくいということがあったので、見やすくなるよう濃い色に変更した。



[図15：提示資料]

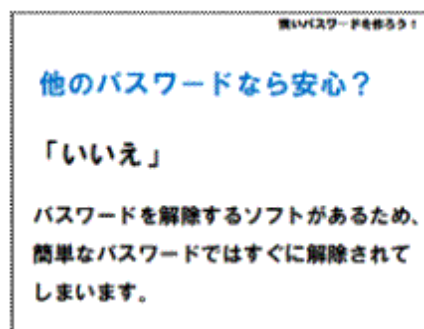


[図16：提示資料]



[図 17：提示資料]

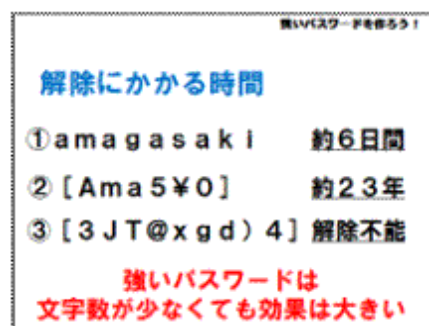
▲改善前



[図 18：提示資料]

▲改善後

次に、「研修の流れについて」は、安易なパスワードだと破られやすいことが分かるが、強固なパスワードにすると、どれほどの効果があるか分からないということが挙げた。これに対して、パスワードごとの解除にかかる時間を一覧にし、強固なパスワードにすることの効果の大きさが印象づけられるように改善した。



[図 19：提示資料]

4 学校情報セキュリティ研修モデルカリキュラムの提案

本年度は、実践による検証ができていない研修モデルはもとより、まだ提示教材が完成していないものも含め、情報セキュリティ研修のカリキュラム（試案）をここに提案する。これらの中から、必要とするものを選び、1年間、無理があるようであれば数年間を見通して、それぞれの学校の実情に応じた研修計画を立てていただきたい。

【学校情報セキュリティ研修モデルカリキュラム試案】

番号	研修タイトル／目的	形態	時間 (分)	内容
1	「こんなものも個人情報」 (1)個人情報の定義を知る。 (2)学校で扱う個人情報を確認する。	講話	15	個人情報の保護に関する法律等により個人情報の定義を理解する。次に学校にある個人情報について考え、学校にある個人情報を再確認していく。
2	情報事故の原因と傾向 情報事故が発生した際の影響 NTT (1)情報事故の原因と傾向について知る。 (2)情報事故が発生した際の影響について知る。(考える)	講話	15	情報事故件数や事故原因の推移から、ヒューマンエラーが大多数を占めていることを理解する。児童・生徒、保護者が受ける被害、事故を起こした本人への影響、組織への影響を理解する。

3	「情報事故事例」から学ぶ NTT (1)情報事故を防ぐ方法を考える。 (2) 自分の日頃の行動の問題点を見つけ、改善できるようにする。	講話 演習	30	いくつかの事例について知り、どのようにすれば事故を防ぐことができたか話し合いながら、自分自身の日頃の行動と比較する。
4	外部記録媒体 (USBメモリ等) の取扱いに関する留意事項 NTT 外部記録媒体 (USBメモリ等) の正しい取扱い方法を理解する。	講話	15	外部記録媒体 (USBメモリ等) の取扱いルールや廃棄の方法について確認する。 [追加内容] 市の利用規程
5	コンピュータウイルスは こうしてやってくる！ ～コンピュータウイルスの手口の理解～ コンピュータウイルスに感染させるための手口を理解する。	講話	15	インターネット利用を次の4つに分け、それぞれの危険について考える。 ・ホームページを見ること ・メールを読むこと ・USBメモリを挿すこと ・更新をしないこと
6	Winny(ウィニー), Share(シェア)等のファイル交換ソフトウェアによる情報流出の防止策 NTT ファイル交換ソフトウェアによる情報流出の防止策について理解する。	講話	15	Winny(ウィニー)による情報流出の仕組みから、ファイル交換ソフトウェアによる情報流出の防止策について考える。
7	USBメモリの整理と管理 ～情報事故を防止するために～ (1)USBメモリについて詳しく知る。 (2)USBメモリの整理と管理の仕方を考える。	講話	15	USBメモリとはどんなものか、その容量などを知り、情報の種類によるUSBメモリの整理と管理の方法について学ぶ。 [追加内容] 校内でも個人情報の含まれるUSBメモリーを持ち歩かない
8	なんでしなくちゃいけないの？ 情報セキュリティ コンピュータやネットワークを安全に利用するために、情報セキュリティの必要性について理解する。	講話	15	パスワードの設定やソフトウェアの更新、ウイルス対策、USBメモリ等の管理について、情報セキュリティの面からその必要性について学ぶ。

9	コンピュータウイルス ～ウイルスの感染を防ぐには～ (1) コンピュータウイルスとはどんなものなのか、どんな被害を及ぼすのかを知る。 (2) コンピュータウイルスに感染しないための方法を知る。	講話 演習	20	コンピュータウイルスについて、その活動や感染経路、感染した場合の被害について、感染しないための方法を学ぶ。
10	ウィルスチェックをしよう (1) 学校にあるPCのウイルス対策ソフトの現状を知る。 (2) 自分の持っているUSBメモリなど記憶媒体のウイルスチェックができるようになる。 (3) ウィルスが見つかったときの対処の仕方を知る。	演習	30	本市のウィルス対策の現状を知り、ウィルスチェックの方法について演習する。ウィルスが見つかった場合について、それぞれがどこまですればよいのか理解しておく。
11	強いパスワードを作ろう！ ～強固なパスワードの理解と作成方法～ 強固なパスワードはどんなものか理解し、その作成方法を身につける。	講話 演習	20	パスワードには強弱があることから、強固なパスワードの作成方法を知り、実際に作成する。 【追加内容】授業で利用するパソコンのデスクトップに成績や個人情報を置いてないか。
12	パスワードをつけよう！ ～Windows～ ～ワード・エクセル・太郎 ・その他(アタッシュケース)～ ファイルやフォルダにパスワードを設定することができる。	演習	30	日頃よく使う、代表的なアプリケーションのファイルにパスワードを設定する。また、暗号化ソフトを利用して、パスワードを設定するとともに、暗号化や復号化を行う。
13	データの完全消去を知っていますか？ (1) 完全消去の意味を知る。 (2) 完全消去の方法を知る。	講話 演習	30	日頃、よくしている削除方法と完全消去の違いを知り、専用ソフトを使って完全消去を行う。
14	家のパソコン大丈夫？ (1) 自宅パソコンの危険性を知る。 (2) 具体的に危険とは何かを知る。 (3) 危険に会わないようにするための方法	講話	15	自宅のパソコンはインターネットにつながっていないからといって安心できないことや、インターネットのにつながっているが、セキュリティソフトを入れて

	を知る。		いるからといって安心できないこと、ファイル共有ソフトの危険性について学ぶ。 [追加内容] ネットにつながっていないPCも危ない ・ウィルス対策しているか ・OSやソフトウェアの更新をしているか ・ファイル共有ソフトを使っているか
--	------	--	--

5 『セルフチェック de セキュリティアップ』の開発

校内での教職員研修に加え、個々の教職員が自己のセキュリティに関する知識を習得するため、すき間の時間を利用して、楽しみながら取り組むことができる環境作りに取り組んだ。今回開発したWebブラウザで実施できる『セルフチェック de セキュリティアップ』

(学校情報セキュリティクイズ)は、市内イントラネットを利用し、特に学校での情報セキュリティに主眼を置いたクイズが出題されるソフトウェアである。クイズに答えることで知識を獲得するとともに、セキュリティに関する意識向上を図る教材コンテンツである。

本コンテンツは、「練習」「基本」「応用」の3つのランクの三択クイズに自由に挑戦できるようになっている。もちろん各回答には学びを支援する解説がついているので、これをやるだけで学べる。名前(ニックネームでもよい)を登録して実施し、結果の保存や履歴の確認・印刷も行える。さらに基本問題と応用問題を組み合わせた「テスト」問題では、2回100点を取ると「学校情報セキュリティマスター認定証」を取得することもできる。

また、管理者側では、問題の追加変更が可能なので、最新のセキュリティ情報をクイズとして登録することができる。そして、利用データから、よく間違える問題を抽出することで、本市の課題を見つけるための参考資料にもなる。

[図20：提示資料]

[図21：提示資料]

練習 **第1問**

コンピュータを利用中に来客があった場合の対処について正しいものはどれでしょう

1. 来客を待たせてはまずいので、直ちに席を立てて対応する。
2. スクリーンセーバーが起動するまでコンピュータ前で待ってから来客の対応をする
3. 直ちにスクリーンセーバーを起動させ、来客の対応をする

[図 2 2：提示資料]

練習 5問中、2問正解!!
正解率は、40%でした!

第1問 ☐ 第2問 ☒ 第3問 ☒ 第4問 ☐ 第5問 ☒

ウイルス対策ソフトについて、正しいものはどれですか。

1. どのウイルス対策ソフトも、毎月使用料を支払う。
2. どのウイルス対策ソフトも、購入時のみ料金を支払う。
3. ウイルス対策ソフトには、無料のものもある。

1. ウイルス対策ソフトには、購入時のみ料金を支払うものや無料のものもあるので、×です。
2. ウイルス対策ソフトには、毎月使用料を支払うものや無料のものもあるので、×です。
3. ウイルス対策ソフトには、有料のものだけではなく、無料のものもあるので、○です。

[図 2 3：提示資料]

6 おわりに

本年度、教育の情報化研究部会では、教員の誰でもが、簡単に、安全に個人情報管理・利用できるようになることを目標に、学校情報セキュリティに関する研修モデルカリキュラムを検討し、複数の研修モデルの開発と研修実践を行った。

詳細は各稿に譲るが、今年度の取り組みを通して教員の情報セキュリティに対する意識や個人情報を守るためのスキルに大きな個人差があることが見えてきた。

個々の研修モデルを用いた研修実践では目標とする成果が達成できたと考えられるが、これらを統合した研修カリキュラムとして機能するかどうかは、今後の研究課題と考えられる。

また、AMA-NET規定やセキュリティポリシーの遵守、情報の持ち出し禁止など、個人の情報セキュリティに対する意識をさらに高める必要を感じた。ログインパスワードの設定など、学校で利用するパソコンの仕様やハード面の整備だけで情報セキュリティを保護するには限界がある。教員が研修を通して情報セキュリティに関するスキルを向上させる必要があるが、それ以上に個人情報の保護に対する意識を高めなければならない。

如何にして、各人の個人情報保護に対する意識を高め、研修カリキュラムの内容がスキルとして生かされるかということについても、今後に向けた大きな課題であると言わざるを得ない。

(参考文献・資料)

- ・ 学校で取り組む 情報社会の安全・安心 堀田龍也・平松 茂 編著
- ・ 教育の情報化に関する手引 文部科学省
- ・ 情報管理基礎研修(教材集) NTTドコモ
- ・ 国民のための情報セキュリティサイト 総務省
- ・ ウイルス対策 スクール 独立行政法人 情報処理推進機構 (IPA)
- ・ セキュリーマン検定 フレッシュヤーズ 日立ソリューションズ

aaaさんの研修履歴 **印刷**

練習 48回	最高正解率: 100% 平均正解率: 26%	基本 25回	最高正解率: 100% 平均正解率: 11%
応用 10回	最高正解率: 100% 平均正解率: 55%	テスト 47回	最高正解率: 100% 平均正解率: 68%

日時	種類	問題数	正解数	正解率
2011/11/15 10:42	練習	5	1	20
2011/10/11 09:32	テスト	15	15	100
2011/10/11 09:30	練習	5	3	60
2011/09/29 13:51	テスト	15	15	100
2011/09/21 14:48	基本	13	1	7
2011/09/21 14:47	練習	5	0	0
2011/09/21 14:39	テスト	15	1	6

全体 練習 基本 応用 テスト グラフ

※平均正解率は直近3回分の集計結果です。
※ボタンのクリックで研修履歴の絞り込みができます。

閉じる

[図 2 4：提示資料]



[図 2 5：提示資料]

平成23年度 尼崎市立教育総合センター

専任講師

環太平洋大学
京都女子大学
奈良教育大学
兵庫教育大学
兵庫教育大学
園田学園女子大学

教授	住本	克彦
教授	吉永	幸司
准教授	伊藤	剛和
准教授	加藤	久恵
准教授	今井	裕之
准教授	廣岡	正昭